

深江地区遺跡群

深江城崎遺跡

—福岡県糸島市二丈深江字城崎所在遺跡の発掘調査報告書—

糸島市文化財調査報告書

第 29 集

2023

糸島市



1-1 深江城崎遺跡全景（深江湾を望む）



1-2 深江城崎遺跡全景（真上から）

巻頭図版 2



2-1 谷部包含層 (西から)



2-2 外来系土器出土状況 (南から)



2-3 大形器台出土状況 (西から)



2-4 谷部包含層土器出土状況 (西から)



2-5 谷部包含層土器出土状況 (西から)



2-6 谷部包含層槽出土状況 (北から)



2-7 34号土坑切断材出土状況 (北から)

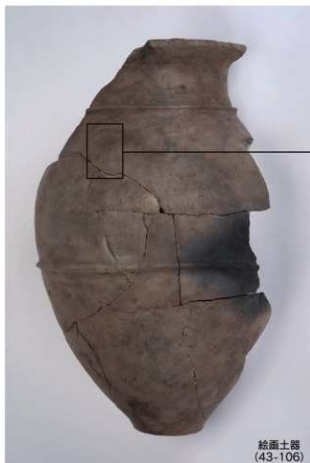


2-8 51号土坑切断材出土状況 (西から)



深江城崎遺跡出土遺物写真①

卷頭図版 4



序

本書は、令和3年度に、糸島市二丈深江における宅地造成に伴い実施した深江城崎遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡が所在する糸島市は、中国の歴史書『魏志倭人伝』に記される「伊都国」に比定される場所で、中国・朝鮮半島との交流を基礎に、弥生時代の政治・外交・経済の中心地として発展し、わが国の歴史を考える上で重要な役割を果たしています。

さて、本書に収められた深江城崎遺跡は、「伊都国」の西の玄関口として栄えた拠点集落の一部を発掘調査したもので、弥生時代を主体とする土器・青銅器・石器・木器などが出土し、この拠点集落の様相を解き明かす重要な資料が出土しました。

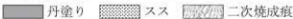
本書は、このような貴重な成果をまとめ、皆様に公開するものであり、当地の歴史を解明する上での一助となれば幸いです。

なお、末筆となりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました周辺住民の方々ならびに報告書作成にあたり、ご協力いただきました関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和5年3月31日

糸島市長
月形祐二

例言

1. 本書は宅地造成に伴い、令和3年度に糸島市が行った深江城崎遺跡の発掘調査の記録である。
2. 深江城崎遺跡は、糸島市二丈深江に所在し、約2,101㎡にわたって遺構、遺物を確認、発掘調査を行った。
3. 遺構の実測にあたっては、江崎靖隆、秋田雄也が行い、鞆島田組の協力を得た。
4. 遺構の写真は、空中写真を（有）空中写真企画に委託し、その他は江崎、秋田が行った。
5. 遺物の復元は、田中阿早緑、藤野さゆり、蔵田和美、内山久世、山崎嵩雄、田尻裕泰が行った。
6. 遺物の実測は、江崎・秋田の他に、田中、藤野、蔵田、内山、山崎、田尻、畑迫優香、川島美穂が行い、一部は鞆島田組に委託した。また、石器の実測にあたっては平尾和久の多大なる協力を得た。遺物の製図は、藤野、内山、田尻が行った。
7. 遺物の写真は、江崎、秋田のほか、一部の遺物撮影は、（有）システム・レコに委託した。
8. 本書に掲載する全体図及び遺構図で使用した座標は、世界測地系平面直角座標系第Ⅱ系に準拠した。また、図中に使用する方位は国土座標の座標北で、真北から0° 19′ 西偏している。
9. 出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下のとおり

10. 出土木製品の樹種同定は一般社団法人 文化財科学研究センターが行い、その報告もあわせて依頼した。
11. 本調査に伴う出土資料および記録類は、糸島市に収蔵保管し、利用に供する予定である。
12. 本書の執筆は、江崎靖隆、秋田雄也、石器の執筆は平尾和久が行い、編集は江崎が行った。
13. 本書の作成にあたり、金原美奈子、金原裕美子、鶴来航介、山口談治、山田昌久のご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

本文目次

第1章 はじめに（江崎）	1
I. 調査に至る経緯	1
II. 調査の組織	1
第2章 位置と環境（江崎）	2
I. 地理的環境	2
II. 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	5
I. 深江城崎遺跡の調査概要（江崎）	5
II. 基本層序（江崎・秋田）	6
III. 遺構と遺物	13
1. 第1面の遺構と遺物（秋田）	13
(1) 掘立柱建物	
(2) 溝	
(3) 土坑	
(4) 柱穴	
(5) ビット	
(6) 不明遺構	
2. 第2面の遺構と遺物（秋田）	32
(1) 掘立柱建物	
(2) 土坑	
3. 谷部包含層（江崎・平尾）	45
(1) 概要	
(2) 遺物の出土状況	
(3) 土器（上層）	
(4) 土器（中層）	
(5) 土器（下層）	
(6) 内面朱付着土器	
(7) 外来系弥生土器・在地系有文土器	
(8) 楽浪系土器	
(9) 石器（上層）	
(10) 石器（中層）	
(11) 石器（下層）	
(12) 金属器	
4. 出土木製品（江崎）	96
5. まとめ（江崎）	119
第4章 深江城崎遺跡における樹種同定および種実同定（一般社団法人 文化財科学研究センター）	123
I. 樹種同定	123
II. 種実同定	129

挿 図 目 次

第1図	糸島市の所在地	2	第37図	谷部包含層出土土器実測図③	(1/4)	54
第2図	糸島市内主要遺跡分布図 (1/150,000)	3	第38図	谷部包含層出土土器実測図④	(1/4)	56
第3図	周辺主要遺跡分布図 (1/10,000)	4	第39図	谷部包含層出土土器実測図⑤	(1/4)	57
第4図	深江城崎遺跡全体図① (第1面) (1/300)	7	第40図	谷部包含層出土土器実測図⑥	(1/4)	58
第5図	深江城崎遺跡全体図② (第2面) (1/300)	9	第41図	谷部包含層出土土器実測図⑦	(1/4)	59
第6図	谷部東西土層断面実測図 (1/50)	11	第42図	谷部包含層出土土器実測図⑧	(1/4)	61
第7図	1号掘立柱建物平面断面図 (1/40)	13	第43図	谷部包含層出土土器実測図⑨	(1/4)	62
第8図	1号溝平面断面図 (1/40)	14	第44図	谷部包含層出土土器実測図⑩	(1/4)	63
第9図	1号溝出土土器実測図 (1/4・●は1/6)	15	第45図	谷部包含層出土土器実測図⑪	(1/4)	64
第10図	1号溝出土土器実測図 (1/3)	16	第46図	谷部包含層出土土器実測図⑫	(1/4)	65
第11図	1～14号土坑平面断面図 (1/40)	21	第47図	谷部包含層出土土器実測図⑬	(1/4)	67
第12図	15～26号土坑平面断面図 (1/40)	22	第48図	谷部包含層出土土器実測図⑭	(1/4)	68
第13図	27・28号土坑平面断面図 (1/40)	23	第49図	谷部包含層出土土器実測図⑮	(1/4)	69
第14図	土坑出土遺物実測図① (1/4)	24	第50図	谷部包含層出土土器実測図⑯	(1/4)	70
第15図	S P (柱穴) 平面断面図① (1/40)	27	第51図	谷部包含層出土土器実測図⑰	(1/4)	71
第16図	S P (柱穴) 平面断面図② (1/40)	28	第52図	谷部包含層出土土器実測図⑱	(1/4)	72
第17図	S P (柱穴) 出土土器・石器実測図 (●は1/3・1/4)	30	第53図	谷部包含層出土土器実測図⑲	(1/4)	73
第18図	196号ピット出土土器実測図 (1/3)	31	第54図	谷部包含層出土土器実測図⑳	(1/4)	75
第19図	SX-01出土土器実測図 (1/3)	31	第55図	谷部包含層出土土器実測図㉑	(1/4)	76
第20図	2号掘立柱建物平面断面図 (1/40)	33	第56図	谷部包含層出土土器実測図㉒	(1/4)	77
第21図	2号掘立柱建物出土金属器実測図 (1/2)	33	第57図	谷部包含層出土土器実測図㉓	(1/4)	78
第22図	3号掘立柱建物平面断面図 (1/40)	34	第58図	谷部包含層出土土器実測図㉔	(1/4)	79
第23図	4号掘立柱建物平面断面図 (1/40)	35	第59図	谷部包含層出土土器実測図㉕	(1/4)	80
第24図	5号掘立柱建物平面断面図 (1/40)	36	第60図	内面朱付着土器実測図 (1/4)	81	
第25図	29～36号土坑平面断面図 (1/20)	38	第61図	外来系弥生土器実測図① (1/4)	83	
第26図	37～46号土坑平面断面図 (1/20)	40	第62図	外来系弥生土器実測図② (1/4)	84	
第27図	47～52号土坑平面断面図 (1/20)	42	第63図	楽浪系土器実測図 (1/4)	84	
第28図	53～55号土坑平面断面図 (1/20)	43				
第29図	土坑出土遺物実測図② (●は1/3・1/4)	44				
第30図	谷部包含層上層土器群1遺物出土状況 (1/20)	45				
第31図	谷部包含層上層土器群2遺物出土状況 (1/20)	46				
第32図	谷部包含層中層土器群3遺物出土状況 (1/20)	46				
第33図	谷部包含層遺物出土状況実測図(上層) (1/50)	47				
第34図	谷部包含層遺物出土状況実測図(中層) (1/300)	49				
第35図	谷部包含層出土土器実測図① (1/4)	52				
第36図	谷部包含層出土土器実測図② (1/4)	53				

第64図	谷部包含層出土石器実測図① (1/3)	88
第65図	谷部包含層出土石器実測図② (1/3)	89
第66図	谷部包含層出土石器実測図③ (1/3)	90
第67図	谷部包含層出土石器実測図④ (1/4)	91
第68図	谷部包含層出土石器実測図⑤ (1/3)	92
第69図	谷部包含層出土石器実測図⑥ (1/3)	94
第70図	谷部包含層出土石器実測図⑦ (1/3)	95
第71図	谷部包含層出土石器実測図⑧ (1/3)	96
第72図	谷部包含層出土金属器実測図 (1/2)	96
第73図	谷部包含層木器出土位置図 (1/100)	97
第74図	工具 (1/4)	98

第75図	農耕具 (1/4)	99
第76図	漁労具 (1/4)	100
第77図	紡織具 (1/4)	100
第78図	容器① (1/4)	103
第79図	容器② (1/4)	104
第80図	容器③・食器具① (1/4)	105
第81図	食器具②・雑具 (1/4)	106
第82図	建築材・その他・用途不明品・切断材・ 転用材 (1/4)	107
第83図	切断材・転用品① (1/6)	111
第84図	切断材・転用品② (1/6・●は1/8)	112
第85図	切断材・転用品③ (1/6)	113
第86図	切断材・転用品④ (1/6)	114
第87図	切断材・転用品⑤ (1/6)	115
第88図	切断材・転用品⑥ (1/6)	116
第89図	切断材・転用品⑦ (1/6)	117
第90図	切断材・転用品⑧ (1/6)	118
第91図	深江城崎遺跡および原の辻遺跡出土絵 画土器比較図 (1/4・1/12)	120
第92図	木器生産遺構位置図 (1/300)	121

図 版 目 次

巻頭図版1-1	深江城崎遺跡全景(深江湾を望む)
巻頭図版1-2	深江城崎遺跡全景(真上から)
巻頭図版2-1	谷部包含層(西から)
巻頭図版2-2	外来系土器出土状況(南から)
巻頭図版2-3	大形器台出土状況(西から)
巻頭図版2-4	谷部包含層土器出土状況(西から)
巻頭図版2-5	谷部包含層土器出土状況(西から)
巻頭図版2-6	谷部包含層槽出土状況(北から)
巻頭図版2-7	34号土坑切断材出土状況(北から)
巻頭図版2-8	51号土坑切断材出土状況(西から)
巻頭図版3	深江城崎遺跡出土遺物写真①
巻頭図版4	深江城崎遺跡出土遺物写真②
図版1-1	深江城崎遺跡第1面全景(真上から)
図版1-2	谷部包含層遺物出土状況(真上から)
図版2-1	第1トレンチ全景
図版2-2	18号土坑検出状況
図版2-3	1号溝検出状況
図版2-4	谷部包含層土器出土状況
図版2-5	外来系大形器台
図版2-6	大形器台出土状況
図版3-1	L字形石杵出土状況
図版3-2	槽蓋出土状況
図版3-3	深江城崎遺跡谷部包含層(真上から)

図版3-4	調査区北側土器群検出状況(第2面)
図版3-5	調査区南側土器群検出状況(第2面)
図版4-1	調査区南側土器群検出状況(第2面)
図版4-2	調査区南側土器群検出状況(第2面)
図版4-3	槽出土状況
図版4-4	把手付槽出土状況
図版4-5	背負子出土状況
図版4-6	広鉢出土状況
図版5-1	深江城崎遺跡第2面全景(真上から)
図版5-2	34号土坑切断材出土状況(北から)
図版5-3	51号土坑切断材出土状況(西から)
図版6	深江城崎遺跡出土遺物①
図版7	深江城崎遺跡出土遺物②
図版8	深江城崎遺跡出土遺物③
図版9	深江城崎遺跡出土遺物④
図版10	深江城崎遺跡出土遺物⑤
図版11	深江城崎遺跡出土遺物⑥
図版12	深江城崎遺跡出土遺物⑦
図版13	深江城崎遺跡出土遺物⑧
図版14	深江城崎遺跡出土遺物⑨
図版15	深江城崎遺跡出土遺物⑩
図版16	深江城崎遺跡出土遺物⑪
図版17	深江城崎遺跡出土遺物⑫

写 真 目 次

写真1	2号掘立柱建物出土銅鏃	33
-----	-------------	----

第1章 はじめに

I. 調査に至る経過

令和3年4月7日付で、昭和建設株式会社から糸島市二丈深江1818～1822番地の宅地造成工事9,371㎡に関して、埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第94条第1項）が、糸島市教育委員会文化課に提出された。

対象地周辺は、深江井牟田遺跡から道路を挟んだ東側隣地であり、楽浪系土器や中国式銅剣が出土する重要地域であることから、事業対象区の試掘調査が必要な旨を回答した。試掘調査は、地権者承諾の元に、前年度の令和2年4月14日、6月17日の2回に分けて行い、その結果、開発全体の東半分を中心に、砂丘と谷部が存在し、遺構や遺物が濃く分布することから、遺跡が破壊される場合、発掘調査が必要であることが明らかとなった。

文化課は、試掘成果に基づき、開発側と協議を行い、住宅部分については、基礎が造成盛土に収まる建築とし、道路部分のみを調査対象とすることで合意し、発掘調査対象面積は2,101㎡となった。発掘調査は令和3年8月10日に着手し、令和4年3月31日に終了したが、地下水位が高く、湧水がひどかったことや3層にもわたる大量の遺物が出土したことで、時間的にかなり厳しい調査となった。

II. 調査の組織

発掘調査および報告書作成に係る組織は、以下のとおりである。

調査主体者 糸島市教育委員会、糸島市

調査地点 深江城崎遺跡（糸島市二丈深江1818番地ほか）

調査年度 令和3年度

総括	教育長	家宇治正幸
	教育部長	小金丸敏浩
	文化課長	村上 敦
	文化財係長	平尾 和久
事前審査	同 文化財係 主幹	瓜生 秀文
調査担当	同 文化財係 主幹	江崎 靖隆
	同 文化財係 主事	秋田 雄也

報告書作成 令和4年度

総括	地域振興部長	波多江修士
	文化課長	村上 敦
	文化課長補佐兼文化財係長	河合 修
報告書担当	同 文化財係 主幹	江崎 靖隆
	同 文化財係 主幹	平尾 和久
	同 文化財係 主事	秋田 雄也

第2章 位置と環境

I. 地理的環境

糸島市は、平成22年1月1日に、前原市、二丈町、志摩町が合併して誕生し、東は福岡市、西は佐賀県唐津市、南は佐賀県佐賀市に隣接する。

地理的環境としては、南に井原山から雷山、羽金山、女嶽、浮嶽に至る脊振山系の山々と北から西に玄界灘が広がる。主な平野は怡土平野、一貴山・深江平野、糸島低地帯の三か所で、本書に掲載する深江城崎遺跡は、一貴山・深江平野の北部域にあたる。

同地は、一貴山川、羅漢川、柳川によって形成された沖積平野で、海浜部には砂丘が形成される。砂丘は南側から第1砂丘～第3砂丘まであり、第3砂丘（新砂丘）が現在の海岸線によって形成され、第1、2砂丘（古砂丘）が縄文海進時の海岸線に沿って形成される砂丘であり、本遺跡は、この第1砂丘上の遺跡である。

このように、深江地域に広がる遺跡は、古砂丘の影響のもとに展開していると考えられ、調査では、古砂丘の様相を知ることは重要である。



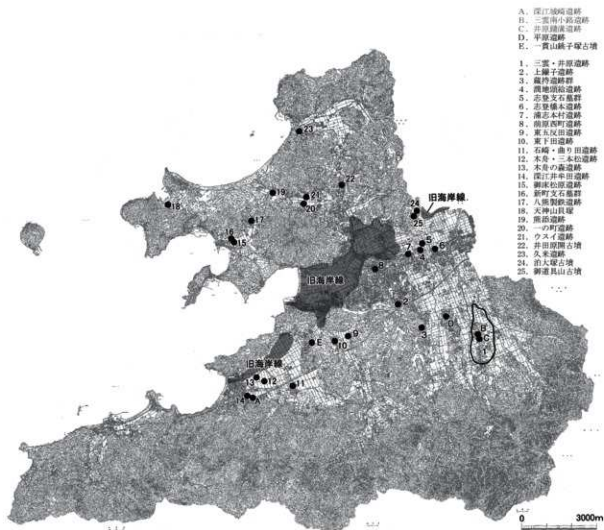
第1図 糸島市の所在地

II. 歴史的環境

深江城崎遺跡が所在する深江地区は、平成2年度に発掘調査が行われた**深江井牟田遺跡（第3図2）**を嚆矢として、遺跡の重要性が認識された。これまでの調査を概観すると、深江井牟田遺跡では、祭祀土坑や谷部の調査により、中国式銅剣や楽浪系土器が出土し、「伊都国」西部における港湾拠点集落の可能性が指摘された。また、**二丈中学校内遺跡（第3図4）**で、竪穴式住居、甕棺墓（弥生時代中期）と大溝（弥生時代後期）、**深江辻遺跡（第3図3）**で甕棺墓（弥生時代後期）が検出されている。大溝は弥生時代後期前半～古墳時代初頭の土器を内包し、環濠もしくは集落北限の区画溝と考えられているが、集落外縁部に甕棺墓域があることから居住域と墓域を区画する溝の可能性が高いと考えられる。この大溝は、深江井牟田遺跡の方向へと延びているが、両者の関連については、調査地点が少なく、大溝の断面形状も特異であるため、慎重に判断すべきであろう。これらの遺跡が分布する古砂丘は、10haの規模であるが、その集落構造については、不明な点が多く、今後の調査に期待するところである。

さて、東側に目を転じると、砂丘と湿地帯が交互に連なる地形を呈していることが、これまでのほ場整備事業（平成3～7年度）に伴う発掘調査によって明らかとなっている。その砂丘上にある**木舟・三本松遺跡（第3図8）**では、1～3次調査で、69基の甕棺墓群（弥生中期）が調査され、管玉や硬玉製勾玉、磨製石剣をもつ甕棺墓が確認されており、弥生時代中期の集落があったものと考えられる。また、**深江・中道遺跡1次調査（第3図5）**では、自然流路（縄文時代晩期～弥生時代早期）と竪穴式住居（古墳時代前期）、**深江・中道遺跡2次調査（第3図6）**で、旧河川（縄文時代晩期～弥生時代後期）と取水施設、杭列、矢板列が確認されている。縄文時代晩期から長きにわたる営みが考えられるが、調査箇所が少なく、不明な点も少なくない。

これまでの調査を勘案すると、深江平野は、弥生時代前期までに陸化が進み、その過程で砂丘と湿地帯が形成されている。**木舟の森遺跡（第3図9）**では、平安時代後期～鎌倉時代の居館跡が確認されており、陸化がさらに進んでいる。この地域の人々は、こうした環境の変化に適応した生活の営みがあったことが、想定される。



第2図 糸島市内主要遺跡分布図 (1/150,000)



1. 深江埤崎道跡 2. 深江井牟田道跡 3. 深江辻道跡 4. 二大中学校校内道跡 5. 深江・中道道跡1次
6. 深江・中道道跡2次 7. 森田道跡 8. 木舟・三本松道跡 9. 木舟の森道跡 10. 曲の田道跡 11. 上深江・小西道跡

第3図 周辺主要道跡分布図 (1/10,000)



第3章 調査の概要

I. 深江城崎遺跡の調査概要

深江城崎遺跡は、糸島市二丈深江字城崎1818番地他に所在する遺跡である。

深江井牟田遺跡の道路を挟んだ隣接地（水田）において、宅地造成が計画され、発掘調査を行った。住宅部分は盛り土により遺跡破壊が免れる計画であったことから、永久構造物である道路部分のみが調査対象となっており、調査面積は2,101㎡である。

本遺跡は、深江井牟田遺跡と同じく古砂丘上にある遺跡と考えられたが、調査結果、調査区西側に砂丘と調査区東側に谷部があり、調査区全体地形として、砂丘から谷部へ落ち込み、比高差は1.5mを測る。深江地区は古砂丘と湿地帯が交互に織りなす複雑な地形で、第1トレンチは、この谷部の状況を把握するために設定し、この谷部が、砂丘間にある湿地帯であることやその湿地帯が砂層と泥炭層の互層で埋没し、弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺物が厚く堆積していることが判明した。

遺構面としては2面を確認し、第1面（弥生時代後期後半～終末期）と第2面（弥生時代中期後半～末）として報告する。また、谷部に含まれている土器は、上層（弥生時代後期後半～古墳時代初頭）、中層（弥生時代中期後半～後期中頃）、下層（弥生時代中期後半）として報告するが、間層がないため、厳密に時期の分離が難しく、前後の土器が含まれる。

第1面では、西側砂丘から谷堆積の一部に至る範囲に掘立柱建物1棟、溝1条、土坑28基、ビット442基を検出した。これらの遺構は、弥生時代中期後半～後期中頃の土器堆積（中層）を壊して作られており、谷部がある程度埋まった段階で構築されている。柱穴は、柱や礎板が残存するものが多くみられたが、調査範囲が限られているために、掘立柱建物として認識できない柱穴が存在する。

第2面では、西側砂丘～谷の一部に及ぶ範囲に掘立柱建物4棟、土坑27基、ビット100基を検出した。第1面と同じく、柱穴には柱や礎板が残存していたが、掘立柱建物として認識できた柱穴は少ない。これら建物群は土坑と関連があり、土坑内からは木器の未成品や転用材、切断材が多く出土していることから、木材の加工場の可能性がある。

谷部は湿地帯上に土器が堆積しており、上層では弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺物が堆積し、大形器台を始めとする外来系土器や内面朱付着土器、楽浪系土器が出土しているほか、在地系大形器台や石杵など注目すべき遺物が数多く出土した。中層では弥生時代中期後半～後期中頃までの遺物が堆積し、4様式末に対応する外来系土器や有意土器が出土した。下層は、茶褐色の植物遺存層（パファン層）で、弥生時代中期後半の土器が含まれる。これらの遺物は、西側居住域に近いところに廃棄されており、西側へ行くほど土器の堆積はなくなっていく傾向にある。また、湧水が激しい場所であるため、木製品が多く出土している。

茶褐色の植物遺存層（パファン層）は東に行くほど厚く堆積しており、調査区東側では、重機で1m50cm以上掘削したが、湧水がひどく、パファン層の下限を知ることができなかった。この過程で、遺構や遺物の出土がなく、時間的制約もあって、トレンチによる確認調査のみとしている。

II. 基本層序

調査区は、西側1/3は低砂丘、東側2/3が谷部となる。低砂丘上は水田面基盤層（第1層）により、削平を受けている。谷部は、調査区北側に第1トレンチ、調査区南壁に第2トレンチを設定し、層位の把握とともに、調査を行った。

1. 第1トレンチ東西土層断面

第1トレンチは調査区北側、谷部の始まりから、遺物が出土する範囲に設定した。土層図の縦方向破線部から西側が調査区内となっており、東側の調査区外と比べて1段低くなっている。調査区内の遺構を傷付けることのないよう、調査区外にもトレンチを設定し、土層の堆積状況を把握した。

第1層から第4層までは現代の水田層で、第5層から第7層は洪水砂層を含む新しい層である。第8層から第15層は暗黒灰色土層で弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器を包含する。ただし、第12層は洪水砂層である。第16層は黒色砂質土で弥生時代後期初頭～中頃の土器を含み、第17層は暗茶褐色粘質土で弥生時代中期末の土器を包含する。トレンチ西側の調査区内については、谷の地形に沿って第14層・18層・19層が地表面上がってくる。第19層は暗灰褐色粘質土の植物遺存層（パファン層）で弥生時代中期後半の土器を含む。第20層以下は遺物を含まないグライ化した土壌である。

各時期の堆積により、弥生時代中期後半の谷部の始まりは、弥生時代後期後半には1.3mほど東へ拡大しており、第13・14層では弥生時代後期後半～終末期の遺構面として機能し、第19層上面で、弥生時代中期後半の遺構面を検出している。

2. 第2トレンチ東西土層断面

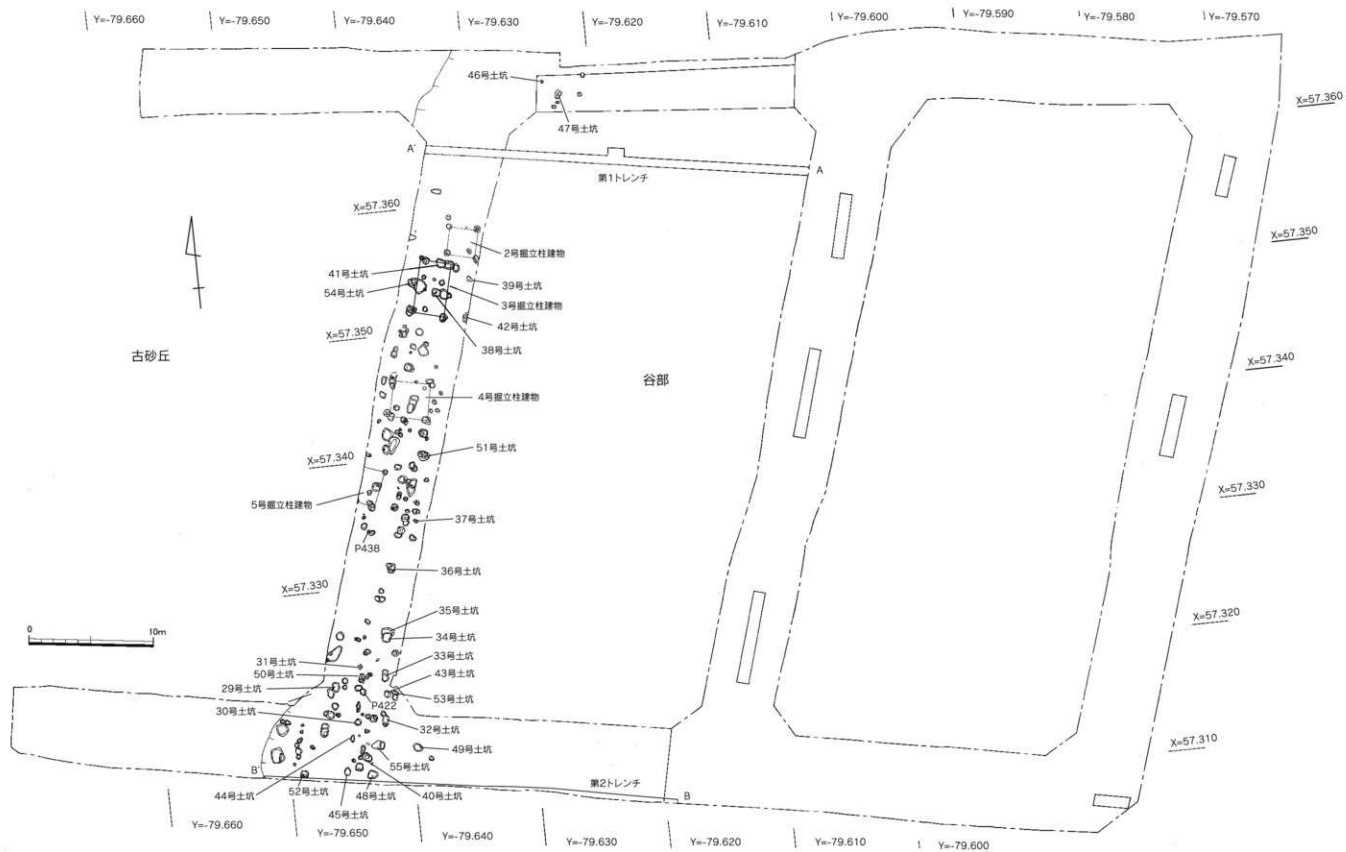
第2トレンチは、調査区南壁に設定したトレンチで、その設定は谷部の始まりから遺物が出土する範囲である。第1層は水田面基盤層で、第2層は黒茶褐色砂質土層で、弥生時代後期後半～終末期の土器を包含する。第3層は弥生時代後期前半～中頃の土器を含む堆積層で、第2層の下層に位置する。第1層は、谷の地形に沿って上がってくる第2層、第3層、第4層を削平している。このため、谷部の遺構検出では、第1層の除去後に、谷の始まりを起点として、東側9mの地点で第2層の弥生時代終末期の土器、東側4mの地点で第3層の弥生時代後期前半の土器、東側1mの地点で第5層の弥生時代中期末～後期初頭の土器が検出されている。12～15層は茶褐色粘質土層の植物遺存層（パファン層）で、弥生時代中期後半の土器が包含している。15層以下では、青灰粘土層でグライ化した土壌で、遺物を含まない。

これら各時期の堆積により、弥生時代中期後半に位置した谷部の始まりは、弥生時代終末期には、谷の始まりは東に9mの地点まで拡大しており、第3層や第4・5層の上面が弥生時代終末期の遺構面として機能している。また、第3～5層除去後、第12～15層上面で、弥生時代中期末の遺構面を検出している。

谷部における土器堆積は、間層を挟まないため、時期的に明確な分離は不可能であったが、大きく3時期に分かれるため、本書では、**上層**（第1トレンチ：第8～15層、第2トレンチ：第2層）、**中層**（第1トレンチ：第16、17層、第2トレンチ：第3～11層）、**下層**（第1トレンチ：第19層、第2トレンチ：第12～15層）として、報告する。

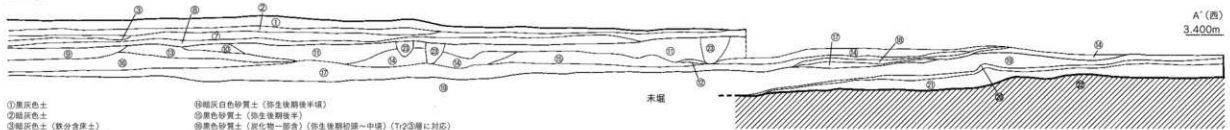


第4図 深江城崎遺跡全体図① (第1面) (1/300)



第5図 深江城崎遺跡全体図②(第2面) (1/300)

第1トレンチ
3.900m



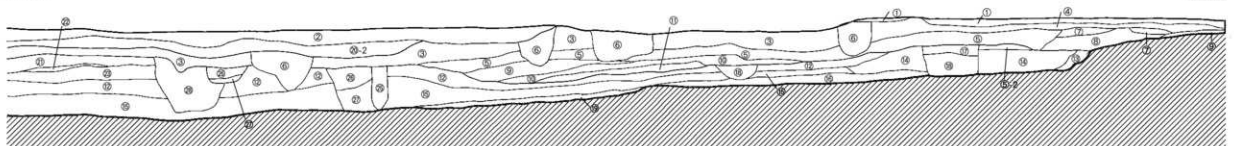
- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| ①黒灰色土 | ⑩暗灰白色砂質土 (弥生後期後半) |
| ②暗灰色土 | ⑪黄色砂質土 (弥生後期後半) |
| ③暗灰色土 (鉄分多量土) | ⑫黄色砂質土 (灰化物一部含む) (T12②層に対応) |
| ④暗灰色土 (鉄分多量土) | ⑬暗茶褐色粘質土 (弥生中期末) |
| ⑤灰褐色土 (洪水砂層) | ⑭白色粘土 |
| ⑥灰褐色土 (鉄分多) | ⑮暗灰褐色粘質土 (下層) (弥生中期後半) バフン層 |
| ⑦黄褐色土 (鉄分多) | ⑯暗灰白色粘質土 土跡含む |
| ⑧暗黄褐色土 (跡に深い) (古墳初期～弥生) | ⑰暗黄灰砂質土 土跡含まない |
| ⑨暗白色砂質土 (弥生終末) | ⑱暗白色砂質土 |
| ⑩黄灰砂質土 (弥生後期末期) (T12②層に対応) | ⑲黄褐色土 (弥生終末の遺構埋土) |
| ⑪黄褐色土 (洪水砂層) | |
| ⑫黄灰砂質土 (弥生後期後半) | |

(東)A
3.900m

3.900m

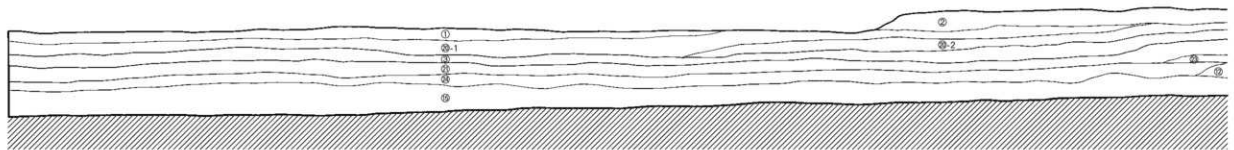


第2トレンチ
4.100m



(東)B
4.100m

4.100m



- | | | | | |
|----------------------------------|----------------------------|-----------------------------|-------------------------------|-------------------|
| ①赤褐色砂質土層 (洪水定基盤面) | ⑩暗灰褐色粘質土層 (弥生中期末～後期初頃の増殖層) | ⑪黒灰色砂層 | ⑫黄褐色粘質土層 (弥生中期後半の遺構埋土) | ⑬暗茶褐色粘質土層 (⑫層と同質) |
| ②黄褐色砂質土層 (弥生終末増殖層) | ⑪暗褐色粘質土層 | ⑬暗黄灰砂層 | ⑭暗黄灰砂質土層 (弥生中期後半の遺構埋土) | ⑯暗灰色粘質土層 (柱穴土) |
| ③黄灰砂質土層 (弥生後期前半～中期の増殖層) T11②層に対応 | ⑫灰白色砂層 | ⑭茶褐色粘質土層 (バフン層) | ⑮茶褐色粘質土層 (雑物遺存層を含む) | ⑰暗褐色粘質土層 (柱穴埋土) |
| ④赤褐色砂層 | ⑬茶褐色粘質土層 (バフン層) | ⑯黄褐色粘質土層 (弥生終末の増殖層) (⑫層と同じ) | ⑰-1黄褐色粘質土層 (弥生終末の増殖層) (⑫層と同じ) | ⑱暗褐色粘質土層 (土塊埋土) |
| ⑤灰白色砂層 (弥生中期末～後期初頃の増殖層) | ⑭暗黄灰砂質土層 | ⑲黄褐色粘質土層 (T11②層に対応) | ⑲-2黄褐色粘質土層 (弥生終末の増殖層) | ⑳暗灰色粘質土層 (土塊埋土) |
| ⑥黄褐色粘質土層 (弥生終末の遺構埋土) | ⑮暗黄灰砂質土層 | ⑳黄褐色粘質土層 (弥生中期後半の土層埋含む) | ㉑暗灰色粘質土層 (灰層) | |
| ⑦黄褐色砂層 | ⑯暗黄灰砂質土層 | ㉒黄褐色粘質土層 (雑物遺存層、土跡含む) | | |
| ⑧黄褐色砂層 | ⑰暗黄灰砂質土層 | | | |
| ⑨暗灰色砂層 | ⑱暗黄灰砂質土層 | | | |
| ⑩暗灰色砂層 (⑫層と同質) | ⑲暗黄灰砂質土層 | | | |



第6図 谷部東西土層断面実測図 (1/50)

III. 遺構と遺物

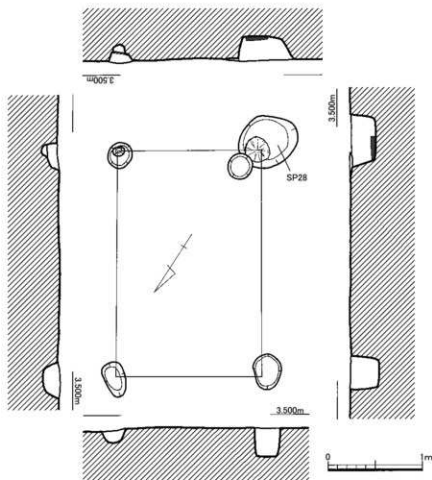
1. 第1面の遺構と遺物

第1面では数多くのピットを検出したにも関わらず、調査区内で確認できた掘立柱建物はずが1軒のみであった。なお、柱穴と考えられるピットは後述の通り取り上げている。また、弥生時代終末期の溝を1条検出しており、器台が多く出土している。二次焼成を受けている器台もあり、当時の使用状況を考える上で重要である。

(1) 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (第7図)

1号掘立柱建物は調査区中央部に位置する1×1間の長方形建物である。桁行き2.40m、梁行き1.54mを測る。南側のSP-28には柱が一部残っていたが、やや残りが悪く根元しか残存していなかった。SP-28とその他の柱穴のサイズが大きく異なる点が特徴として挙げられる。主軸方向N-32°-Wである。なお、柱穴からの出土遺物はない。



第7図 1号掘立柱建物平断面図 (1/40)

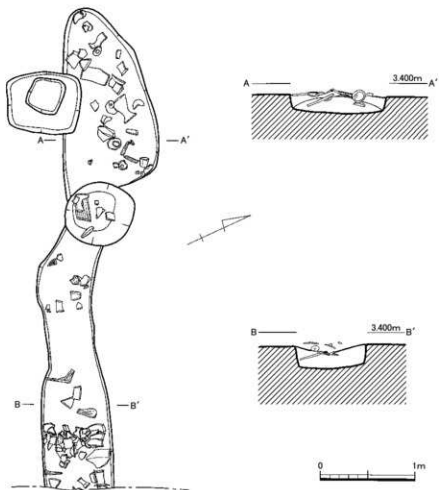
(2) 溝

1号溝 (第8図)

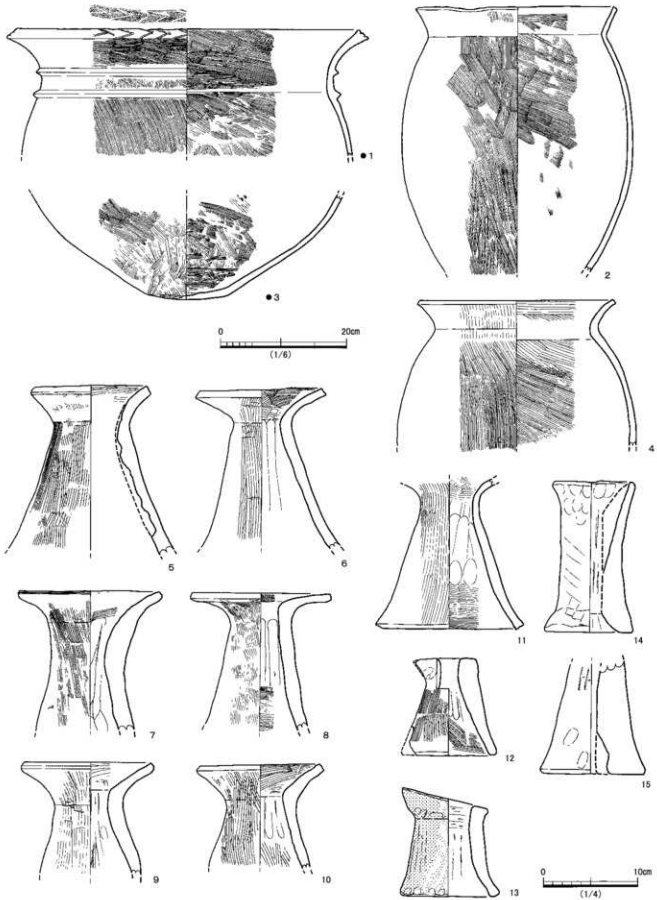
調査区中央部で検出された溝で、西端がやや北側に膨らむ。長さ約5.10m + α 、幅約1.00m、深さ約0.20mで調査区外東側に伸びる。溝の中からは器台を中心に弥生時代後期後半～終末期の土器が出土しており、時期は弥生時代終末期に位置付けられる。

出土遺物 (第9図)

1～4は甕である。1、3は糸島に広く分布する大形甕である。1は口縁が大きく外反し、緩やかに胴部に至る。口縁端部に羽状文を施し、頸部に二条の突帯を巡らせる。内外面ともに刷毛目を施し、外面の突帯の間には刷毛目の上から斜め方向のケズリを施す。弥生時代終末期か。2は長胴化した甕で、胴部は張りが弱い。口縁はくの字状を呈し、緩やかな屈曲部を持つ。内外面ともに刷毛目を施す。胴下部外面は刷毛目の後に板状工具でナデを行う。弥生時代後期後半～終末期。3は底部で、丸底に近い。胴部は内外面ともに刷毛目を施している。内面の刷毛目は一部ナデ消される。弥生時代終末期か。4は頸部の屈曲が甘い。胴も張りが弱く長胴化していると思われる。内外面ともに刷毛目を行うが、外面の口縁部刷毛目は一部ナデ消される。弥生時代後期後半に位置付けられる。5～11は器台である。5は底部に向かって大きく開く。内面が大きく剥離しており、二次焼成の影響と思われる。外面縦刷毛目、内面に横刷毛目が残る。弥生時代後期後半。6は屈曲部が上位に位置しており、内面には横刷毛目が残る。弥生時代終末期。7は屈曲

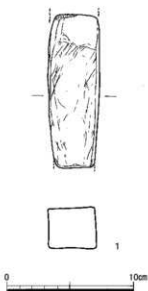


第8図 1号溝平面断面図 (1/40)



第9図 1号溝出土土器実測図 (1/4・●は1/6)

部の器壁が厚い。内外面ともに刷毛目をナゲ消している。弥生時代後期後半。8は屈曲部が非常に上位に位置し、大きく外反する。外面は刷毛目をナゲ消している。内面は一部横刷毛目が確認できる。弥生時代終末期。9は端部がやや丸みを持ち、屈曲部がやや甘い。内外面の刷毛目をナゲ消している。弥生時代終末期。10は外面の刷毛目をナゲ消している。また、刷毛目が重なり、網目状に見える。弥生時代終末期。11は器台脚部で、屈曲部が上位に位置している。脚部は角張る。他の器台と同様に外面に縦刷毛目、内面に横刷毛目を持つ。弥生時代終末期。12、13は弥生時代終末期の杵形器台である。12は外面に縦刷毛目、内面下部に横刷毛目を持つ。13は12と比べて、脚部が途中で外反し、上部が斜めに傾く。外面は刷毛目の後にナゲを施す。屈曲部には工具痕が確認でき、ナゲが施される。脚部外面には指頭痕がある。内面は板ナゲを施す。14、15は支脚である。14は胴部が直線的で、内面上位は大きく剥離している。上部には指頭痕が多く残り、脚部にはナゲが残る。15は14と比べて脚部が開き、器壁が厚い。内面は一部剥離している。弥生時代後期後半～終末期が。第10図1は砥石で断面は方形である。上端は使用中に折れたようで、再利用を試みたと思われる。



第10図 1号溝出土石器実測図 (1/3)

(3) 土坑

1号土坑 (第11図)

調査区の北側で検出した。平面形状はやや扁平な円を描く。西側から南北にかけて、テラス状の段を持っており、東西1.13m、南北0.82m、深さ0.25mを測る。土坑内部からは土器が1点出土している。

出土遺物 (第14図-1)

1は壺の口縁部で、大きく外に向かって開く。端部外面に刻み目が残り、内面はナゲを残す。

2号土坑 (第11図)

調査区北側で検出した。平面形は歪な台形状をしており、断面は逆台形で、東西0.71m、南北0.65m、深さ0.32mを測る。

出土遺物 (第14図-2)

2は壺の口縁部。くの字口縁で、器壁はやや薄く、端部はやや厚みが増す。外面は縦刷毛目でスガが付着する。内面は斜め方向のナゲ、口縁端部は横ナゲが施される。弥生時代後期後半。

3号土坑 (第11図)

調査区北側で検出された。深さは浅く、土坑の一部を調査区に切られる。東西0.75m + α 、南北0.80m、深さ0.10mを測る。

4号土坑 (第11図)

調査区北側で検出された。歪な隅丸形状をしており、深さは浅い。東西1.05m、南北1.10m、深さ0.13mを測る。

出土遺物 (第14図-3)

3は壺の口縁部。くの字口縁で、屈曲がや緩い。外面は縦刷毛目、内面は板ナゲ、口縁端部は

横ナデである。弥生時代後期後半。

5号土坑 (第11図)

調査区中央部の北側で検出した。平面形はやや歪な隅丸長方形をしていいる。東西0.67m、南北0.96m、深さ0.05mを測る。

出土遺物 (第14図-4)

4は甕の口縁部で、屈曲部が緩い。外面は縦方向の刷毛目でススが附着する。内面は横方向の刷毛目が確認できる。弥生時代終末期か。

6号土坑 (第11図)

調査区北側で検出した土坑である。平面形状は南北方向に細長く伸びており、不定形を示す。西側を他のピットに切られており、土坑の深さも非常に浅い。東西0.53m、南北1.95m、深さ0.05mを測る。出土遺物はない。

7号土坑 (第11図)

図の左から7、8、9号土坑と並ぶ。8号土坑に切り込まれた状態で検出した。土坑の平面形は歪な方形で、深さが非常に浅い。土坑の底面は東西1.55m、南北1.75m + α 、深さ0.04mを測る。内部からは甕の頸部が1点出土している。

出土遺物 (第14図-5)

5は甕の頸部片で、上部に口縁部へ続く屈曲部が残り、下部には突帯がある。外面にはナデの後に暗文を施し、内面は板ナデである。弥生時代後期初頭。

8号土坑 (第11図)

調査区の北側で確認した土坑で、7・9号土坑に切り込む形で検出した。土坑の平面形状は歪な方形を示しており、深さは7・9号土坑と同様に非常に浅い。東西0.92m、南北0.77m、深さ0.02mを測る。

出土遺物 (第14図-6)

6は直口壺の口縁部片で、やや外反している。外面はナデの後にミガキ、内面は横ナデを施している。

9号土坑 (第11図)

この土坑は8号土坑に切られる形で検出した。歪な形をしており、南側に向かって深さが浅くなる。東西1.32m、南北1.54m、深さ0.04 ~ 0.07mを測る。

出土遺物 (第14図-7)

7は甕の口縁部片で端部の短い、くの字状口縁である。外面に縦刷毛目残す。弥生時代後期後半。

10号土坑 (第11図)

調査区中央部で検出した。周囲の一部を他のピットに切られている。平面形は細長い楕円形をしており、断面は逆台形である。土坑内から遺物は出土していない。東西0.60m、南北0.95m + α 、深さ0.27mを測る。

11号土坑 (第11図)

調査区中央部東側で検出した。南側には1号溝を確認できる。西側と南側の大部分を、他のピットに切られているが、東側の調査区外に伸びるものと推測する。東西0.30m + α 、南北0.50m + α 、深さ0.09mを測る。

12号土坑（第11図）

調査区中央部の北端で検出し、西側をピットに切られている。断面テラス状となる。東西0.68m + α 、南北0.84m、深さ0.12mを測る。

出土遺物（第14図-8、9）

8はやや薄手の甕の口縁部で、くの字状を呈し、外面には縦刷毛目が残し、ススが附着する。弥生時代後期後半。9は壺の底部で、外面は丹塗り、内面はナデが施される。弥生時代後期後半。

13号土坑（第11図）

調査区中央部で検出した。西側を他のピットに切られており、平面形は歪な方形をしている。東西0.74m、南北1.50m、深さ0.25～0.45mを測る。

出土遺物（第14図-10）

10は高杯の底部片で、内面は横刷毛目が明瞭に残り、外面は縦方向にミガキを施している。弥生時代終末期。

14号土坑（第11図）

調査区中央部で検出した。土坑の周囲を他のピットに切られており、南側に向かって次第に深くなっている。東西1.14m + α 、南北1.02m、深さ0.29mを測り、内部からは、古墳時代の高杯を含む土器が3点出土している。

出土遺物（第14図-11、12、13）

11は古墳時代初頭の高杯杯部。端部は丸みを帯び、緩やかに内傾し胴部に続く。中央やや下には一条の沈線が施される。杯部の外面には横刷毛目の後、縦ミガキが施され、内面は暗文が確認できる。12は甕の口縁部片。外面は刷毛目が施されている。弥生時代中期末。13は甕の底部片。二次焼成を受けている。弥生時代中期末。

15号土坑（第12図）

調査区南側で検出し、南側の一部が調査区外に伸びる。平面形状は隅丸長方形のような形をし、底面は平坦である。土坑の東西をそれぞれピットが切っており、東西1.40m、南北0.61m + α 、深さ0.29mを測る。

出土遺物（第14図-14）

14は甕の底部片。底面は凸レンズ状を呈し、外面は縦刷毛目、内面はナデが残る。コゲが附着する。弥生時代後期後半。

16号土坑（第12図）

調査区中央部南側で検出した。平面形は隅丸方形をしており、北側はピットに切られる。東西0.93m、南北0.94m、深さ0.35mを測る。

出土遺物（第14図-15）

15は器台の底部片が出土。外面は縦刷毛目が確認でき、ススが附着する。内面は横刷毛目の後に板ナデが施される。弥生時代後期後半。

17号土坑（第12図）

調査区中央部やや南側で検出し、平面形状は歪な方形を呈す。南側はピットに切られている。東西1.25m、南北0.95m、深さ0.27mを測る。

出土遺物（第14図-16）

16は甕の口縁部。くの字状で、緩やかに胴部へ伸びる。外面胴部は刷毛目を行い、黒斑やススが残っている。弥生時代後期後半。

18号土坑（第12図）

調査区北側、第1トレンチ付近で検出した。北東側にテラスがあり、内部からは高杯などの土器が出土している。東西0.89m、南北0.85m、深さ0.33mを測る。古墳時代前期前半の高杯と壺が2点出土している。

出土遺物（第14図-17, 18）

17は古墳時代前期前半の高杯杯部である。外面は、口縁から屈曲部にかけては刷毛目の上に横ナデ、屈曲部から下部は刷毛目の上から強いナデを施す。内面は口縁付近は横ナデ、下部は強いナデを行う。内外面ともに丹が残る。18は短頸広口壺で、口縁部は短く、大きく外反しない。胴部はやや扁平な形状をしている。古墳時代前期前半。

19号土坑（第12図）

調査区中央部南側で検出し、16号土坑の西側に位置する。東側はビットに切られ、平面形はやや歪な隅丸方形をしている。東側の深さがやや深くなっている。東西1.15m、南北1.05m、深さ0.15mを測る。

出土遺物（第14図-19, 20）

19は古墳時代初頭の器台で、端部は大きく広がり面を持つ。20は弥生時代終末期の甕の底部。やや尖底状の底部で、ケズリを施す。内面には指頭痕が残る。

20号土坑（第12図）

19号土坑の南側で検出した。平面形状はやや歪な楕円形をしており、土坑中央部からは糸島型の九州型石鍾が出土している。土坑の底面はほぼ平坦で、東西0.92m、南北1.62m、深さ0.15mを測る。

出土遺物（第29図-50）

50は九州型石鍾である。全体を面取りするが、風化により不明瞭である。孔は未貫通のものがあり、途中で穿孔しなおす。砂岩製で、長さ8.3cm、幅5.1cm、厚さ4.8cm、重さ266gを測る。

21号土坑（第12図）

調査区中央部南側で検出した。平面形は歪な楕円形をしており、断面は逆台形である。南側をビットが切り込む。東西0.98m、南北1.50m + α 、深さ0.29mを測る。

出土遺物（第14図-21）

21は甕の口縁部片で屈曲部がやや緩い、くの字状口縁である。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向刷毛目を行う。内外面ともに刷毛目の上からナデしている。弥生時代後期後半。

22号土坑（第12図）

調査区中央部で検出した。平面形は隅丸長方形のような形状をしていると推測され、他の土坑と同じように一部をビットに切られている。東側に行くにつれて、次第に深さが浅くなる。東西1.15m + α 、南北0.95m、深さ0.34mを測る。

23号土坑（第12図）

調査区南側の南端で検出しており、深さは南側が深く、北側に向かって次第に浅くなっていく。

平面形は北側に向かって次第に窄まるような歪な形状をしており、東西1.35m、南北1.48m、深さ0.17mである。

出土遺物 (第14図-22, 23)

22は袋状口縁壺の口縁端部である。外面は横方向に刷毛目を施し、内面はナデ。弥生時代後期初頭。23は甕の口縁部片である。外面は縦方向の刷毛目、内面は板ナデである。弥生時代後期後半。

24号土坑 (第12図)

調査区南側で検出、東側をビットが切り込む。平面形状は楕円形をしており、東西0.65m、南北1.18m、深さ0.16mを図る。土坑の深さは、やや北側に向かって浅くなっている。器台の底部が1点出土している。

出土遺物 (第14図-24)

24は器台の底部で、器壁はやや厚い。外面は縦刷毛目、内面に横刷毛目を残している。弥生時代後期後半。

25号土坑 (第12図)

調査区南側で検出し、東西をビットが切る。平面形は隅丸方形になると推測され、断面は逆台形となる。深さは若干、北側の方に向かって深くなっている。東西1.02m+ α 、南北1.20m、深さ0.24mを測る。

出土遺物 (第14図-25)

25は甕の口縁部。端部に向かうにつれて、器壁が薄くなり、内外面にナデが残る。弥生時代後期前半。

26号土坑 (第12図)

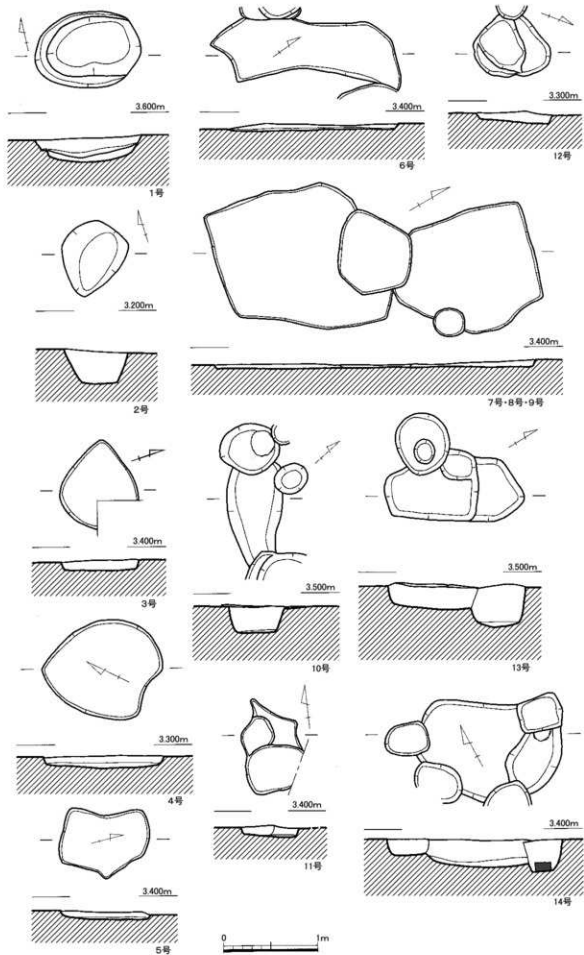
調査区中央部南西側で検出した。平面形が隅丸方形で、西側をビットが切っている。深さは南側から、北側に向かって次第に深くなっている。土坑の南側から手づくね土器が出土したほか、6点の土器が出土している。東西1.31m、南北1.50m、深さ0.34mを測る。

出土遺物 (第14図-26, 27, 28, 29, 30, 31, 32)

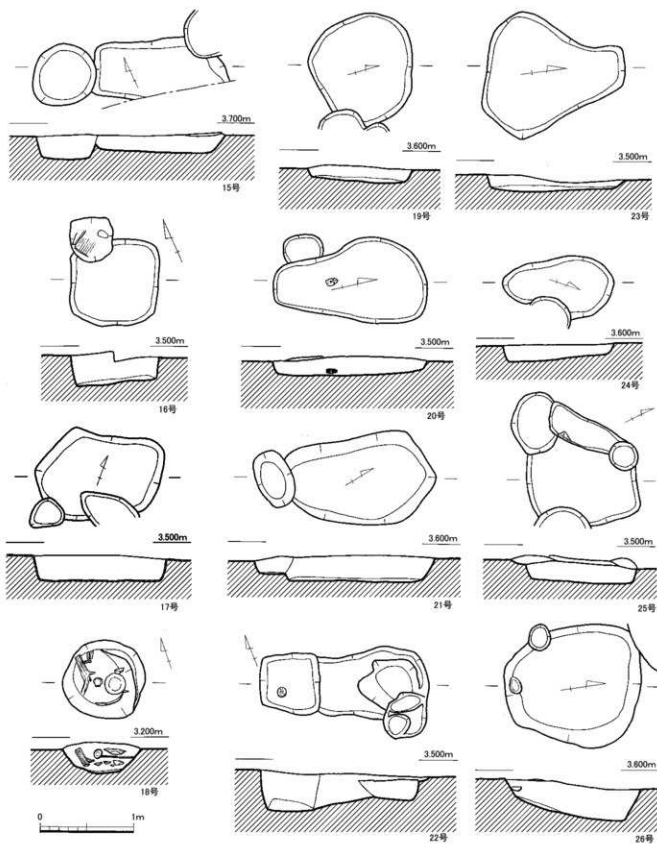
26は完形の手づくね土器で、暗灰色を呈す。指頭痕が明瞭に残り、器壁は薄い。口縁端部には粘土を帯状に貼り付けた痕跡がはっきりと残る。27は甕の口縁部片である。器壁は薄く、口縁端部は短く緩やかに胴部に向かって膨らむ。口縁部は縦刷毛目の上にナデを行い、胴部は斜め方向の刷毛目を施している。弥生時代終末期。28は高杯の口縁部片で、器壁が薄い。口縁が反転し伸びている。内外面の刷毛目が明瞭に残っている。時期は弥生時代後期後半。29は甕の口縁部片で端部が短い。やや直線的に胴部へ続く。外面は縦刷毛目をナデ消している。時期は弥生時代後期後半。30は甕の底部。凸レンズ状を呈し、外面は縦刷毛目をナデ消すが、内面に刷毛目が残る。時期は弥生時代後期後半。31は高杯の口縁部で、外反しながら広がっている。外面は斜め方向の刷毛目を施し、下部には一部横ミガキが残る。これらの調整の上から縦方向の暗文を施している。時期は弥生時代終末期に位置付けられる。32は甕のやや小ぶりの把手で、26号土坑内では一番新しく、混入したと考えられる。牛角状を呈し、指頭痕が残る。把手だけで時期の判断は難しいが、古墳時代中期頃か。

27号土坑 (第13図)

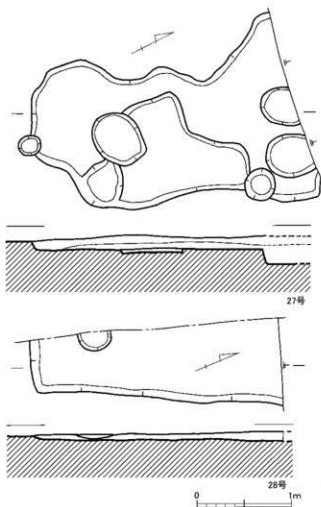
調査区南側、28号土坑の東側で検出した。周囲を複数のビットに切られている。平面形状が不



第11図 1～14号土坑断面図 (1/40)



第12図 15～26号土坑平面断面図 (1/40)



第13図 27・28号土坑断面図(1/40)

定形の土坑で、東西2.02m、南北2.75m + α 、深さ0.14mを図る。土坑からは鉢と甕の2点が出土。

出土遺物 (第29図-33, 34)

33は鉢の口縁部片である。屈曲部は緩やかで外面は縦刷毛目、内面はナデが施され、工具痕が残る。古墳時代前期前半に位置付けられる。34は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。くの字状の口縁で、長胴状の胴部に緩やかに続く。外面は縦方向の刷毛目を施し、ススが付着する。内面は縦刷毛目の上に横刷毛目を残す。弥生時代後期後半。

28号土坑 (第13図)

調査区南側の西端で検出した。土坑の大半は調査区外に伸びるが、角を持ったため、平面形状は方形の可能性がある。深さは大変浅く、東西0.92m + α 、南北2.68m + α 、深さ0.10mを図る。土坑内部から土器は出土していない。

(4) 柱穴

SP-03 (第15図)

調査区の北側で検出した。テラスを東側に持ち、柱痕はやや北側に寄っている。東西0.50m、南北0.47m、深さ0.24mを測る。

出土遺物 (第17図-1)

1は甕の底部で外面は刷毛目、内面はナデと指頭痕が残る。

SP-06 (第15図)

調査区北側で検出し、ピット北側に柱痕を確認した。ピットの北東側から東側にかけて、深く掘り込む。東西0.48m、南北0.49m、深さ0.18mを測る。弥生時代後期後半の甕が1点出土する。

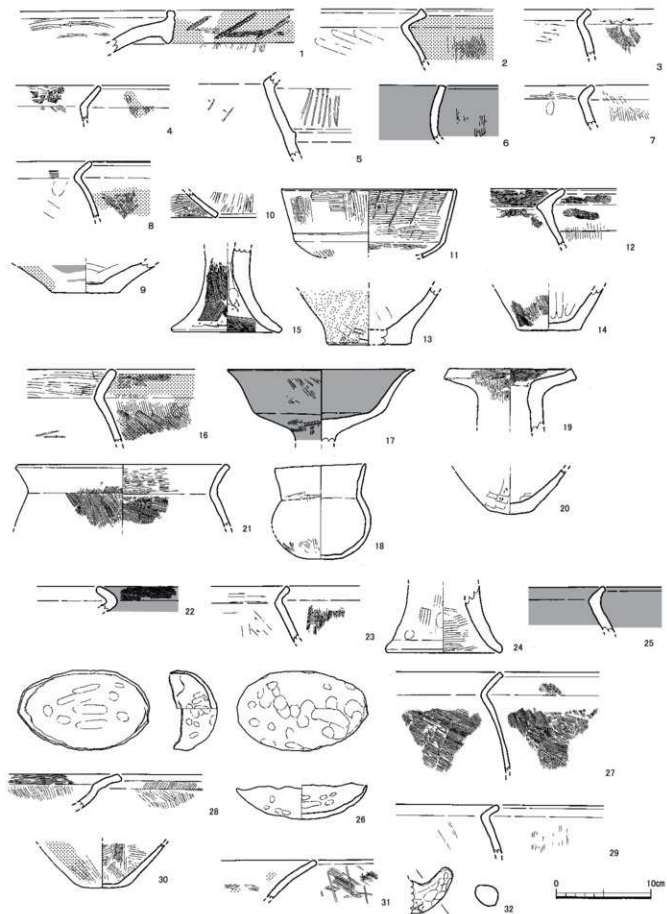
出土遺物 (第17図-2)

2は甕の口縁部片で、外面は剥離しており、調整不明瞭、内面はナデ調整。弥生時代後期初頭か。

SP-07 (第15図)

調査区北側中央で検出し、平面形状はやや歪な方形を示し、柱は西側角に残る。東西0.76m、南北0.97m、深さ0.20mを測る。

出土遺物 (第17図-3, 4)



第14図 土坑出土遺物実測図① (1/4)

3は甕の口縁部片。端部は肥厚し、やや直線的に外に向かって伸びる。外面は刷毛目、内面はナデと指頭痕が残る。弥生時代中期末に位置付けられる。4は甕の口縁部片で、くの字状を呈す。屈曲部下には突帯が巡る。外面はナデ、内面は屈曲部より上は横方向の刷毛目、屈曲部より下はナデ調整。弥生時代後期後半に位置付けられる。

SP-08 (第15図)

調査区中央部北東側で検出し、柱穴は若干南側に寄っている。東西0.55m、南北0.53m、深さ0.22mを測る。

出土遺物 (第17図-5)

5は鋤先口縁の端部で、内外面に刷毛目が確認できる。端部は斜め方向に刻み目を施す。弥生時代後期後半か。

SP-09 (第15図)

調査区中央部北東側で確認した。他のビットを切り込み、中央部からやや北寄りに礎板が残る。東西0.96+ α m、南北0.82m、深さ0.15mを測る。

出土遺物 (第17図-6)

6は甕の口縁部片でやや薄手である。外面は刷毛目、内面はナデ調整を施す。時期は弥生時代後期後半～終末期か。

SP-10 (第15図)

調査区中央部北側で検出し、平面形は隅丸長方形をしている。礎板はビット中央から北寄りの位置で確認された。東西0.85m、南北0.46m、深さ0.14mを測る。

出土遺物 (第17図-7)

7は甕の底部で、凸レンズ状を呈すると考えられる。外面は刷毛目、内面は板ナデを施す。底部の一部のみで、詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期初頭～中頃のものと考えられる。

SP-12 (第15図)

調査区中央部北側で検出、ビット中央部から東側で柱穴を確認した。東西0.25m、南北0.40m、深さ0.15mを測る。

出土遺物 (第17図-8)

8は甕の底部片で、内面にコゲが付着する。内面はナデが残る。

SP-13 (第15図)

調査区中央部北側で確認しており、ビット中央部に柱が残っていた。平面形状は歪な隅丸方形を描き、断面は逆台形状である。東西0.50m、南北0.42m、深さ0.15mを測る。土坑内部からは土器が1点出土している。

出土遺物 (第17図-9)

9は弥生時代後期後半の甕の口縁部片で、屈曲は緩く端部がやや短い。外面はナデ、内面は板ナデを施す。

SP-15 (第15図)

調査区中央部で確認され、東側が調査区外に伸びる。西側の角から弥生時代後期後半と考えられる土器が2点出土し、ビット北側には礎板が残っていた。東西0.66m+ α 、南北1.25m、深さ0.18mを測る。

出土遺物 (第17図-10, 11, 12)

10は甕で、くの字状の口縁を持つ。屈曲部は緩やかで、端部はナデ、端部より下は刷毛目を施す。弥生時代後期後半。11, 12は甕の底部片。11はやや丸みを保ちながら底面に至る。外面は刷毛目、内面は板ナデを残す。弥生時代後期後半か。12は底面の屈曲部が残る。外面にナデ、内面に指頭痕を残す。弥生時代後期後半か。

SP-16 (第15図)

調査区中央で検出し、ピットの西側に木柱が残っていた。平面形状はやや歪な楕円形を示す。深さは南側が浅く、東西0.40m、南北0.28m、深さ0.15mを測る。ピットからは土器が1点出土している。

出土遺物 (第17図-13)

13は甕の底部片。外面には刷毛目、内面はナデを施す。底部の一部だけであるので、詳細な時期は不明である。

SP-17 (第15図)

調査区中央東側で検出し、中央部に柱が残っていた。平面形はやや扁平な円を描く。底面はほぼ平坦で、東西0.51m、南北0.39m、深さ0.10mを測る。土坑からは弥生時代後期後半の土器が出土している。

出土遺物 (第17図-14)

14は甕の口縁部片。屈曲部は緩やかで、内外面にススが付着している。内面は横刷毛、外面は横方向のナデを施す。弥生時代後期後半か。

SP-18 (第15図)

調査区中央部で検出した。平面形状は隅丸方形である。礎板と考えられるやや厚い木材が東側に残っており、東西0.50m、南北0.48m、深さ0.25mを測る。弥生時代後期初頭の土器が2点出土している。

出土遺物 (第17図-15, 16)

15は甕の口縁部で、屈曲部がやや肥厚する。内外面ともに刷毛目調整でススが付着している。

16も甕の口縁部で内外面にススが付着する。外面には一部刷毛目が残る。弥生時代後期初頭か。

SP-19 (第15図)

調査区中央部で検出され、柱痕はピット中央から北西寄りの位置で確認した。東西0.70m、南北0.64m、深さ0.15mを測る。

出土遺物 (第17図-17)

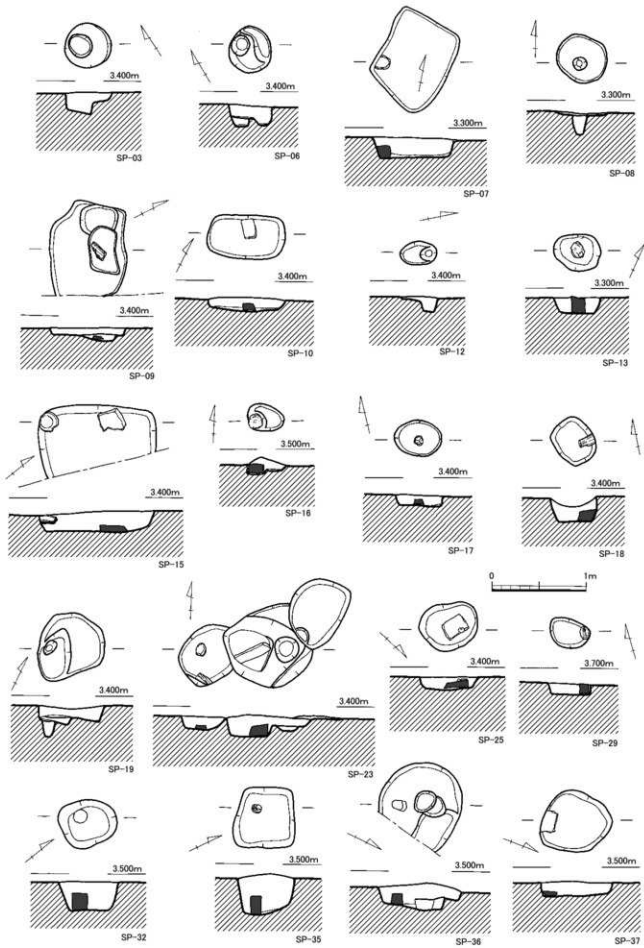
17は甕の頸部で突帯が巡る。突帯には刻み目が施されている。内面は薄く剥離しており、調整不明瞭。外面は刷毛目調整の後にナデを行う。

SP-23 (第15図)

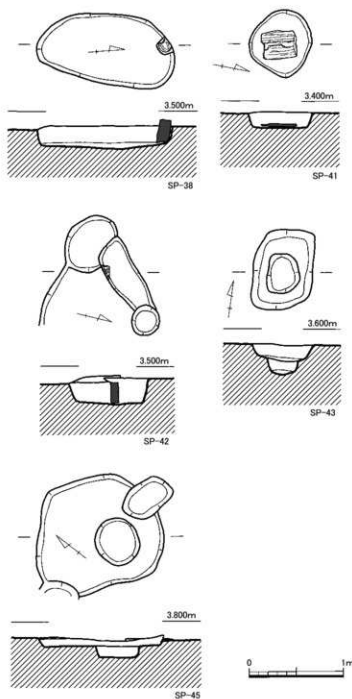
調査区中央部で3つのピットが重なったような状態で検出した。東側を一部他のピットに切られる。ピット中央からやや北西側に柱が残っていた。東西0.92m、南北0.84m、深さ0.24mを測る。ピットからは甕の口縁部が1点出土した。

出土遺物 (第17図-18)

18は甕の口縁部。外反し、外側に向かって大きく広がる。外面にススが付着し、内面は横刷毛



第15図 SP (柱穴) 平面図① (1/40)



第16図 SP (柱穴) 平面図② (1/40)

ト北西側で柱を確認した。断面形状は逆台形を呈している。東西0.50m、南北0.60m、深さ0.28mを測る。

出土遺物 (第17図-22)

22は甕の頸部で、端部を欠損する。屈曲部は緩く、緩やかなカーブを描いて胴部に至る。調整は内外面ともにナデを施す。弥生時代後期であると思われるが、部分的な破片のため詳細な時期は決めかねる。

目を残す。弥生時代後期のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

SP-25 (第15図)

調査区中央部で確認され、中央部やや北西寄りに礎板が残っていた。断面は逆台形状を呈し、東西0.62m、南北0.53m、深さ0.13mを測る。ピット内からは弥生時代後期後半の高杯の破片が1点出土している。

出土遺物 (第17図-19, 20)

19は弥生時代後期後半の高杯の口縁部で、内外面ともに横ミガキを施し、外面に暗文状の波状紋を残す。20は九州型石錘である。下部の孔の上には貫通していない穴が確認できる。これは主軸がずれたため、再び孔を穿孔した痕跡と思われる。研磨を施しており、丁寧に製作されている。

SP-29 (第15図)

調査区中央部で確認し、ピット東端に柱が残っていた。平面形状は歪な円形を呈し、東西0.43m、南北0.32m、深さ0.10mを測る。

出土遺物 (第17図-21)

21は甕の口縁部で、くの字状を呈す。器壁はやや薄く、屈曲部は緩やかで、スガが外面に付着している。調整は外面に縦刷毛目、内面に板ナデを施す。弥生時代後期初頭から前半か。

SP-32 (第15図)

調査区中央部南側で検出され、ピット北西側で柱を確認した。断面形状は逆台形を呈している。東西0.50m、南北0.60m、深さ0.28mを測る。

SP-35 (第15図)

調査区中央部南側で検出したビットである。平面形状は隅丸方形をしており、ビット中央部から西側の角に柱が残っていた。深さは柱の残る位置が一番深くなっており、東西0.66m、南北0.68m、深さ0.40mを測る。

出土遺物 (第17図-23)

23は非常に緩やかな屈曲部を持つ甕の口縁部である。くの字状を呈し、内外面ともに刷毛目を施す。弥生時代後期後半～終末期か。

SP-36 (第15図)

調査区南側で検出し、ビット中央やや南側に柱が残っていた。他のビットなどが切り込んでおり、ビットの一部は東側調査区外に伸びる。東西0.80m+α、南北0.87m、深さ0.25mを測る。内部からは弥生時代後期後半の甕の口縁部が出土した。

出土遺物 (第17図-24)

24は甕の口縁部。緩やかなくの字状の口縁を持っている。内外面ともにナデを施す。弥生時代後期後半か。

SP-37 (第15図)

調査区南側で検出し、平面形はやや歪な隅丸方形となる。ビット南側で礎板を確認した。東西0.60m、南北0.67m、深さ0.15mを測る。

出土遺物 (第17図-25)

25は甕の底部である。外面は縦刷毛目で内面はナデを行う。破片が小さく、詳細な時期は決めかねる。

SP-38 (第16図)

調査区南側で検出し、平面形は楕円形である。ビット北端に柱が残っている。東西0.75m、南北1.48m、深さ0.24mを測る。

出土遺物 (第17図-26)

26は甕の口縁部で、くの字状を呈する。屈曲部は緩やかである。外面は屈曲部に境に上部は縦刷毛目、下部は横刷毛目を施し、黒ススが残っている。時期が弥生時代後期後半に位置付けられる。

SP-41 (第16図)

調査区南側で検出した。平面形状は隅丸方形を呈しており、ビット中央部に礎板が残っていた。断面は逆台形状を呈し、東西0.65m、南北0.64m、深さ0.15mを測る。内部からは、甕の底部が1点出土した。

出土遺物 (第17図-27)

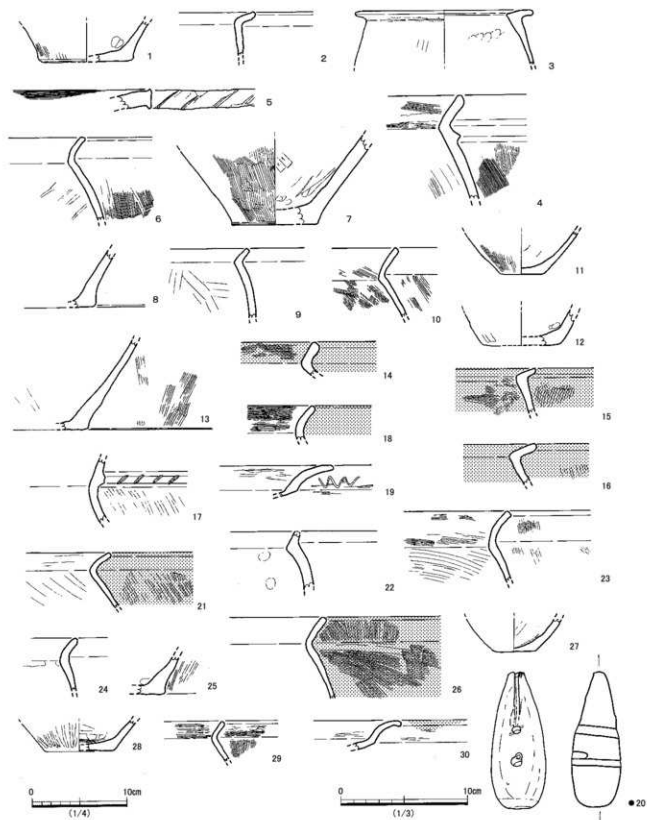
27は甕の底部で、やや緩やかなカーブで底面に至る。内面にはナデを行い、工具痕が残る。弥生時代後期後半～終末期に位置付けられる。

SP-42 (第16図)

調査区南側で検出され、北側を他のビットに切られている。ビット中央から南側に柱が残る。東西0.32m、南北0.75m+α、深さ0.25mを測る。

出土遺物 (第17図-28)

28は甕の底部である。胴部からやや直線的に底面に至る。外面は縦ミガキ、内面には横刷毛目



第17図 SP (柱穴) 出土土器・石器実測図 (●は1/3・1/4)

と指頭痕が残る。弥生時代後期と思われるが、一部の破片だけで、詳細な時期は決めかねる。

SP-43 (第16図)

調査区南側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、ビット中央部に柱痕を確認できる。柱痕も隅丸方形を示す。東西0.65m、南北0.86m、深さ0.32mを測る。内部からは弥生時代後期後半の甕の口縁部が出土している。

出土遺物 (第17図-29)

29はくの字状口縁を持つ甕である。屈曲部を境に上部は横刷毛目、下部は縦刷毛目を残す。弥生時代後期後半か。

SP-45 (第16図)

調査区南側で検出、中央やや南東寄りに柱穴が確認できた。東側と西側を他のビットに切られているが、平面形は隅丸形状をしている。深さはやや浅く、東西1.42m、南北1.16m、深さ0.15mを測る。

出土遺物 (第17図-30)

30は高杯の口縁部である。外面にススが付着し、内外面に横ミガキが残る。弥生時代後期後半に位置付けられる。

(5) ビット

196号ビット

196号ビットは調査区中央部、SP-35の北西側に位置する。北側のビットを切っており、東西0.30m、南北0.25m、深さ0.13mを測る。ビット内部からは非常に小形の石製紡錘車の破片が出土している。

出土遺物 (第18図)

1は非常に小形の紡錘車で、4分の1程度を残している。石材は白色凝灰岩と思われる、側面は研磨している。復元直径は3.0cm、孔径0.5cm、厚さ0.5cm、重さ3.0gを測る。

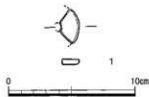
(6) 不明遺構

SX-01

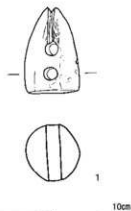
不明遺構は調査区中央部に位置する。平面形状が不定形の遺構で、遺構の性格づけが難しい。他のビットなどに切られている。深さも大変浅く、東西3.34m、南北9.00m + α 、深さ0.03 ~ 0.12mを測る。遺構からは九州型石錘が出土している。

出土遺物 (第19図)

1は糸島型の九州型石錘で、非常に丁寧に製作されている。2つの孔は両面穿孔で、側面に擦った痕跡が残っており、実際に使用されていたようである。長さ6.7cm、幅4.3cm、厚さ4.4cm、重さ171gを測り、石材は滑石製。



第18図 196号ビット出土
石器実測図 (1/3)



第19図 SX-01出土石器
実測図 (1/3)

2. 第2面の遺構と遺物

第2面は第1面の直下で確認された。主に弥生時代中期後半～末にかけての遺物が出土している。主な遺構として掘立柱建物があり、4軒検出されている。しかし、建物内からほとんど遺物が出土していないため詳細な時期は明確ではない。

掘立柱建物の他に、木材を水漬けした遺構を多数確認した。木材には丸太材や端材などが複数集積されている。この遺構は谷部と丘陵部の境に位置し、水漬けした木材を必要に応じて加工していたと考えられる。弥生時代における木材利用の一端を知る上で非常に重要な遺構である。後述するが、掘立柱建物の内部に木材水漬遺構を確認しており、建物を加工場として利用していた可能性がある。

本遺跡の西側に位置し、同じ集落と考えられる深江井牟田遺跡も丘陵部と谷部を確認しているが、木材水漬遺構は検出していない。木製品は出土しているが、圧倒的に本遺跡の方が出土数が多い。同じ集落内でも、木材加工を行う場所や保管する場所は決まっていたと推測できる。集落内の地形利用についても参考となる貴重な例である。

なお、水漬遺構と遺構内の木製品や木材の大きさは必ずしも一致するわけではない。木製品の方が大きい場合もあり、木材水漬遺構が木製品を保管するために作られたのか、いささか疑問である。本遺跡における木材水漬遺構は木材の用途にもよるかもしれないが、短期的な水漬けに留まる可能性がある。飯塚武司氏は、木製品の加工工程内での水漬けの短いサイクルが想定されると述べている。(飯塚2022)。本遺跡においても木製品については同様の可能性がある。

(1) 掘立柱建物

2号掘立柱建物 (第20図)

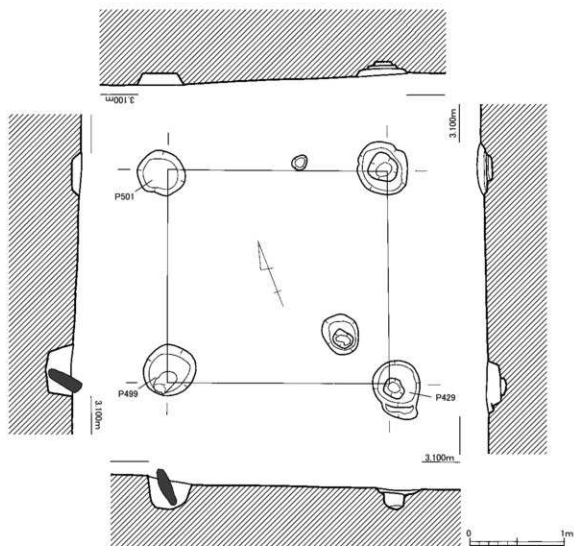
1号掘立柱建物は調査区中央部北側に位置する1×1間の建物である。おおむね正方形に近い形状をしている。桁行き2.25m、梁行き2.10mを測る。西側のP-499には本柱が一部残るが、他の柱穴からは検出されなかった。柱穴の断面形状について、東側の柱穴は2段で、西側は1段掘りとなっている。地形は南側から東側に向かってやや下がっていることも特徴の一つとして捉えることができる。P-429からは保存状態の良い銅鐻が1点出土している。主軸方向はN-30°Wである。

出土遺物 (第21図)

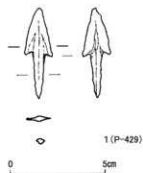
1は有茎銅鐻である。P-429から1点出土している。銅鐻は完形で、茎の断面は菱形を成す。逆刺は鋭く、丁寧な造り。緑青は少なく、赤銅色を呈する。柳田編年ⅡA b型で弥生時代中期後半(柳田2002)。一部地金が確認でき、保存状態が良い。全長4.7cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。

3号掘立柱建物 (第22図)

調査区中央部、2号掘立柱建物の南側で確認された主軸方向N-15°W、1間×2間の長方形の建物である。桁行き4.40m、梁行き2.50mを測る。柱穴には一部、木材を確認できる。この木材はほぼ同様の標高に据えられており、礎板と考えられる。柱穴の断面形状や大きさについてはやや異なるため、規則的な柱穴の形状ではないと考えられる。建物内部の38号土坑からは、木製品加工時の端材の一部が出土しており、建物そのものが覆い屋付きの加工場の可能性がある。柱穴

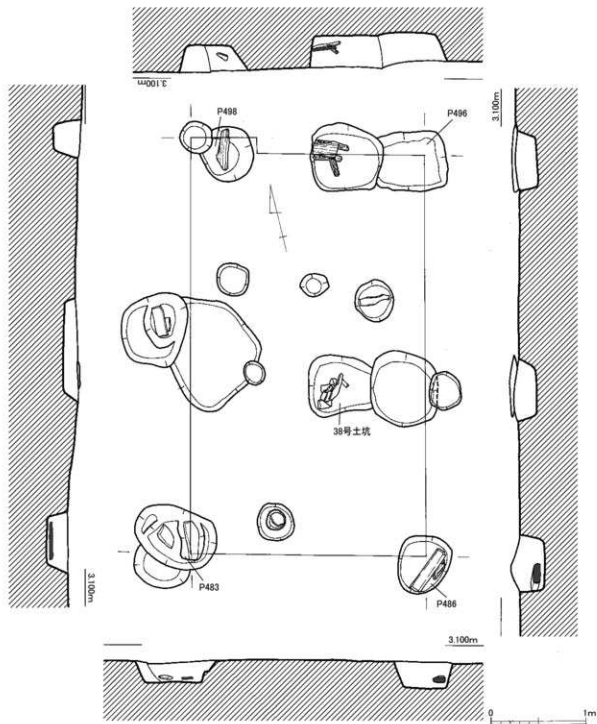


第20図 2号掘立柱建物平面図 (1/40)



第21図 2号掘立柱建物
出土金属器実測図 (1/2)

写真1 2号掘立柱建物出土 銅鏃

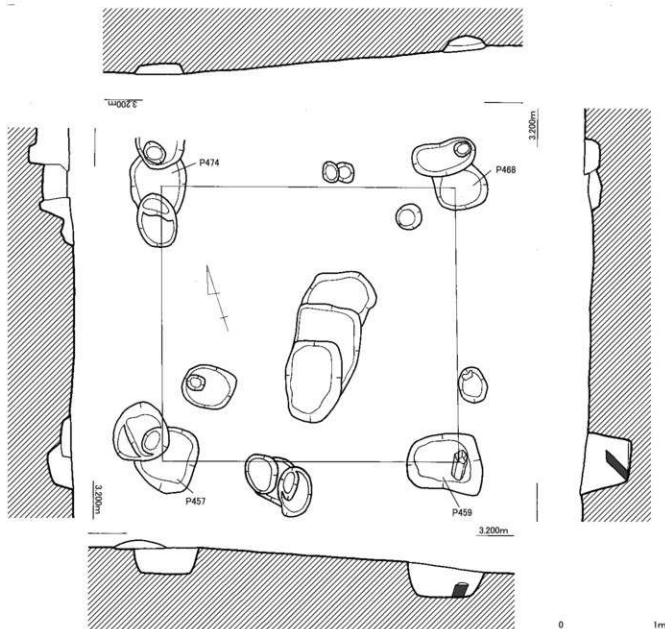


第22図 3号掘立柱建物平面図 (1/40)

からは遺物は出土していない。

4号掘立柱建物 (第23図)

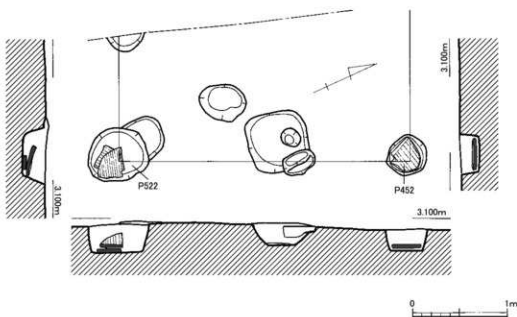
調査区中央部に検出した、1間×1間の正方形に近い建物である。P-459の柱穴には柱が残っているが、柱穴の端に寄っている。建物の中央には土坑が3つ切り合っているが、木材は確認されておらず、木材の加工場かどうかの判断は難しい。地形が東側に向かって下がっており、平坦ではない場所に建てられたことが特徴として挙げられる。桁行き2.90m、梁行き3.15mを測り、主軸方向はN-18°-Wである。柱穴から土器などの遺物は出土していない。



第23図 4号掘立柱建物平面図(1/40)

5号掘立柱建物(第24図)

調査区中央部で検出した、梁行き2間の建物である。西側が調査区外に伸びている。P-452とP-522の2つの柱穴からは、ネズミ返しを転用した礎板がそれぞれ出土している。特にP-522の礎板については、P-452の礎板に高さを合わせるため、1枚板を敷いて高さを調整している。ネズミ返しを礎板として再利用することについては、木製品のライフサイクルにも関わることで大変興味深い。再利用された2つのネズミ返しは同一個体ではないようである。P-452については、礎板の大きさに合わせて柱穴を掘っているようにもみえることから、当時の柱穴の掘り方を考える上で参考となる。同じく掘り方に関連して、P-522を礎板に合わせて掘っていない理由が疑問点として残る。なお、柱穴からは礎板以外の遺物は出土していない。桁行き1.60m+α、梁行き3.08mを測り、主軸方向はN-25°-Wである。



第24図 5号掘立柱建物平面図 (1/40)

(2) 土坑

29号土坑 (第25図)

調査区南側で検出された。土坑北側に板状の木製品が確認できる。平面形状は歪な隅丸長方形を呈し、東西1.14m、南北1.59m、深さ0.50mを測る。板材の他、器台の脚部や甕の口縁部などが出土した。

出土遺物 (第29図-35, 36)

35は弥生時代後期後半の器台脚部である。やや小型で、端部は丸みを帯びる。外面は縦刷毛目、内面は横刷毛目で、二次焼成を受けている。やや荒い工具痕が確認できる。36は甕の口縁部片である。やや直線的に胴部に向かって伸びる。外面はナデしており、スガが付着する。弥生時代中期末に位置付けられる。

30号土坑 (第25図)

調査区南側で検出した。土坑北側に樹皮を残した半裁材などを集積している。東西1.10m、南北1.16m、深さ0.60mを測る。

出土遺物 (第29図-37)

37は弥生時代中期末の袋状口縁壺の口縁部片である。端部の内傾が緩く、刷毛目の上にナデを施す。

31号土坑 (第25図)

調査区南側で検出した。土坑の西側で柱穴が確認できる。土坑内の木材について、おそらく柱として機能していたものが、東側に倒れた状態で検出されたと考えられる。東西0.90m、南北0.80m、深さ0.42mを測る。

32号土坑 (第25図)

調査区南側で検出され、土坑全体を利用して木材を集積している様子が分かる。土坑南側はテラス状となっている。断面形状は、逆台形を呈する。東西1.15m、南北1.80m、深さ0.42mを測

る。土坑からは木材は半裁材のほか、ネズミ返しの転用品、甕の底部などが出土している。

出土遺物（第29図-38）

38は甕の底部片で、緩やかなカーブを描く。外面は縦刷毛目、内面にはナデが施される。弥生時代後期後半。

33号土坑（第25図）

調査区南側で検出し、土坑中央部に柱穴を確認できる。土坑上層には板状の木材があり、使用しなくなった大きめの柱穴とその掘り方を、木材水漬遺構として利用した可能性がある。東西1.05m、南北2.02m、深さ0.48mを測る。出土木材としては、ネズミ返しの転用品が確認できる。このほかに甕の底部が出土している。

出土遺物（第29図-39）

39は甕で、凸レンズ状の底部である。胴部から直線的に伸びており、外面は縦刷毛目、内面は工具痕が残るナデである。

34号土坑（第25図）

調査区南側で検出した平面方形の木材水漬遺構である。土坑北側には端材と考えられる板状の木材が複数重ねられている様子が分かる。土坑底面中央部はやや高くなっている。東西1.45m、南北1.68m、深さ0.50mを測る。

出土遺物（第29図-40、41、51）

40は複合口縁壺の口縁端部か。器壁はやや薄手で、外面は縦刷毛目、内面には指頭痕が明瞭に並ぶ。41は鉢の口縁部で、胴部に向かって緩やかに伸びる。内外面共に刷毛目をナデ消している様子が分かる。弥生時代中期末。51は小形の有溝石錘。擦り切りで溝を作っており、石材は滑石。長さ1.9cm + α 、幅1.25cm、厚さ0.8cm、重さ2gである。

35号土坑（第25図）

調査区南側で検出した、平面形はやや歪な長方形をしている。土坑西側で、芯持ち材を使用した建築材の出土が確認できる。なお、土器は出土していない。東西2.28m、南北1.05m、深さ0.50mを測る。

36号土坑（第25図）

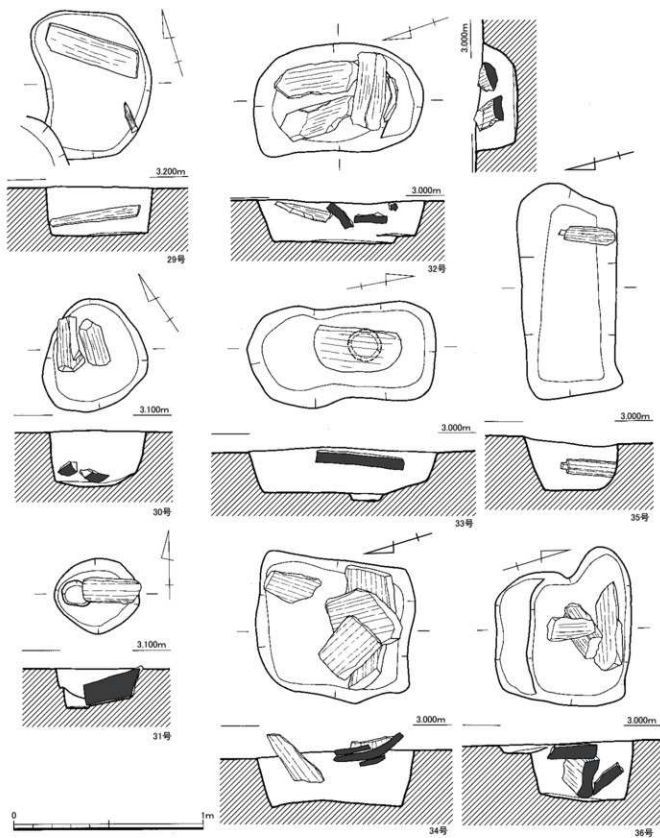
調査区中央部南側で確認した、南側にテラスを持つ木材水漬遺構である。東西1.68m、南北1.45m、深さ0.60mを測る。出土した木材は芯持ち材や樹皮が残る半裁材が出土している。土器は出土していない。

37号土坑（第26図）

調査区中央部で検出された、平面形状は円形、断面形状は逆台形の木材水漬遺構である。半裁材など複数の木材が出土しているが、土器は出土していない。東西1.30m、南北1.35m、深さ0.60mを測る。

38号土坑（第26図）

調査区中央部北側で検出した木材水漬遺構である。この土坑は3号掘立柱建物内に位置しており、木材の加工場として機能していたと考えられる。土坑内は端材と考えられる木材が出土し、東西1.34m + α 、南北1.32m、深さ0.82mを測る。



第25図 29～36号土坑平面断面図 (1/20)

出土遺物（第29図-42）

42は弥生時代中期末の甕の底部片で、緩やかに底に向かってすばまる。下部には指頭痕が残り、縦刷毛目を施す。内面も縦方向の刷毛目がみられる。

39号土坑（第26図）

調査区中央部北側で確認した木材水漬遺構で、断面は逆台形をしている。東西0.84m、南北0.60m、深さ0.25mを測る。土器は出土していない。

40号土坑（第26図）

調査区南側で検出の木材水漬遺構である。土坑内には広楕が確認でき、加工途中の未製品を水漬けにしておいた可能性がある。断面形状は逆台形を呈し、東西0.66m、南北0.60m、深さ0.25mを測る。土器は出土していない。

41号土坑（第26図）

調査区中央部北側で検出した、平面形隅丸方形の木材水漬遺構である。端材と考えられる木材が重なって水漬けになっている様子が分かる。東西28.8m、南北1.45m、深さ0.62mを測る。土器は出土していない。

42号土坑（第26図）

調査区中央部北側で検出されたもので、柱穴が土坑を切っている。柱穴は礎板に柱を立てている。土坑からは板材が2点出土。板材の他、土器が1点出土している。東西1.00m+α、南北1.92m、深さ0.28mを測る。

出土遺物（第29図-43）

43は、くの字状口縁の甕である。端部は若干肥厚しており、外面の縦刷毛目は明瞭さに欠ける。内面は屈曲部に指で押さえた痕跡が残り、口縁部に横刷毛目が施される。弥生時代後期後半頃に位置付けられるが、混入と思われる。

43号土坑（第26図）

調査区南側で確認された木材水漬遺構である。平面形状はやや歪な円形を呈し、土坑のテラス部分に木材が集積されている。出土した木材には樹皮を残したまま、放射状分割したものが確認でき、当時の木材産出方法が分かる貴重な資料である。この他、土器が1点出土している。東西1.15m、南北1.13m、深さ0.45mを測る。

出土遺物（第29図-44）

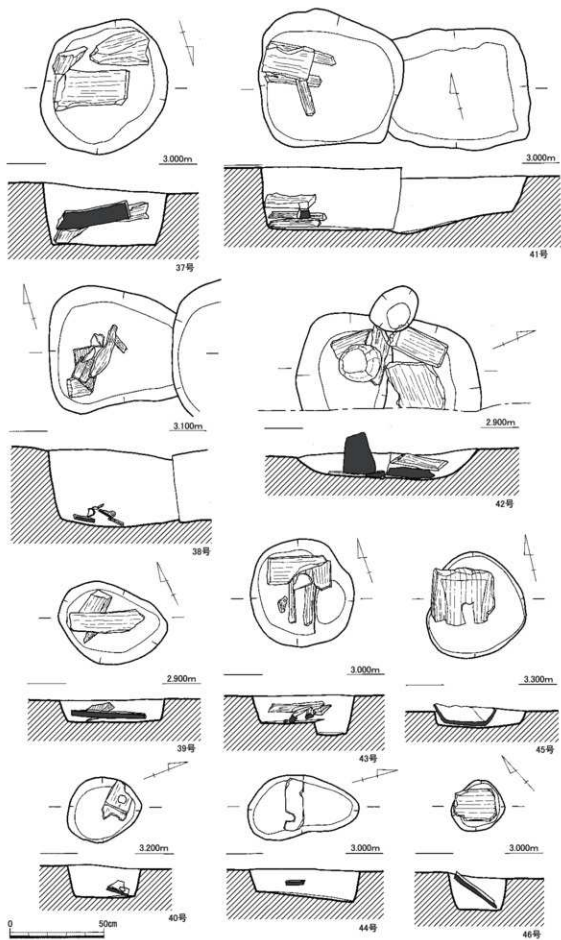
44は弥生時代中期末の甕の口縁部で、くの字状で緩やかな屈曲部を持つ。内外面ともにナデを施している。

44号土坑（第26図）

調査区南側で検出した土坑で、平面形状は歪な楕円形を呈する。中央に加工途中の木材が確認できた。土坑の深さは北側に向かって深くなる。東西0.65m、南北1.20m、深さ0.32mを測る。土器は出土していない。

45号土坑（第26図）

調査区南側で検出し、土坑内に未製品の木製品が確認できる。加工途中の木製品を水漬けしていたと考えられる。土坑の深さより、高さのある木製品であり、木製品全体が水に浸からない。東西1.06m、南北1.12m、深さ0.18mを測る。



第26図 37～46号土坑平面断面図 (1/20)

出土遺物（第29図-45）

45は器台の底部で、内傾の角度があまく、やや小形の器台か。外面にはナデと指頭痕が残り、内面は横方向の刷毛目が確認できる。弥生時代中期後半に比定できる。

46号土坑（第26図）

調査区北側で検出した、平面形状が隅丸方形土坑である。断面を確認すると、木材を立て掛けるようにして水漬けている様子がわかる。木製品が若干土坑から出ている点は、45号土坑と同様である。東西0.42m、南北0.38m、深さ0.25mを測る。土器は出土していない。

47号土坑（第27図）

調査区北側で確認した木材水漬遺構である。平面形状は不定形で、緩やかに落ちる斜面に掘られている。出土した木材は重なるようにして置かれていた。木材は端材が多く、端材だけを集積していた様子が窺える。木材のほかに、甕の口縁部が出土した。東西1.02m、南北1.40m、深さ0.28mを測る。

出土遺物（第29図-46）

46は甕の口縁部片で、屈曲部の下に沈線が確認できる。緩やかに胴部に向かって伸びており、内外面ともにナデを施す。内面には一部指頭痕が残る。弥生時代中期中頃に位置付けられ、本遺跡内で最も古い時期を示す。

48号土坑（第27図）

調査区南側で確認された土坑で、木材水漬遺構と考えられる。平面形状は歪な円形を呈し、断面形は逆台形となる。木材が2点出土しており、内1点は工作台として利用されたのであろう。刃物痕が残る板材である。木製品以外の遺物は出土していない。東西1.58m、南北1.45m、深さ0.20mを測る。

49号土坑（第27図）

調査区中央部で検出された土坑で、中央の木製品はネズミ返しを転用している。5号掘立柱建物では同様の転用品が礎板として使用されていたが、本土坑は掘立柱建物の柱穴には該当しなかった。東西1.46m、南北1.38m、深さ0.48mを測る。木製品以外の遺物は確認出来なかった。

50号土坑（第27図）

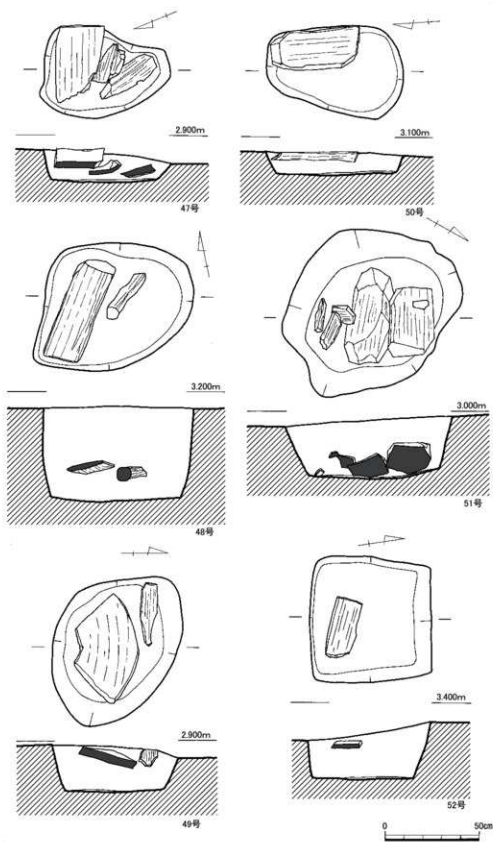
調査区中央部南端で検出した土坑で、刃物キズが残る板材が出土しており、工作台として利用されたと考えられる。平面形状は歪な楕円形を呈し、東西1.00m、南北1.45m、深さ0.20mを測る。土器は出土していない。

51号土坑（第27図）

調査区中央部で検出した木材水漬遺構で、丸太半裁材を水漬けている。平面形状は歪な円形で、断面形は逆台形をしている。木材のほか、甕の口縁端部が出土している。東西1.90m、南北1.60m、深さ0.60mを測る。

出土遺物（第29図-47）

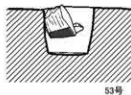
47は甕の口縁端部である。縦方向に刻み目を複数施したあと、上から一直線に横方向の刻み目を施している。下部には刷毛目の痕跡が残る。弥生時代後期と考えられるが、端部のみであるため、詳細な時期の位置付けは難しい。



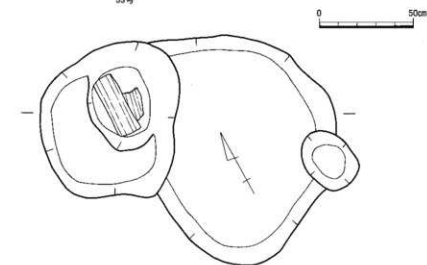
第27図 47～52号土坑平面断面図 (1/20)

**52号土坑 (第27図)**

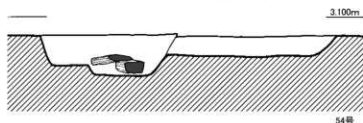
調査区南側で検出し、平面形は方形を呈する。緩やかな斜面に掘られており、土坑の南側から板材が1点出土している。東西1.32m、南北1.30m、深さ0.52mを測る。土器は出土していない。

**53号土坑 (第28図)**

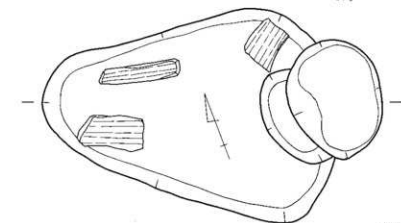
調査区南側で検出された木材水漬遺構である。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形をしている。土坑内からは2点の半裁材のほか、土器が1点出土している。東西1.30m、南北0.55m、深さ0.48mを測る。

**出土遺物 (第29図-48)**

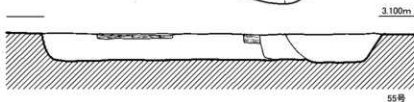
48は甕の口縁部で端部を欠損している。内外面ともに、丹塗りを施している。口縁端部が続く方向から、時期は弥生時代後期後半と推測でき、混入したものと思われる。

**54号土坑 (第28図)**

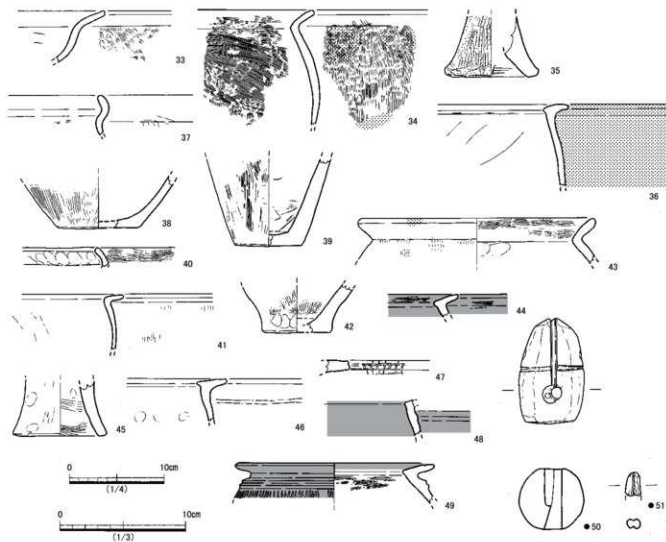
調査区中央部で検出された。西側にテラスを持つ木材水漬遺構である。東側の土坑を切っており、平面形状は隅丸方形を呈している。土坑からは半裁材が2点、重なるように出土している。木材のほか、弥生時代中期末の壺が1点出土している。東西3.12m、南北2.40m、深さ0.42mを測る。

**出土遺物 (第29図-49)**

49は弥生時代中期末に位置付けられる壺の口縁部である。口縁はやや内傾し、胴部に向かって大きく開く。頸部外面にはM字状の突帯を巡らせる。突帯の下には、やや



第28図 53～55号土坑平面断面図 (1/20)



第29図 土坑出土遺物実測図② (●は1/3・1/4)

間隔がまばらな暗文状の縦ミガキを施す。内面は頭部に横刷毛目を行い、その上から刷毛目を一部ナデ消している。

55号土坑 (第28図)

調査区の南側で検出された木材水漬遺構である。東側の一部をビットに切られている。土坑内からは3点の木材が出土しており、内2点は外見の様子から同一個体と考えられるが、接合はしなかった。他の木材集積土坑は木材が重なって置かれているものが多いのに対して、本土坑は木材が土坑内でバラバラに配置されている。木材以外の出土遺物は確認出来ず、東西2.70m + α、南北2.30m、深さ0.25mを測る。

3. 谷部包含層

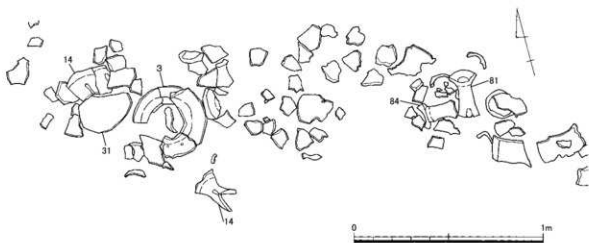
(1) 概要

谷部の包含層では、数層にわたる土器類の堆積が認められた。大きくは、弥生時代後期後半～古墳時代初頭（上層）、弥生時代中期後半～後期中頃（中層）、弥生時代中期後半（下層）3層に分かれ、出土した土器や石器、木器類は、パンケース約420箱に及ぶ。層位は間層を挟まないため、土器群を明確に分離することが難しく、時代を前後する土器が混じる。これら膨大な遺物の堆積は、この谷に弥生時代中期後半～古墳時代初頭にかけて営為が継続したことを示している。これら土器群のうち、特定できる遺物については、図に番号を付しており、挿図に付した出土遺物番号と合致する。

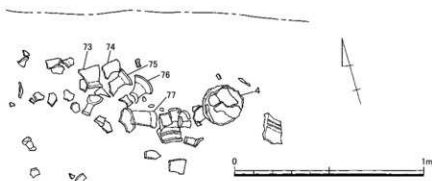
(2) 遺物の出土状況（第30～34図）

①上層遺物出土状況

黒色層に含まれる土器群で、谷の始まりから9m程度離れて検出されているのは、この堆積がほ場整備の造成により削平されているためである。土器は、複合口縁壺や大形壺、甕、高杯、鉢形土器など多様な器種が存在するが、器台の多さが目を引く。また、内面朱付着土器や楽浪系土器、外來系土器の出土は特筆に値する。内面朱着土器は主に鉢形土器で、石杵も出土している。楽浪系土器は、鉢・壺の破片が多く、隣地である深江井牟田遺跡の出土数に新たに加わるものである。外來系土器については、吉備や瀬戸内など瀬戸内海沿岸地域の影響を受けた壺の破片や大形器台が出土する。土器群1は、谷部南側で検出された土器の集積で、吉備系大形器台や大形鋤先口縁壺の口縁部片、器台が出土している。大形器台は横の状態、大形壺が口縁を下にした状態で検出されている（第30図）。土器群2は、在地系の大形器台が放射状にまとまった形で出土し、大形壺の胴下半と共伴する。糸島地域でも大形器台の出土数は少なく、意図した祭祀の痕跡と考えられる。大形器台は、中形壺を支える台として機能していた可能性がある（第31図）。



第30図 谷部包含層上層土器群1遺物出土状況（1/20）



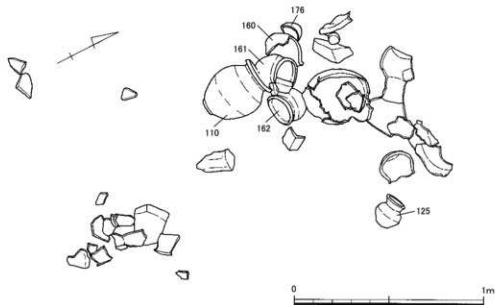
第31図 谷部包含層上層土器群2遺物出土状況 (1/20)

②中層遺物出土状況

この時期の遺物を含む堆積は、削平を免れ、谷部の西側つまり居住域に近いところに集積している。出土が最も多いのは弥生時代中期末～後期前半で、弥生時代中期後半や後期中頃の遺物は少量である。くの字口縁甕や複合口縁壺、高杯、器台、支脚が出土し、支脚は4個まとまっていた出土である。注目される遺物として、鯨の線刻のある絵画土器や有窓土器がある。有窓土器は、焼成前に円形もしくは隅丸方形の孔を甕の胸部に空けた土器で、弥生時代後期前半の資料である。また、木製農具や背負子、容器、案の部材などの木製品を包含し、外來系土器としては、中国地方の擬回線文のある口縁部片が出土している。土器群3は、谷部包含層の南側で、数個まとまって完形の土器が出土したもので、水辺の祭祀と見られる(第32図)。

③下層遺物出土状況

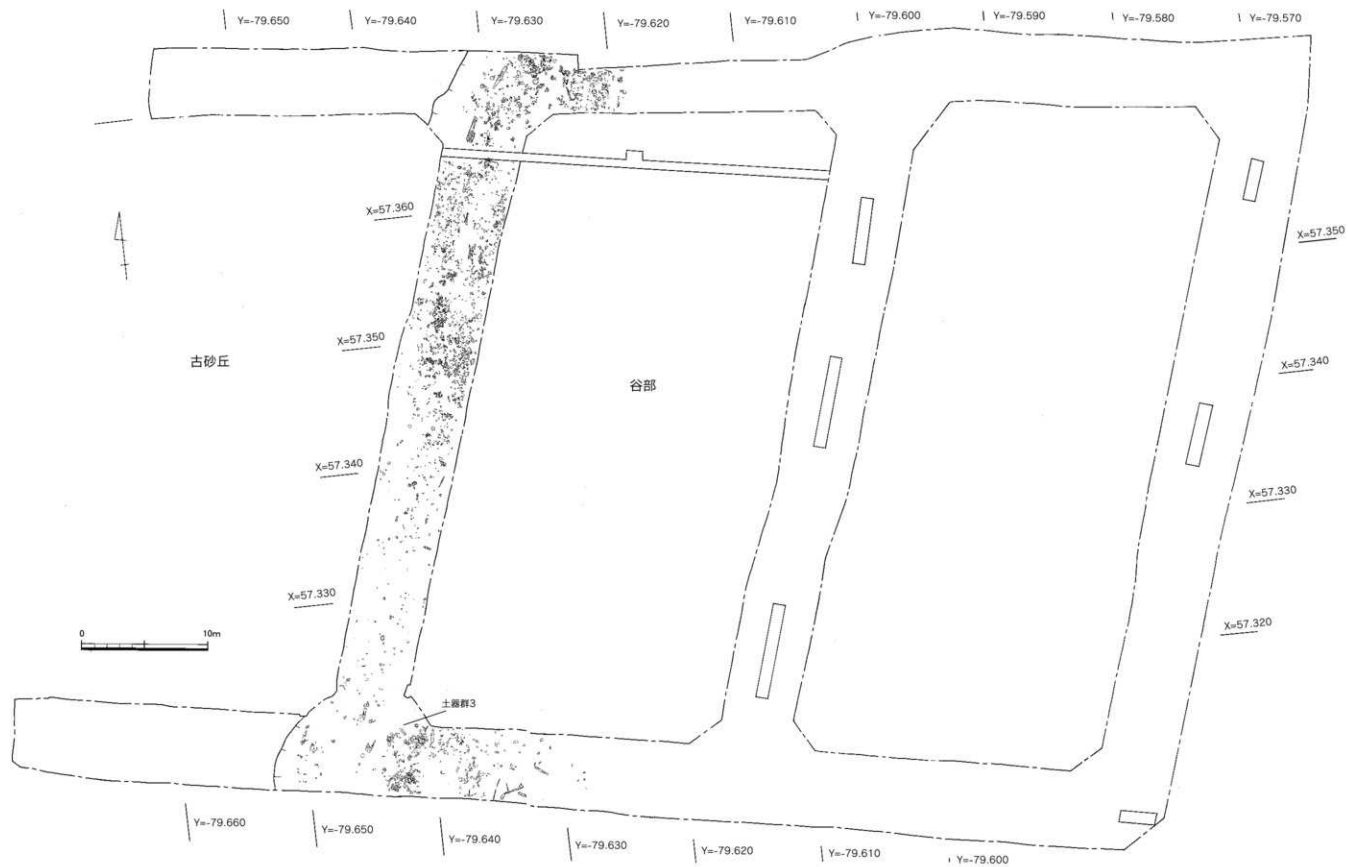
いわゆる植物遺存層(バフン層)で、丹塗り磨研の鋤先口縁壺、甕、高杯などが出土する。木器製作に係る掘立柱建物や土坑は、この面からの掘削である。この層は、調査区の東側に向かって、次第に厚くなっており、調査区東端のトレンチで1m以上を掘削したが、湧水がひどく、調査が困難と判断した。遺物は調査区西側の居住域近くに多く堆積し、東に向かうにつれて土器の出土は皆無となっている。流木を多く含んでいるため、今後の調査に期待したい。



第32図 谷部包含層中層土器群3遺物出土状況 (1/20)



第33図 谷部包含層遺物出土状況実測図（上層）（1/50）



第34図 谷部包含層遺物出土状況実測図 (中層) (1/300)

調査区東側に展開する谷部には、弥生時代中期後半～古墳時代初頭に至る大量の遺物が出土した。土器や石器、金属器、木器などバンケース420箱にも及ぶ遺物は、西側の拠点集落から廃棄されたものと想定され、集落から東に離れるほど出土点数が減少する。特筆すべき遺物としては、楽浪系土器や外来系土器、朱精製土器などがある。

(3) 土器（上層）（第35～41図）

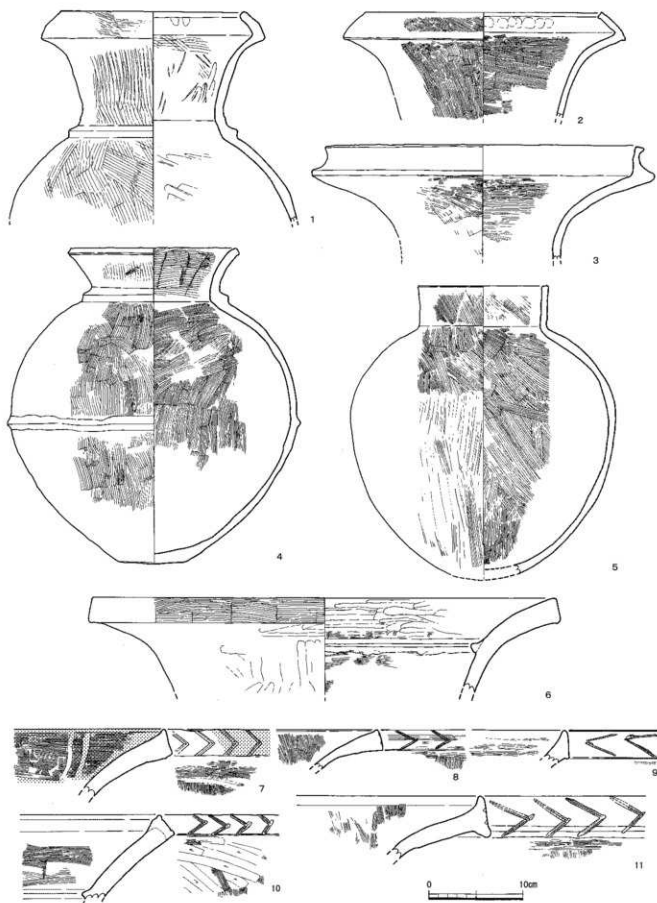
壺（1～26）

1は複合口縁壺で、胴下位を欠損する。複合口縁から頸部まで真っ直ぐに延び、頸部下に突帯を1条巡らす。外面は、粗い刷毛目調整である。2も複合口縁壺で、口縁～頸部が残存。1よりも口縁部の屈曲が強い。外面は斜方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整である。3は口縁端部が反転する複合口縁壺で、弥生時代後期末である。4は口縁が開き気味となる壺で、頸部の付け根に突帯を1条巡らす。胴部最大径が胴中位にあり、三角突帯を1条貼付する。内外面ともに刷毛目調整である。5は直口縁の壺で、胴部最大径が胴上位にあり肩が張る。外面は上位が刷毛目調整、下位は棒状工具によるナデ、内面は斜方向の刷毛目調整である。古墳時代初頭。6は糸島型の大形で、壺の口縁が簡略化して、内面に突帯を1条付すもの。口縁端部は横方向の刷毛目で、頸部は強いナデで成型する。弥生時代終末期。7は大形壺の口縁部片で、口縁端部に羽状文を施す。調整は内外ともに刷毛目調整である。8は中形壺の口縁部片で、口縁端部に羽状文。9は上方へのはね上げが強い口縁部片で、口縁端部にへら描き羽状文。10は大形壺の口縁部片で、口縁端部にへら描き羽状文を施す。外面調整は刷毛目調整の後、板ナデである。11も大形壺の口縁部片で、上下に発達する口縁端部にへら描き羽状文を施す。

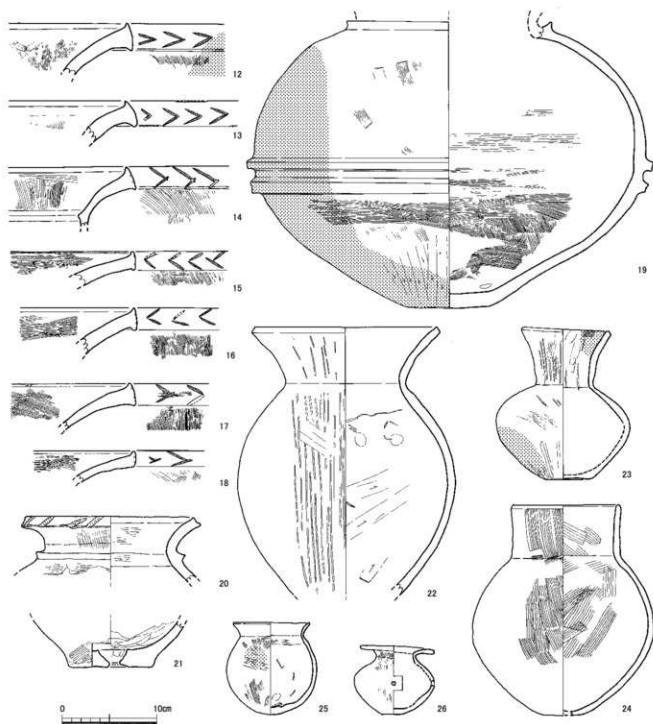
12は口縁端部に羽状文を施す大形壺の口縁部片で、外面は刷毛目調整である。13～18は糸島型中形壺の口縁部片で、口縁端部に羽状文。調整は刷毛目調整である。口縁内面に三角突帯を1条付す。弥生時代終末期。19は糸島型大形壺の胴部～底部で、頸部以上を欠損する。頸部の付け根に三角突帯1条、胴部中位に2条のコの字突帯を2条貼付する。底部は若干丸みを帯び、弥生時代後期後半である。20は壺の口縁部片で、口縁下に三角突帯を1条付し、口縁端部にへら描きの刻み目を施す。21は壺の底部片で、焼成前穿孔の底部穿孔土器である。22は、口縁が上方に開く素口縁壺で、外面は棒状工具によるナデ調整である。23は直口縁壺で頸部がやや開く。頸部外面は縦方向の刷毛目の後、暗文風ミガキ。胴部外面はミガキである。24は直口縁壺で、調整は内外面共に刷毛目調整。底部はやや丸みを帯びる底部で、古墳時代初頭。25は小形の丸底壺で、刷毛目の後、板ナデで調整する。26は小形壺で、水平の口縁から強い湾曲する頸部が特徴である。胴部穿孔があり、注口的な土器か。

甕（27～35）

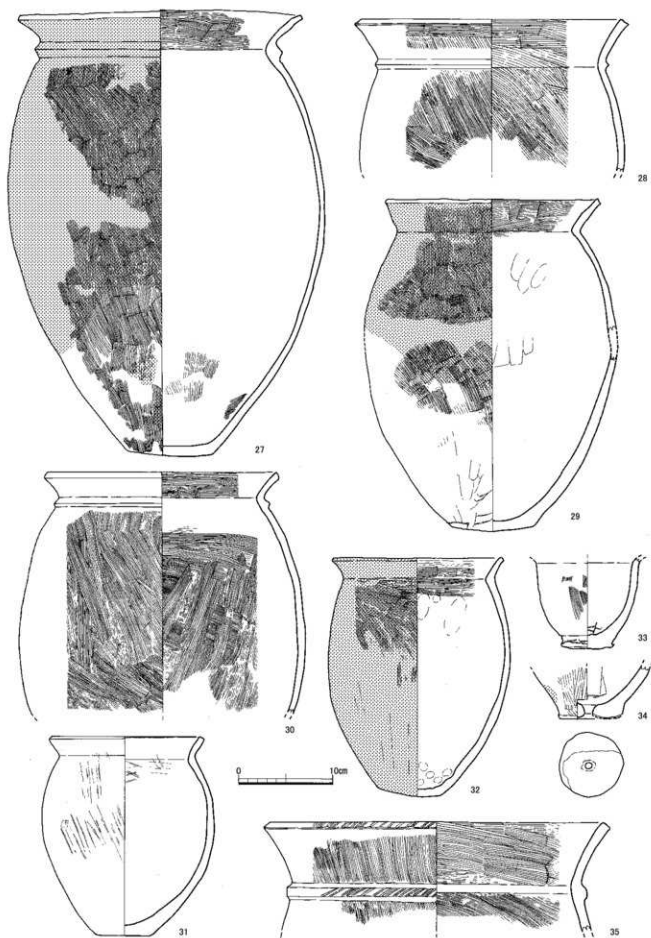
27は、くの字口縁をもつ甕で、口縁下に三角突帯を1条貼付する。胴部外面は斜方向の刷毛目調整、口縁内面は横方向の刷毛目調整で、底部はレンズ状となっており、弥生時代後期後半。28は口縁～胴上部片で、くの字口縁甕である。内外面共に刷毛目調整である。29もくの字口縁甕であるが、接合しないが同一個体と考えられる。30は、くの字口縁をもつ中形甕で、胴下位以下を欠損する。内外面共に刷毛目調整。31は、くの字口縁の小形甕で、平底である。外面は刷毛目調整の後、棒状工具によるナデを施す。32も小形甕で、レンズ状の底部である。外面胴部は、上位が刷毛目調整で、下位は板状工具によるナデである。



第35図 谷部包含層出土土器実測図① (1/4)



第36図 谷部包含層出土土器実測図② (1/4)



第37図 谷部包含層出土土器実測図③ (1/4)

33は口縁が外に開く小形甕で、胴部から底部に至る刷毛目調整が強く、底部の形が歪となる。34は底部穿孔土器で焼成前穿孔。35は中形甕で、口縁端部と突帯に刻み目を施す。

鉢 (36～63)

36は短い口縁が外反する鉢で、平底である。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は強いナデで成形する。37は、外反する口縁がつく鉢で、底部は若干丸みを帯びる。外面は縦方向の刷毛目調整、胴部内面はナデである。38の鉢は、胴部が直線的に延び、口縁がやや外反する。胴部下位はケズリ、内面は刷毛目が残る。39は脚付鉢で、椀状の胴部から口縁が強く外反する。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁内面は横方向の刷毛目調整である。40は脚付鉢の脚部のみ残存で、4孔開ける。41は深い鉢形土器で、短く外反する口縁に椀状の胴部をもつ。胴部外面は横方向のミガキ調整を行う。42は小形丸底鉢で、内外面共に刷毛目調整で、口縁と胴部の付け根の指頭圧痕が強く残る。43は小さなレンズ状底部を持つ鉢で、内外面共に刷毛目調整。44～46は若干の丸みを帯びる底部を持つ鉢で、外面はナデ調整、内面は板ナデである。47は小形丸底壺で、内外面共にナデ調整。内面の黄色に変色している部分は、腐植層の植物付着によるものか。48～51は深さがあり椀に近い鉢形土器で、底部は平底のものが多く、51は丸底である。内外面共に強い板ナデで仕上げる。52～54は胴部が直線的に延びる鉢で、52、53の外面は刷毛目調整、内面板ナデ調整。54は小さいため、指ナデで成形する。55～61は手づくね土器で、調整は内外面共に指ナデか板ナデで成形する。62は丹塗り磨研の蓋で、全体ミガキ調整。かなり小さな蓋で、小穴の位置から対応する容器はかなり小形のものである。63は小形の埴で、外面は粗い刷毛目調整。

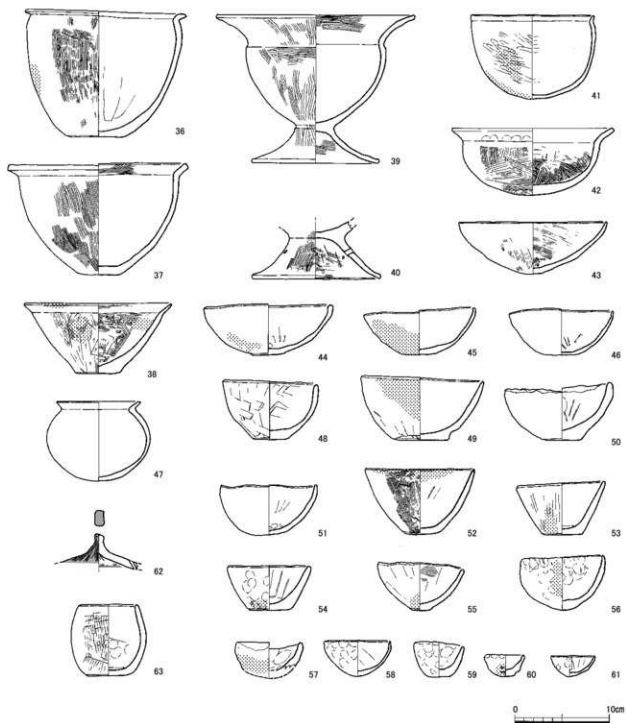
高杯 (64～72)

64は口縁が上方に外反する高杯で、脚部を欠損する。ミガキ調整の痕跡はなく、刷毛目調整の後に板状工具によるナデで仕上げている。65の高杯は、64よりも口縁がより鋭角に外反する。やはりミガキは見られず、刷毛目調整の後、板ナデである。脚部を欠損する。66は口縁外面に波状文の暗文を巡らす高杯で、脚部を欠損する。杯部外面は横方向のミガキ調整で脚部に近いところは縦方向のミガキ調整。内面も縦方向のミガキ調整である。67は高杯の口縁部片で、内外面共に細かなミガキ調整を施す。68は脚部を欠損する高杯で、風化のためミガキ調整が不明瞭である。69は高杯の口縁部片で、外反する口縁部と杯部の境に明瞭な稜が入る。内外面共にミガキ調整。70は、口縁の外反が浅くなり、杯部との境の稜が緩くなる高杯で、脚部を欠損する。杯部外面は、斜方向のミガキ調整、脚部外面は縦方向のミガキ調整、杯部内面は放射状にミガキ調整を行う。71は高杯の脚部片で、外面は縦方向のミガキ調整、内面の脚部は横方向の刷毛目調整が残る。72の高杯は杯部が深くなり、口縁部が上方に外反する。内外面共に刷毛目調整。

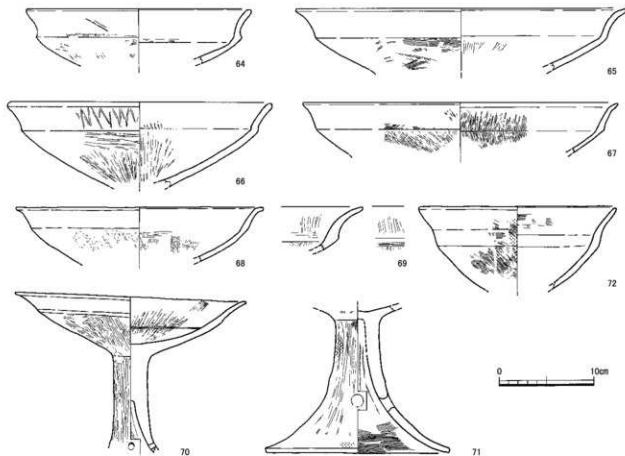
64は弥生時代後期後半古段階、65～69は弥生時代後期後半新段階、70は弥生時代終末、71は古墳時代初頭である。

器台 (73～99)

73～77の器台は、在地系であるが、通常よりもかなり大形で、包含層よりまとまった形で出土したものである。73は大形器台で、内外面共に粗い刷毛目調整で、輪積み粘土の接続痕が残る。口径19.5cm、器高22.0cm、底径20.0cmを測る。74は大形器台である。風化が著しいため、外面の調整が不明瞭であるが、本来は刷毛目調整の可能性が高い。内面に横方向の刷毛目調整と中下位に指頭圧痕がわずかに残る。口径16.5cm、器高20.9cm、底径19.2cmを測る。



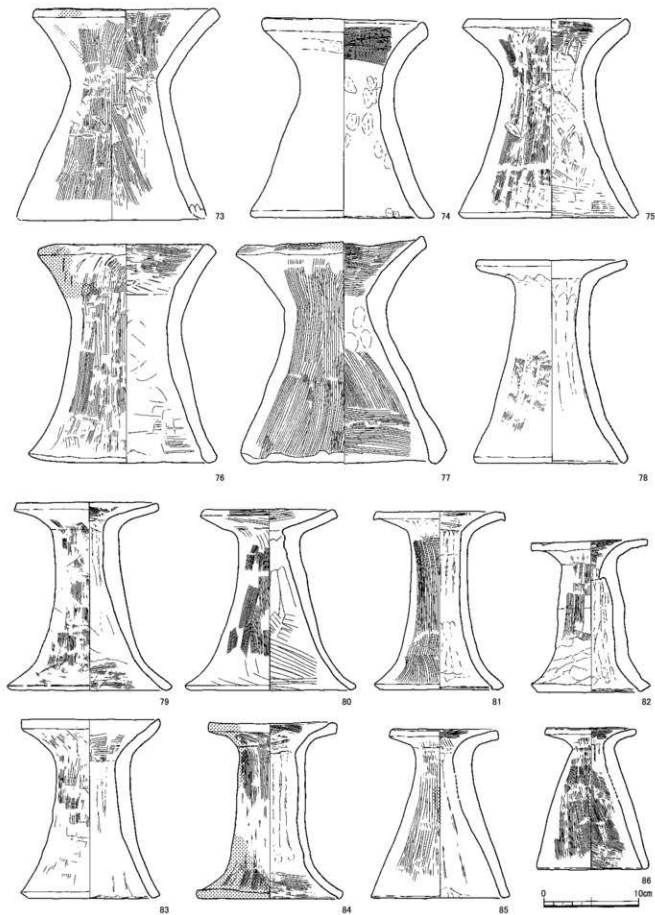
第38図 谷部包含層出土土器実測図④ (1/4)



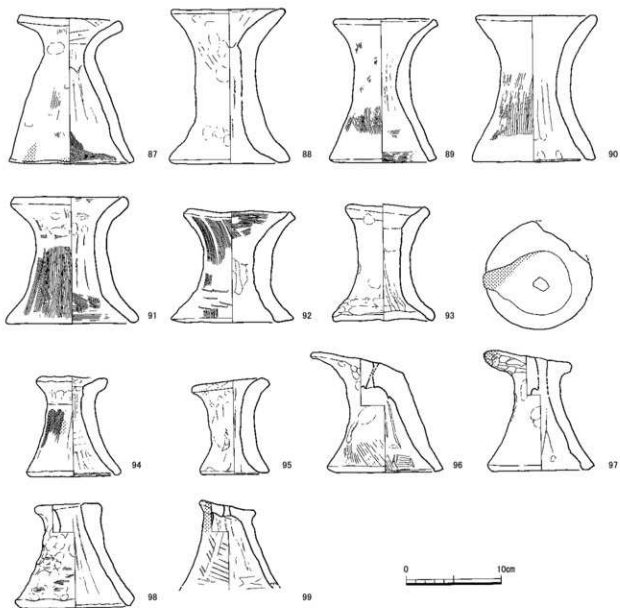
第39図 谷部包含層出土土器実測図⑤ (1/4)

75は上位で口縁が外反する大形器台で、外面は刷毛面調整、内面は刷毛目調整の後、中位辺りにシボリの痕跡がある。口径17.6cm、器高20.8cm、底径19.0cmを測る。76は大形器台で中位から外反する形状。内外面共に刷毛目調整が中心で、中位内面に指ナゲ痕が残る。口径18.7cm、器高22.9cm、底径18.8cmを測る。77の大形器台は、上位で大きく外反する形状で、内外面共に粗い刷毛目調整で、口縁端部は横方向の刷毛目の後に横ナゲを行う。大形器台は、その製作が粗いものが多く、その粗さが口縁や裾端部によく現れている。78～85は在地系の中形器台で、胴上位から外反するものである。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁内面は横方向の刷毛目調整、胴中位にシボリ痕跡がある。86～95は小形器台で、85・86・87・88・94は胴上位から外反するもの。89～95は胴中位から外反するものである。基本的には調整はすべて同じで、外面は縦方向の刷毛目調整、内面の口縁部、裾部は横方向の刷毛目調整、胴中位はシボリで成形する。96～99は杵形器台で、外面を刷毛目調整の後、指オサエで成形するもの(96～98)とタタキで成形するもの(99)がある。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭の包含層からは、他器種と比べて器台の出土が多い。また、その土器製作は三雲・井原遺跡と比べて、器厚が厚く、調整や造りが粗い点が、深江城崎遺跡の特徴と考えられる。



第40図 谷部包含層出土土器実測図⑥ (1/4)



第41図 谷部包含層出土土器実測図⑦ (1/4)

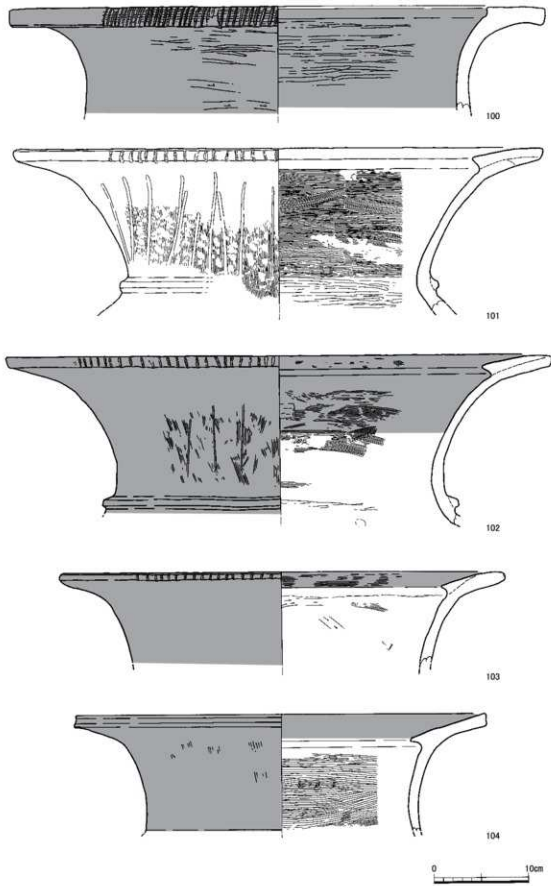
(4) 土器 (中層) (第42～58図)

壺 (100～130)

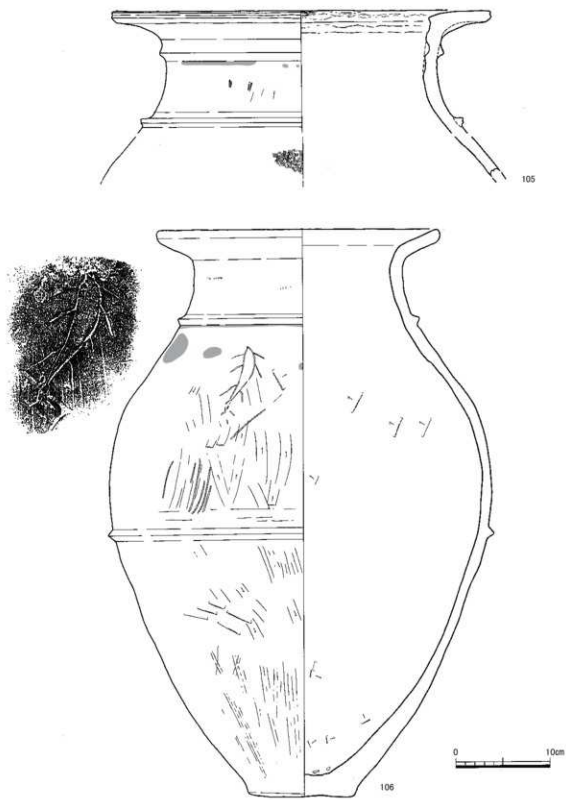
100は、大形鋤先口縁壺である。水平の鋤先口縁で、端部に刻み目を施す。内外面共に横方向のミガキ調整。丹塗り磨研土器である。101は鋤先口縁壺で、口縁が内傾化する。口縁端部は刻み目を施し、頸部外面は縦ミガキ→ナデ→暗文の順で調整・装飾している。頸部内面は横方向の刷毛目で、突帯付近はミガキ調整である。102は口縁が内傾する鋤先口縁壺で、調整は101と同じである。口縁端部に刻み目がある。103は鋤先口縁壺の口縁部片で、内面は横方向の刷毛目調整である。104は鋤先口縁壺で、口縁の内傾化がさらに進み、頸部外面はミガキではなく、刷毛目の後ナデ調整。頸部内面は横方向の粗い刷毛目調整である。100が弥生時代中期後半。101～103が弥生時代中期末～後期初頭。104が弥生時代後期前半である。105は大形鋤先口縁壺の口縁部～胴上部の破片で、口縁内面は風化により剥離している。頸部と胴部の境だけではなく口縁下に三角突帯を1条巡らす例はあまり見ない。106は素口縁の大形壺で、絵画土器である。頸部と胴部の三角突帯を巡らし、胴部外面は、刷毛目調整の後ナデ消し、胴部内面は板ナデである。線刻文様は「鯨」と考えられ、その俯瞰的な構図は、原の辻遺跡石田大原地区23号壺墓下壺例と似ている。それを参考にすると、曲がった胴体に胸ビレと先端に尾ビレを2本の線刻で描いていることになるが、他の頭側の2本と背びれ近くの2本線刻が、原の辻遺跡例のように銛としてよいのか判断が難しい。本例は弥生時代後期前半であり、弥生時代中期末の原の辻遺跡例と同じ素口縁壺で絵画が同じ胴上位に描かれているが、時期差がある。107は鋤先口縁壺で、丹塗り磨研の祭祀土器である。三角突帯を頸部～胴部にかけて4条巡らし、頸部外面に暗文を入れる。胴部は板ナデの後にミガキ調整である。108は鋤先口縁壺で、口縁下、頸部と胴部との境にM字突帯を巡らす。頸部外面に暗文風の縦ミガキを施す。109は肩が張る鋤先口縁壺で、胴下半を欠損する。外面はミガキではなく板ナデで、頸部外面に暗文風のミガキを施す。110は短い鋤先口縁をもつ壺で、内外面共に板ナデ調整である。111は素口縁壺で、鋤先口縁のような湾曲の形状である。胴上位は風化が著しいため、調整不明瞭、胴下位は粗い刷毛目調整である。

112は素口縁壺で、頸部外面は暗文風の縦ミガキがあるが、縦刷毛目を消していない。胴部外面はミガキ調整がわずかに残る。113も112と同じ素口縁壺で、調整も同じである。丹塗り磨研土器で、底部を欠損する。114は丹塗り磨研の壺で、素口縁である。頸部～胴部の外面調整や頸部内面の調整はミガキ調整であるが、縦方向の刷毛目を残したまま行っている。115は外反する素口縁壺で、頸部外面は暗文風ミガキ、胴部外面～口縁内面は横ミガキである。

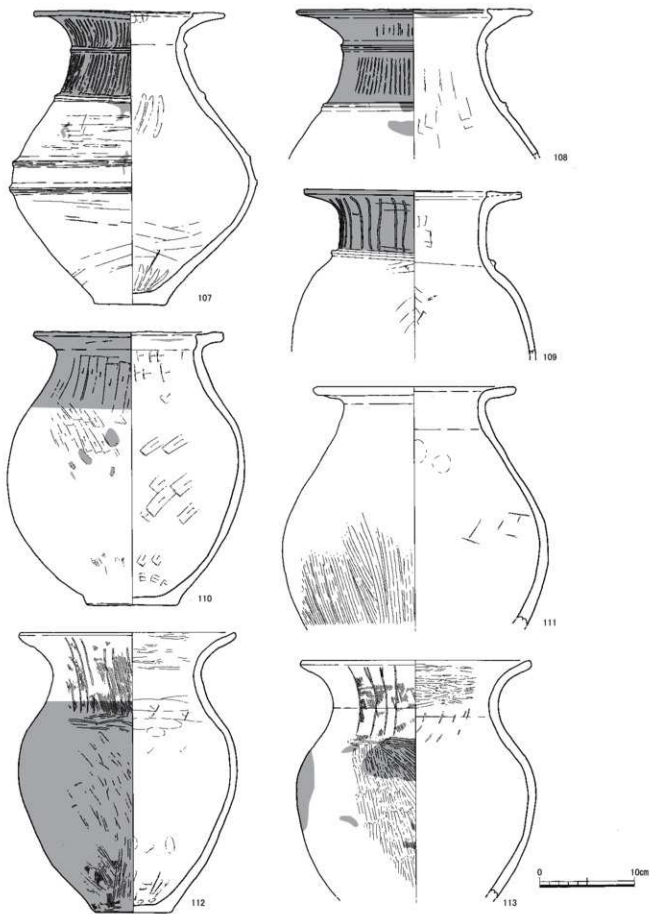
116は袋状口縁壺の口縁部片で、丹塗り磨研である。口縁下の頸部に三角突帯1条と暗文風ミガキが施される。117は口縁部を欠損する袋状口縁壺で、頸部と胴部の境に2条の三角突帯を巡らしている。頸部は暗文風ミガキ、胴部は横ミガキである。118は複合口縁壺で、頸部の内外面のみ丹塗りである。胴部外面は縦方向の刷毛目調整であり、弥生時代後期前半である。119も複合口縁壺で、口縁や頸部の調整は刷毛目調整である。120は袋状口縁壺で、部分的に丹塗りがあるが、被熱による破裂痕跡が胴下位にある。全体的な調整が刷毛目調整であり、弥生時代後期に入るものであろう。121は袋状口縁壺で、袋部が逆くの字に近い形状で、口縁下と頸部下位にM字突帯、胴中にコの字突帯を巡らす。丹塗り磨研土器で、ミガキ調整であるが、袋部内面は横方向の刷毛目を残す。122は頸部がほとんどない袋状口縁壺で、丹塗り磨研であるが、ミガキの



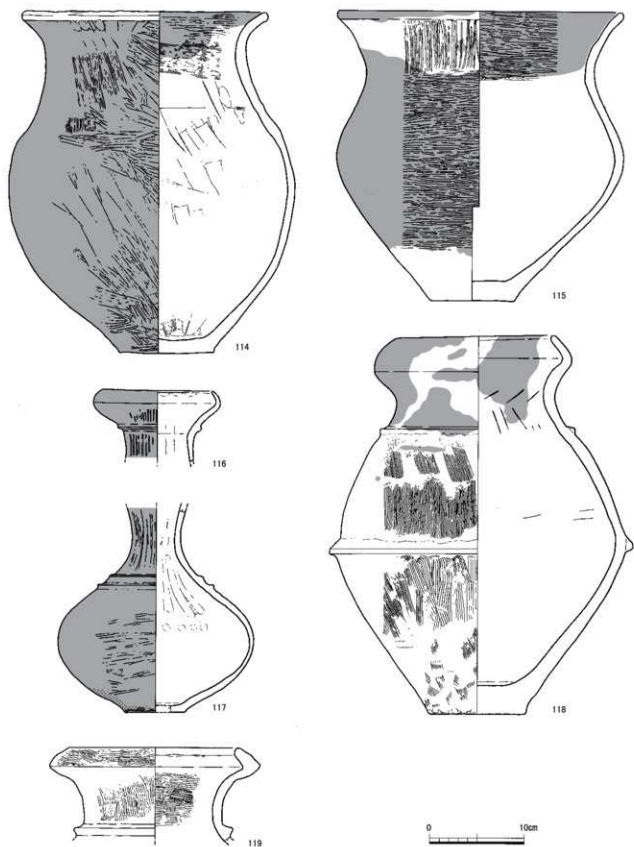
第42図 谷部包含層出土土器実測図⑧ (1/4)



第43図 谷部包含層出土土器実測図⑨ (1/4)

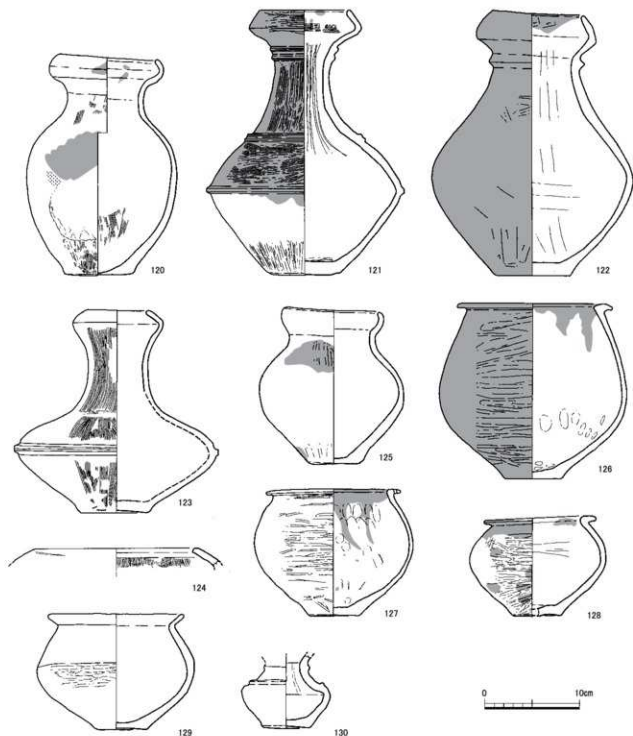


第44図 谷部包含層出土土器実測図⑩ (1/4)



第45図 谷部包含層出土土器実測図⑩ (1/4)

痕跡は不明瞭である。口縁下に三角突帯を1条巡らす。123は異形の袋状口縁壺で、胴部高が低く横に張り出す形状である。頸部から胴部外面にかけて刷毛目調整を残し、122と同じ弥生時代後期のものと考えられる。124は袋状口縁壺の口縁部片。125は袋部が開く壺で、部分的な丹塗りである。ミガキがわずかに残る。126は鋤先口縁の短頸壺で、丹塗り磨研である。胴部外面は横方向のミガキ調整、底部は平底である。127、128は口縁が短く外反する短頸壺である。丹塗り磨研で、胴部外面は横方向のミガキ調整。129は、口縁がくの字化した短頸壺で、胴中に横方向のミガキがあるが丹塗りではない。130はミニチュア土器で、口縁部を欠損する壺形土器。ナデで成形する。



第46図 谷部包含層出土土器実測図⑫ (1/4)

甕 (131～174)

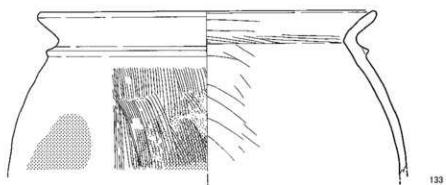
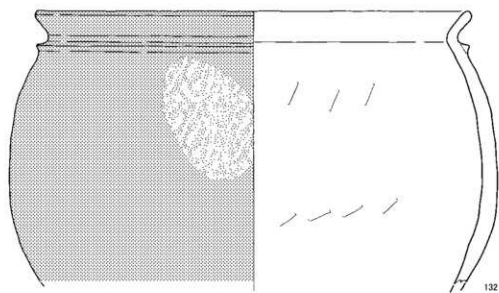
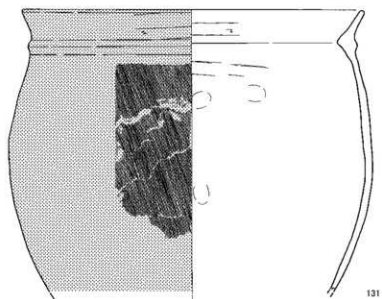
131は鋤先口縁が上方に立ち上がる甕で、口縁下に三角突帯を1条貼付する。弥生時代中期末。

132は、くの字口縁となる甕で、胴下半は欠損する。外面の被熱痕跡が明瞭である。内面は板ナデである。133は、くの字口縁甕で、口縁下に三角突帯を1条貼付する。外面は粗い刷毛目調整、内面は板ナデの後ナデ調整である。胴部外面には二次焼成痕やヤスが附着し、使用痕が著しい。

134は、口縁が、くの字となる甕で、胴部最大径が胴上位にある。口縁外面は横ナデ調整、胴部は縦方向の刷毛目調整。口縁内面は横方向の刷毛目調整、胴部内面は斜方向の刷毛目調整である。底部は平底である。135は、口縁下に三角突帯を1条貼付し、口縁がくの字となる甕で、底部から胴下半にかけての立ち上がり膨らむ。胴部外面は粗い縦方向の刷毛目で、弥生時代後期前半。

136は、丹塗り磨研の甕で、祭祀土器である。鋤先口縁の端部に刻み目、胴部の3条ある突帯の間に暗文を施す。胴部外面はミガキ調整で、胴部内面は板ナデ及びびナデ調整である。137は、丹塗り磨研の甕で、鋤先口縁である。胴部外面はミガキ調整。138は鋤先口縁が若干下方に垂れる甕で、胴部外面は縦方向の刷毛目調整。底部がいったん外に膨らんで平底となる形状は、二丈地域特有と見られる。139は、内傾する鋤先口縁をもつ甕で、胴下半を欠損する。胴部外面は縦方向の刷毛目調整、胴部内面はナデ調整である。140は、甕で、口縁が内傾化する。胴部最大径が胴上位にあり、胴部外面は縦方向の刷毛目調整である。141は、口縁がくの字となる甕で、胴部最大径が胴中位にある。胴部外面は粗い刷毛目調整で、弥生時代後期前半。142は、口縁下に1条突帯がある甕で、くの字口縁である。平底で、外面調整は刷毛目調整である。143、144も甕で、くの字口縁。平底で、胴部外面は、粗い刷毛目の後、板ナデしている。胴部内面は板ナデである。145は、口縁が内傾し、くの字状に近い甕で、平底である。胴部外面は縦方向の刷毛目調整、胴部内面は板ナデである。146は、口縁が上方に外反する甕で、全体に風化が著しく、調整不明瞭。口縁下と胴中位に三角突帯を1条巡らす。147は、肩が張る形状の甕で、口縁は、くの字状を呈する。胴部内面は指頭圧痕と棒状工具によるナデが明瞭である。148は甕で、やや内傾する口縁をもち、底部からは、やや膨らみ気味に立ち上がる。口縁下の指頭圧痕が明瞭である。149は、くの字口縁甕で、被熱により器面が剥落している。内面調整は板ナデ調整。150は、くの字口縁甕で、胴部最大径が胴上位にあり、胴部外面調整は、縦方向の刷毛目調整である。151は、くの字口縁甕で、底部は平底。胴部外面は縦方向の刷毛目調整で、胴部内面はナデ調整である。152は、くの字口縁をもつ甕で、平底の底部から膨らみ気味に立ち上がる。胴部外面は、縦方向の細かな刷毛目調整。153は胴過半を欠損する甕で、くの字口縁をもつ。胴部外面は横方向の刷毛目調整。

154は、外面丹塗り磨研の甕であるが、胴下位に被熱による破裂痕跡がある。ミガキ調整は、胴部外面～口縁内面に行われている。155は、くの字口縁甕で、平底を呈する。胴部外面は、縦方向の刷毛目調整、胴部内面は板ナデの後ナデ調整である。156は、胴下半を欠損する甕で、くの字口縁である。胴部外面には、指抑えの際の爪痕が残る。157は胴下半のみの残存で、底部穿孔した甕である。外面は縦方向の刷毛目の後、棒状工具によるナデを行う。底部穿孔は焼成前穿孔で、穿孔の際、底部内面に生じた粘土の盛り上がり確認できる。158も底部穿孔土器で、焼成前穿孔。穿孔を意識したせいか底部が厚く作られている。159は、丹塗り磨研の甕で、ミガキ調整は胴部外面～口縁内面に行う。口縁は、くの字状を呈し、肩の張りが強い。160は、歪みの強い甕で、特に口縁に強く現れている。胴部外面は縦方向の刷毛目調整の後、ナデ調整。

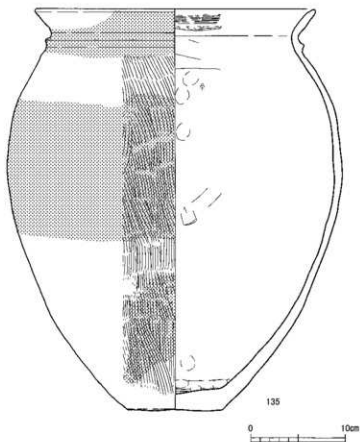
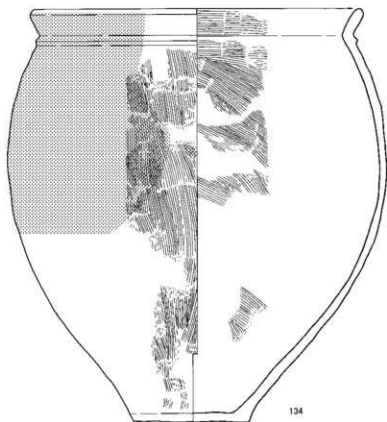


第47図 谷部包含層出土土器実測図③ (1/4)

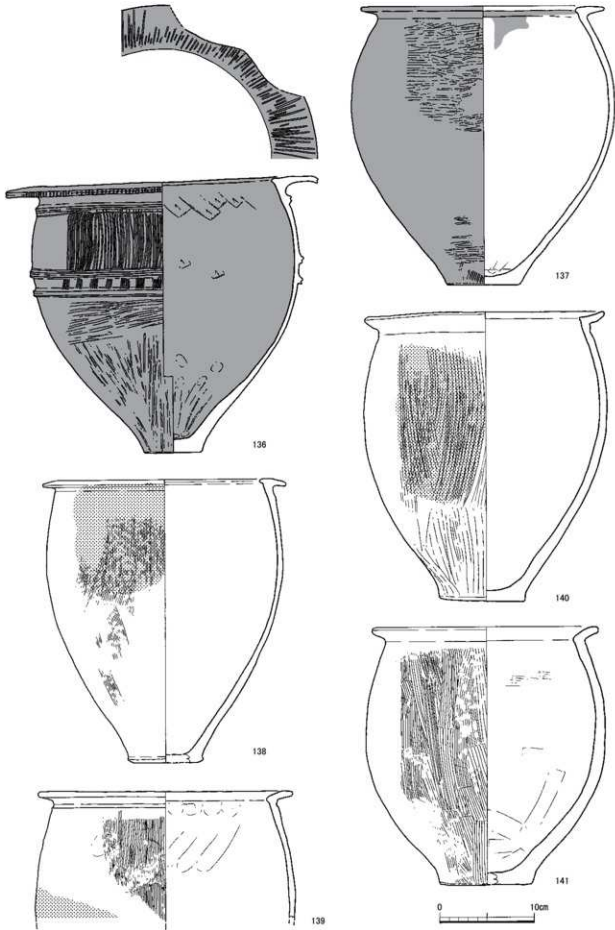
161は、くの字化した口縁をもつ甕で、胴部外面はミガキ調整。丹塗りではない。162は胴部の湾曲が強い甕で、口縁は、くの字である。強いナデで成形している。163は外反する口縁をもつ甕で、胴上位が横方向の刷毛目調整、胴下位が斜方向の刷毛目である。164は外反する口縁下に2条の沈線を巡らす小形甕。胴部内面のナデや指オサエが明瞭に残る。165は口縁が外反する小形甕で、底部に厚みがある。全体的にナデ調整。166は、くの字口縁の小形甕で、平底である。167は巾着袋形の小形甕で、口縁先端が少し丸く膨らむ。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は板ナデで、粘土帯土器に影響を受けたものか。168は手づくね土器で、内外ともに丹塗りである。

169～173は有窓土器で、弥生時代後期前半である。窓の形は169が隅丸長方形、170が楕円に近い隅丸方形、171が隅丸方形、172は、上へこむ形状の隅丸方形である。弥生時代中期末の円形から方形を志向している。外面調整は、胴部が縦方向の刷毛目調整で、内面は板ナデやナデ調整である。173は、胴部片で、窓は隅丸方形と推定される。

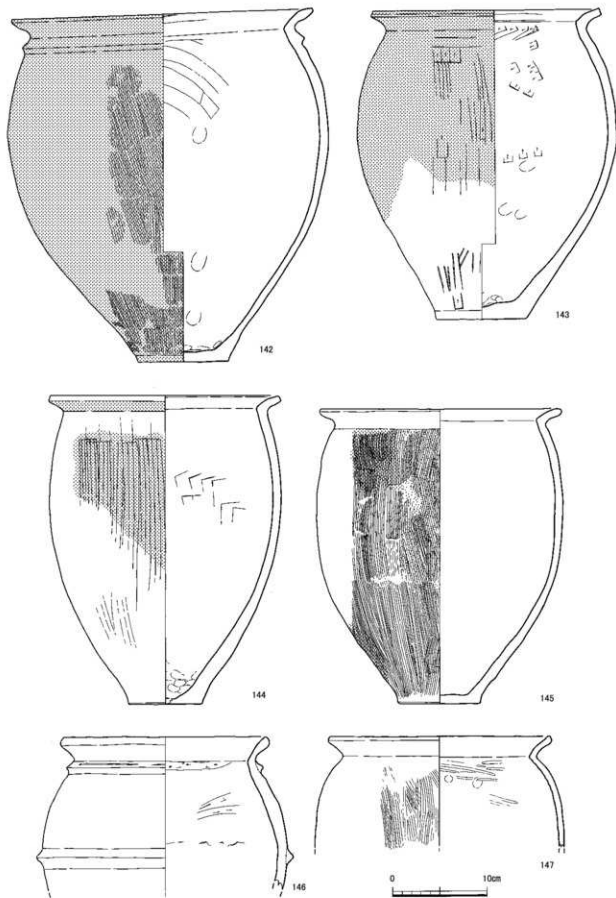
174は素口縁の甕で、底部から口縁にかけて器壁が厚く、胴部に円形の焼成後穿孔がある。上錫子遺跡に類例がある。



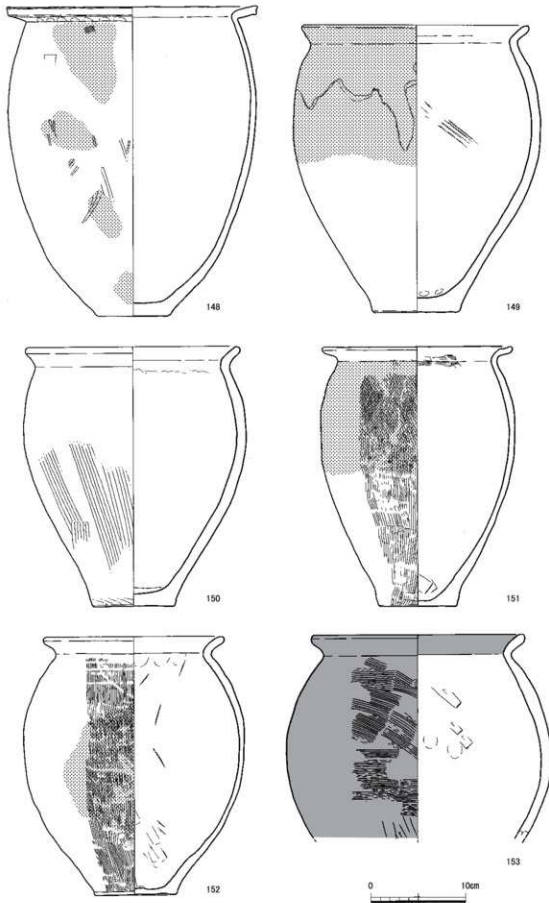
第48図 谷部包含層出土土器実測図⑭ (1/4)



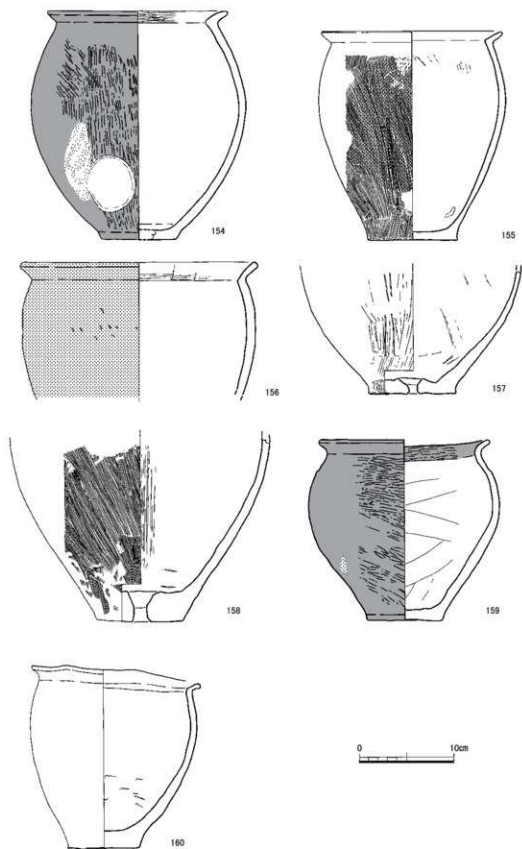
第49図 谷部包含層出土土器実測図⑤ (1/4)



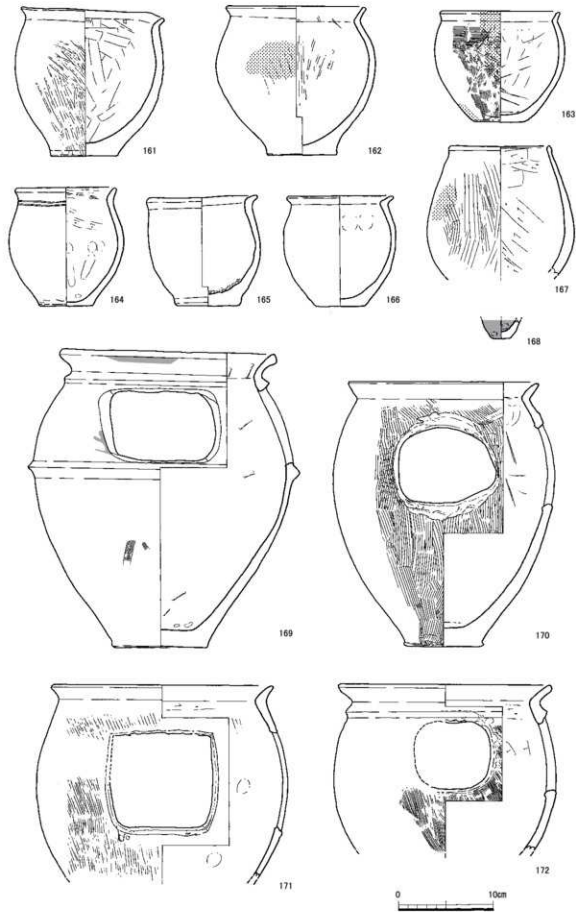
第50図 谷部包含層出土土器実測図⑥ (1/4)



第51図 谷部包含層出土土器実測図⑦(1/4)



第52図 谷部包含層出土土器実測図⑧ (1/4)



第53図 谷部包含層出土土器実測図⑨ (1/4)

鉢 (175～203)

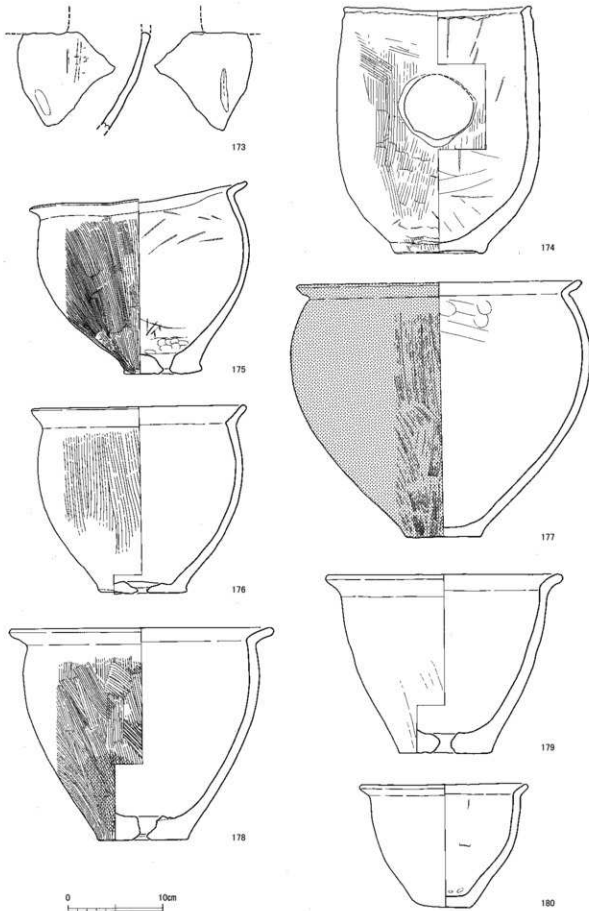
175は歪みの強い鉢形土器で、逆L字形の口縁をもつ。底部穿孔は焼成前穿孔である。体部は斜方向刷毛目調整で、底部断面が外に膨らむ形状が特徴である。176は鋤先口縁が上方に立つ鉢で、底部の穿孔は焼成前である。胴部外面は、目の粗い縦方向の刷毛目である。177は、くの字口縁の鉢で、平底を呈する。体部外面は縦方向の刷毛目調整で、その内面は板ナデ調整である。178は焼成前穿孔の鉢形土器で、胴下位にスガが付着している。179は外反する口縁をもち、底部から直線的に延びる鉢である。底部は焼成前穿孔で、体部外面は刷毛目をナデ消している。180は鉢形土器で、短い口縁が外反する。底部は若干の丸みを帯びる。181は短い口縁が外反する鉢で、外面にスガが付着しており、被熱している。182は鉢形土器で、外反する短い口縁に、底部は平底を呈する。体部外面は縦方向の刷毛目調整、体部内面は板ナデ、強いナデ調整である。183は強いナデで成形するため、歪みの強い鉢で、口縁は上方に外反する。184は素口縁の鉢で、部分的な丹の付着が認められる。体部外面は、縦方向の刷毛目の後ミガキを行う。185は丹塗り磨研の鉢で、底部を欠損する。内外面共に横方向のミガキである。186は口縁が強く内湾する鉢で、平底。外面は縦方向の刷毛目を残す。187は内湾気味の口縁をもつ鉢で、体部外面は刷毛目を残す。188も内湾気味の口縁をもつ鉢で、体部外面は縦ミガキ調整の後、中位を横ミガキ調整している。内面は強い指ナデの痕跡。189は被熱により器壁が剥離している鉢で、口縁は内湾気味である。底部の作りが荒く、レンズ状となっている。190は椀に近い形状の鉢形土器で、外面はわずかに刷毛目が残る。191は底部から丸みを持って立ち上がる鉢で、指オサエや指ナデの痕跡が明瞭である。192の鉢形土器は、外面は縦方向の刷毛目調整、内面は強い指オサエである。193は鉢形土器で、外面は横ミガキであるが、丹塗りではない。194は椀に近い形状の鉢。195は底部から真っ直ぐ立ち上がる鉢で、端正な作り。196、197は、指オサエで成形する鉢。198は底部が歪み気味でレンズ状となる鉢で、指ナデと指オサエで成形する。199は指オサエで成形する鉢で、底部は丸底に近い。200～203は手づくねの鉢で、指オサエで成形する。

蓋 (204、205)

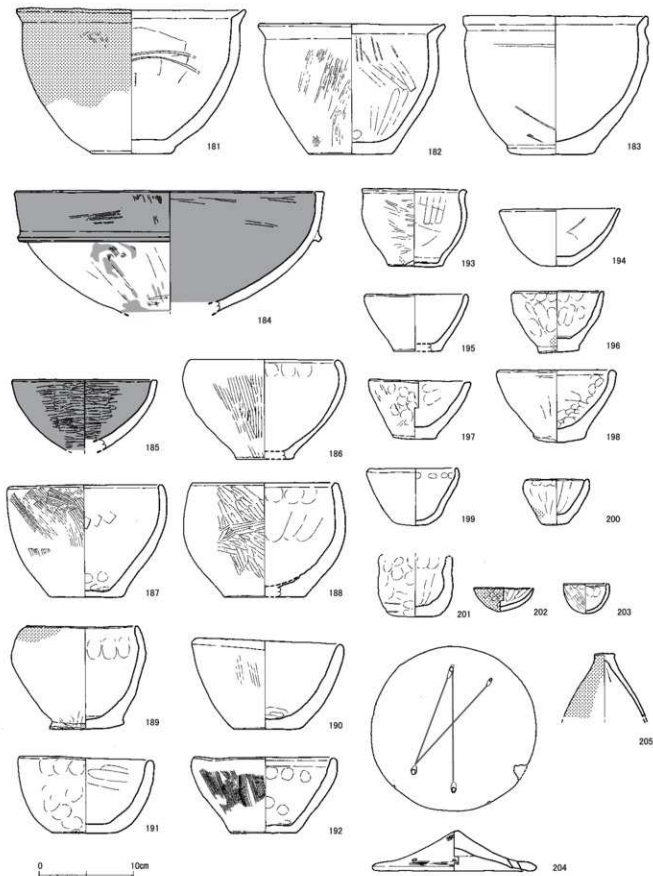
204は蓋で、紐通しの穴が4孔ある。この孔は細長く、その方向は紐の行き先を示している。そこから推定される紐のラインはたすき掛けとなることが分かる。外面は刷毛目の後ナデ調整である。205は、頂部の作りが蓋の作りに似ているため、蓋として掲載したが、手づくねに近い甕の可能性もある。外面にスガが付着する。

高杯 (206～216)・注口土器 (217)

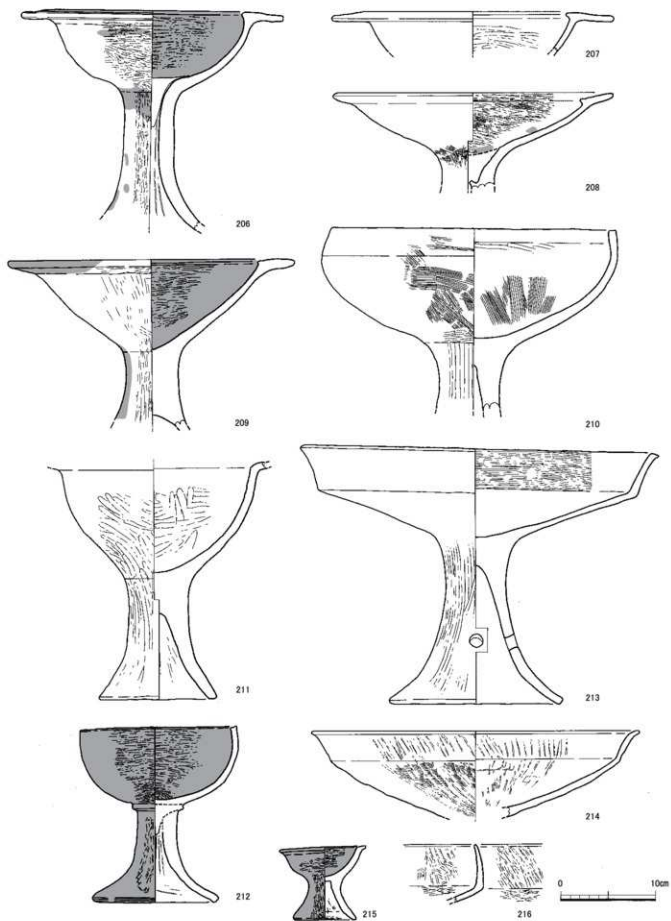
206は高杯で、若干外に垂れる鋤先口縁、湾曲して深い杯部である。丹塗り磨研土器で、脚部は欠損する。杯部は内外共に横ミガキ、脚部は縦ミガキ。207は鋤先口縁部のみの残存。外面はナデで、内面は横ミガキであるが、丹塗りではない。208は杯部の浅い高杯で、鋤先口縁が内傾する。丹塗り磨研で、外面はミガキが不明瞭であるが、内面にはよく残る。脚部と杯部の接合部分に充填する粘土が外れてしまっている。209は杯部の立ち上がりが直線的な高杯で、内側に発達しない鋤先口縁をもつ。丹塗りは口縁～杯部内面にかけて施され、横ミガキを加える。外面は刷毛目調整の痕跡が残る。210は椀形の杯部をもつ東九州系高杯である。杯部の内外面は、刷毛目調整で、口縁部は横ナデ、脚部は縦方向のミガキ調整。211は鋤先が逆L字形となる高杯。杯部と脚部に明瞭な境はなく、下から上へのミガキ調整が、脚部から杯部に至るまで一気に行わ



第54図 谷部包含層出土土器実測図㉔ (1/4)

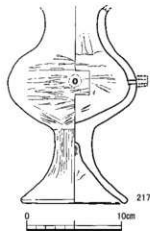


第55図 谷部包含層出土土器実測図② (1/4)



第56図 谷部包含層出土土器実測図② (1/4)

れている。短脚気味で、脚裾も広がらない。212は楕形状の杯部をもつ高杯で、杯部と脚部との先に突帯を1条巡らす。杯部の内外面は横方向のミガキで、脚部は縦方向のミガキ。213は瀬戸内系の影響を受けて成立する高杯で、弥生時代後期後半。脚部は縦ミガキであるが、杯部外面はナデ調整。口縁内面は横方向の刷毛目調整。214は反外する口縁をもつ高杯で、杯部の内外面は暗文風ミガキを施し、一部横方向の刷毛目が残る。脚部は欠損し、弥生時代後期後半～終末。215は小形の高杯であるが、丹塗り磨研であり、杯部、脚部共にミガキを施す。216は逆L字形を呈する高杯の口縁部片で、内外面共にミガキ調整。瀬戸内系高杯と考えられる。217は注口土器で、口縁部および注口部分を欠損する。胴部は横ミガキ、脚部は縦ミガキである。



第57図 谷部包含層出土土器実測図㉔(1/4)

器台・支脚 (218～236)

218は口縁、脚部共に外方に開く器台で、端部はヘラによる面取りを行う。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は口縁及び脚部が横方向の刷毛目調整、胴内面はシボリ痕がある。219の器台は、外面が粗い縦方向の刷毛目調整で、両端外方に開く。220は小形器台で、口縁端部はヘラによる面取り。外面は縦方向の刷毛目調整。221は小形器台で、口縁端部と上面をヘラで面取りする。ナデによる成形痕を残す。222は小形器台で、指ナデ、指オサエの後に刷毛目調整を施す。223は小形器台で、上位に屈曲部がある。指ナデや指オサエの成形痕を残す。224～227は指ナデ及び指オサエで成形し、口縁があまり外方しない器台で、脚裾が厚く、接地面を平坦にする点が特徴である。このうち224は二次焼成の痕跡があり、これら器台は、支脚に近い用途も考えられる。228～230は小形器台で、指頭圧痕が明瞭である。口縁があまり外方に開かず、特徴としては224～227と同じである。231～234は、同一箇所から出土した支脚4点で、上位に二次焼成痕が明瞭である。接地する脚部は平坦で、5～10cmの小孔を空ける。指オサエによる成形で、洗浄の際に、内部が溶けるほど弱く、破線で復元、図示している。235、236は脚部がわずかに広がる筒状の支脚で、指オサエによる成形。頂部は、若干凹む形状で、小孔が通る。やはり洗浄の際には、内部が溶けやすい。

(5) 土器 (下層) (第59図)

壺 (237、238)

237は鋤先口縁部の口縁部片で、頸部外面に暗文風ミガキが残る。丹塗り磨研。238は丹塗り磨研の壺の底部片。

甕 (239～244)

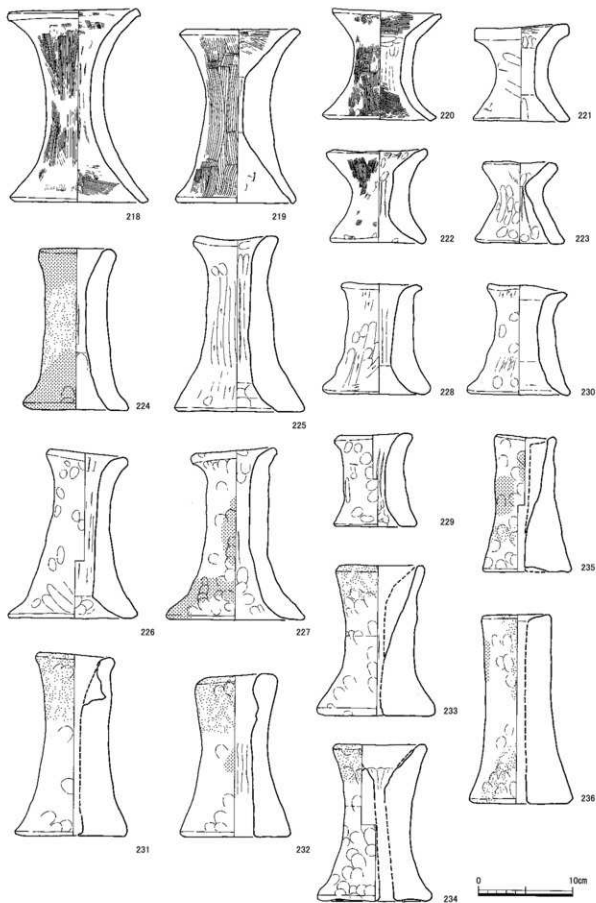
239は逆L字口縁、244は、くの字口縁、その他は鋤先口縁甕で、240は丹塗り磨研である。

高杯 (245、246)

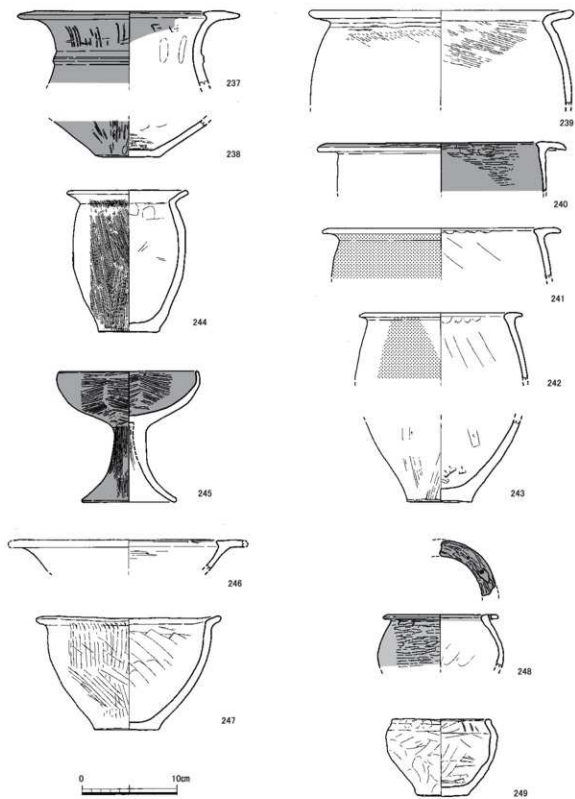
245は楕形の素口縁高杯で、丹塗り磨研。全体にミガキ調整。246は鋤先口縁の高杯片である。

鉢 (247～249)

247は外方に開く逆L字口縁の鉢。248は丹塗り磨研の小形鉢。249は手づくねの鉢である。



第58図 谷部包含層出土土器実測図㉔ (1/4)

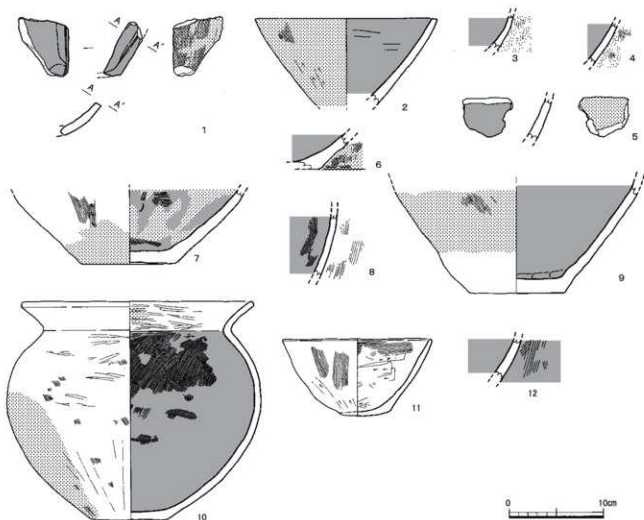


第59図 谷部包含層出土土器実測図④ (1/4)

(6) 内面朱付着土器 (第60図)

谷部に廃棄された土器のうち、内面に朱が付着する土器で、器種は、壺・甕・鉢である。特に1～4は内面の朱の付着が濃厚で、外面は被熱による黒色化が著しいことから、調査具としての使用が考えられるものである。

1は甕を焼成前に半截して鍋状にした土器で、底部付近である。内面は朱の付着が濃く残っており、鍋上面端部にまで及ぶ。外面は黒色化するほどに被熱し、調整は、弥生時代中期後半のような細かな縦方向の刷毛目調整であるが、底部が一部しか残っておらず、底部の形状が若干丸みを帯びるようにも見える。時期比定が難しいが、中層からの出土であることや底部からの立ち上がりから、弥生時代中期後半～後期初頭の範疇で考えておきたい。2は鉢形土器で、底部を欠損する。内面全体に朱が濃く残り、外面は、被熱により全体が黒色化しており、朱の斑点状の付着も認められる。体部は直線的に広がり、その上位には、縦方向の細かな刷毛目調整が残る。上層からの出土。3、4は、胴部片で、3は中層から、4も中層から出土。厚さから鉢の可能性のある破片で、内面は朱が濃く残り、外面は被熱による黒色化が著しい。外面は縦方向の刷毛目調整。内面はナゲ調整である。5は鉢形土器の底部付近か。中層からの出土で、内面に朱が濃く付着する。外面は被熱による黒色化が著しい。



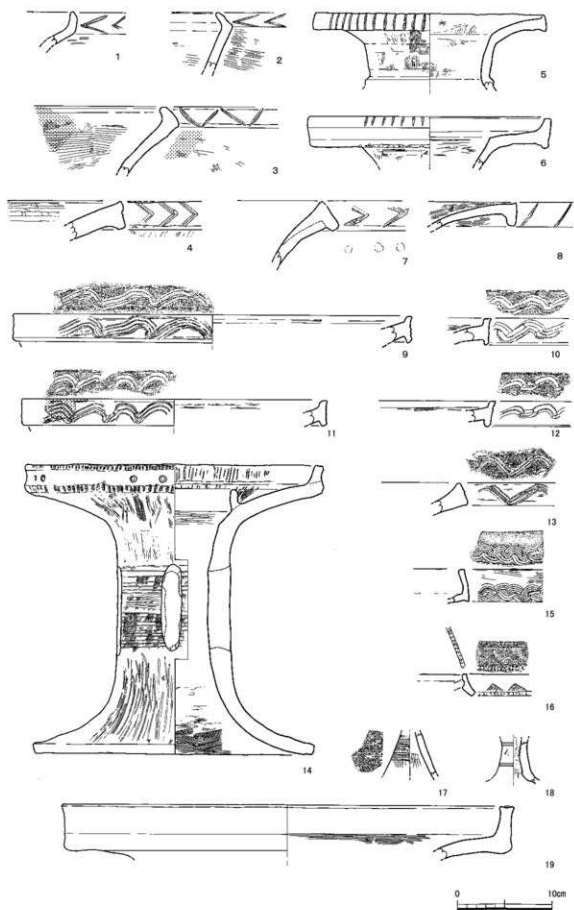
第60図 内面朱付着土器実測図 (1/4)

6は、底部片で、外面は縦方向の刷毛目と底部内面に朱が濃く付着するほか、断面に朱の痕跡が確認できる。外面はススが付着し、二次焼成を受けている。底径が10cm程度であるため、大形鉢であった可能性がある。中層より出土している。**7**は、中層から出土した底部片で、鉢形土器と考えられる。調整は外面縦方向の刷毛目、内面はナデ調整で、内面に朱の付着がある。**8**は甕の胴部片で、外面には被熱痕跡が見られないが内面に朱の付着がある。中層から出土。**9**は甕の底部片で、内面に朱が付着し、外面はススの痕跡がある。外面に斜方向の刷毛目調整がわずかに残る。**10**は鉢形土器で、内面全体に朱が付着し、外面は一部にススが付着する。調整は外面縦方向の刷毛目調整の後、ナデ調整。内面は同上位に斜方向の刷毛目調整である。弥生時代後期前半。**11**は、鉢形土器でレンズ状の底部であることから、弥生時代後期後半である。内面の体部上位～底部にかけて朱の付着があり、外面は被熱による黒色化が見られる。**12**は底部付近の破片で、内外面に朱の付着が認められる。外面は荒い刷毛目である。

(7) 外来系弥生土器・在地系有文土器 (第61・62図)

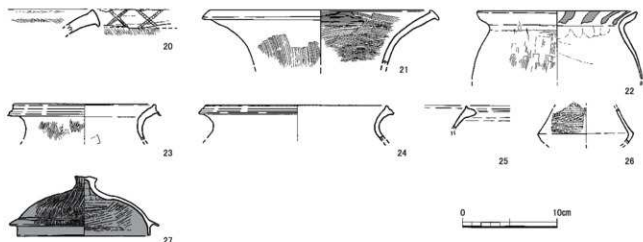
1～**4**、**20**は、在地系であるが、複合口縁壺を中心に、口縁端部に文様がある土器を図示した。石崎曲り田遺跡や今宿五郎江遺跡、元岡・桑原遺跡群でも複合口縁壺の口縁外面に半円連続文様や竹管文、山形文を施すものが出土しており、外来的な要素をもつ在地系土器と考えられるため、取り上げる。その他は瀬戸内周辺をはじめとする外来系土器で、出土数も多い。在地系土器との共存関係については、時間的制約もあり、今後の課題としたい。

1は袋部が上方に開く袋状口縁壺の口縁部片で、口縁端部に羽状文を施す。**2**は複合口縁壺の口縁部片で口縁外面に羽状文を施す。**3**は複合口縁壺の口縁部～頸部に至る破片で、口縁端部に山形文がある。**4**は大形壺の口縁部片で、通常は刻み目が多いが、これには羽状文を施している。内外面共に横刷毛目をナデ消す。**5**は上下に小さく突出する口縁をもつ壺の破片で、口縁端部に刻み目を施す。口縁から頸部にかけて強く屈曲し、内外面共に刷毛目調整。**6**は口縁が上下に強く突出する壺で、上下端に刻み目の痕跡がある。口縁から頸部へ強く屈曲する。**5**、**6**は近江以東の影響を受けたものか。**7**、**8**は短い垂下口縁の破片で、**7**は口縁端部に羽状文、**8**は刻み目である。西部瀬戸内系と考えられる。**9**～**12**は、口縁端部は上下に突出する口縁部片で、口縁端部に櫛描波状文を巡らしている。東九州系もしくは西部瀬戸内系であろう。**13**は素口縁の端部に櫛描波状文を入れる。**14**は大形器台である。上方に立ち上がる口縁端部は、刻み目の中央を横ナゲし、竹管文を入れる。筒部には、10条の凹線文と7条の凹線文が2段入り、楕円形透かし孔が配される。本来は長方形を志向したものであろう。外面は縦方向の刷毛目の後にナデ、縦方向のミガキ調整。内面は受部に1条突帯を巡らし、上位はミガキ、脚裾は横方向の刷毛目である。吉備系の影響を受けた大形器台と考えられる。**15**は複合口縁の破片で、口縁端部の下位に櫛描波状文が入る壺もしくは器台であろう。西部瀬戸内系。**16**は器台の口縁部片で、複線鋸歯文と端部に半竹管文を入れる。吉備系周辺。**17**、**18**は東海系高杯である。**17**は3条沈線を2段配し、沈線間に斜めの刺突文を入れる。**18**は2条沈線を2段に配する。**19**は吉備系の高杯で、口縁部片である。**20**は在地系甕の口縁部にX字形の文様を入れる。**21**は上下にわずかに張り出す口縁部で、湾曲に立ち上がる壺で、吉備の影響を受けたものか。**22**は甕で、胴下半を欠損する。口縁は先細形状で、口縁内面に約1.5cm間隔で幅1.0～1.3cmの丹塗りを入れる。擬近畿系土器。**23**～**25**は凹線文土器の口縁部片で、4様式末と考えられる。瀬戸内系土器。



第61図 外来系弥生土器実測図① (1/4)

26は、屈曲の強い胴部片で、外面は、凹線と刺突文を交互に配する。山陰の台付装飾壺形土器の破片と考えられる。拓本では2孔あるように見えるが、貫通していない。27は杯蓋状の丹塗り磨研土器で、古墳時代の須恵器である杯蓋と形態的に似ているが、つまみ部と体部を一体として製作する。体部の調整は細かな縦ミガキを行った後、受部の位置に横ミガキを行う。内部は曲面に沿って横ミガキを行う。外来系と思われるが、由来地を明確にできていない土器である。

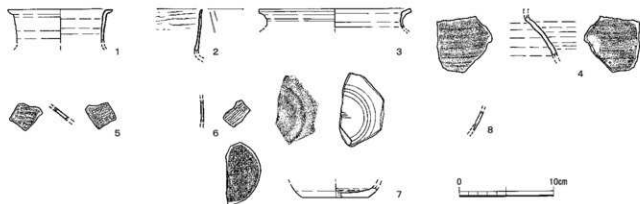


第62図 外来系弥生土器実測図② (1/4)

(8) 楽浪系土器 (第63図)

楽浪系土器は8点出土し、うち4点がピットから出土し、残りは弥生時代後期後半～終末期を中心とする包含層からの出土である。いずれも泥質胎土の瓦質焼成で、風化しているものが多い。

1は小壺の口縁部片で、復元口径11.0cm、残存高3.5cmである。外面は回転ナデ調整。2は壺の口縁部片で、短い口縁が外反する。風化が著しく、口縁外面は不明瞭ではあるが、タタキの痕跡を残す。内面も風化により粘土接統痕が観察できる。3はP-104から出土した短頸壺の口縁部片で、復元口径15.8cm、残存高2.0cmを測る。内外面共に回転ナデ調整である。4は壺の胴上位の破片で、内外共に回転ナデ調整である。5は壺の胴部片で、内外共にナデ調整。6も壺の胴部片で、外面は縄帯文タタキ、内面は回転ナデ調整。7は小形鉢(碗)の底部片で、復元底径7.0cm、残存高1.5cmを測る。回転ナデ調整であるが、底部外面は縄帯文タタキがわずかに残る。8は小型鉢(碗)の破片で、回転ナデ調整。



第63図 楽浪系土器実測図 (1/4)

⑨ 石器（上層）（第64・65図）

谷部包含層から出土した石器のうち、上層から出土した石器である。数多くの石器が出土したが、時間的制約もあり、選択した19点を報告する。

石包丁（1～3）

1は、輝緑凝灰岩の石包丁素材片である。裏面は素材取り出し時の打欠痕が残り、表面背側には細かい剥離、刃部側には大きめの剥離痕が残る。右側が折損したため廃棄されたものか。2は流紋岩製石包丁片である。背の断面は丸みを帯び、孔は両面穿孔を施す。折損したため廃棄されたものであろう。3は蛇紋岩に近い石材を用いた石包丁で丁寧な研磨を施す。鉄錘による両面穿孔と思われ、裏面には小さな穿孔痕が残る。背は直線的で断面方形を呈する。本来は平面半月状の石包丁であったが、両端部が折損したため、割口を研磨してそのまま石包丁として用いたと思われる。長さ9.1cm、幅4.6cm、厚さ0.5cm。

紡錘車（4）

4は白雲母片岩製の紡錘車で直径4.6cm、厚さ0.6cmを測り、側面は横研磨を施す。II a類（平尾2008）で弥生時代から古墳時代前期に多くみられる。

石錘（5～9）

5は体部に2孔もち、先端部と上の孔を溝で結ぶ石錘である。底部はやや丸みを帯びた面をもち、糸島型石錘に含められる。長さ8.0cm、幅3.3cm、厚さ2.2cm、重さ97gでやや質の悪い滑石を用いる。6は一部欠けるが底部に丸みを帯びる面をもつ九州型石錘大形A II類（糸島型）で筒状を呈する。現存長10.4cm、幅5.3cm、厚さ4.4cmを測る。暗灰色泥岩製で、体部表面に貝による穿孔が残る。体部には2孔もつが、上の孔径は4.5mmと小さく、そこから上に溝が伸びる。体部全面に細かい研磨痕が残る。ただ、破損が著しく被熱した可能性が高い。7は暗灰色泥岩製の九州型石錘大形A II類（糸島型）で、底部に面をもつ。一部欠損もあるが長さ7.2cm、幅4.7cm、厚さ2.2cmを測る。体部はそれぞれ細かい研磨を施し、将棋の駒のような面をもつ。面と面が接する箇所は角を取り、面を形成する。体部に2孔もつが主軸はややずれている。2孔間は施溝するが刀子状工具で溝をつけたのち、研磨で窪みをつけ溝としていることから、その断面は浅いU字形を呈する。滑石製石錘の溝とは施溝方法が大きく異なる。下の孔の上には穿孔途中の2孔があるが、その断面は円錐形である。この2孔は施される場所等から硬度確認用の穿孔の可能性が高い（篠原1996）。8は大形有孔石錘である。扁平楕円形に成形し、中央に方形孔を穿つ。方形孔には鑿状工具痕が明瞭に残る。孔の左には小円孔を設ける。滑石を用いることから、九州型石錘と共通し、刺網や延縄の錘とされる（中尾2022）。長さ15.1cm、幅12.4cm、厚さ5.7cm。

9は花崗岩製の打欠石錘である。図の下半の表面が剥離しており、被熱の可能性もある。長軸・短軸の四側面に打欠を施すが、横方向に溝をもつことから、瀬戸内型石錘の影響をうけた石錘の可能性もある。長さ12.7cm、幅11.2cm、厚さ3.8cm。

敲石（10・11）

10は半分に割れた円礫である。上下面ともに敲打痕が残ることから凹石の可能性はある。石材は風化した花崗岩を用いる。11は花崗岩製の敲石である。長軸両端部と上下両面の中央部に叩打痕を残す。ただ、下面は被熱のため大きく剥離する。

砥石 (12～18)

12は砂岩系石材を用いた砥石である。上面と右側面を残すが、上面は長軸方向の使用痕が残る。13は湾曲する棒状の砥石である。裏面と長軸両端部を欠くが、下部の欠損部の端には研磨痕が残り、再利用した可能性がある。泥岩製で目は細かい。幅3.2cm。14は硬質砂岩の砥石片である。砥ぎ面の目は細かく、仕上げ砥である。15は砂岩製砥石の破片である。上面は薄く剥離し、それ以外の面は欠けている。16は大形の定形砥石である。上側面と左側面が生きており、それぞれ上面と90度近くで接する。ただ、上面は使用に伴いやや丸みを帯び、左上と下辺近くは数mm～1cm程度層状に剥離するとともに上面の右寄りを中心に叩かれた痕跡が残り、そこからヒビも入っており、分割しようとした可能性もある。そのほか、上面には金属製刃物を砥いだ筋状の使用痕が斜め方向に入り、砥石の主軸とは合わない。なお、裏面は自然面を残しつつも左半分は砥石として使い、上側面は未使用、左側面は砥石として用いる。目は細かく仕上げ用の砥石である。重さ3980g。17は砂岩製の不定形大形砥石である。長軸側を欠くが、本来は30cm程度の長さであったと思われる。幅は13.7cm、厚さは2.0～4.9cmで使用に伴う砥ぎ減りが著しい。上面中央に筋状の使用痕が残り、金属製の刃物を研磨した痕跡であろう。ただ、砥石そのものの目はやや粗い。18は泥岩製の定形砥石か。上面は薄く剥離して使用痕は認められないが、自然面を残す左側面には弱い研磨痕が残る。

L字形石杵 (19)

19は上層から出土したL字形石杵である。表面は、全体的に敲打痕があり、磨面は、幅7.5cmで長軸に沿うように曲面を呈する。磨面を観察すると、力が加わりやすい右磨面が強く湾曲する部分があり、そこにわずかな朱の痕跡、握部の磨面近く先端部にも朱が付着している。また、磨面は短軸方向にも片減りする曲面があり、先端に行くほどその曲面が強くなるほか、握部上面にも一部磨ったような痕跡がある。未使用品については、三雲南小路遺跡周溝から出土したL字形石杵があり、それと比べると随分なすり減りであるが、そのような長期間の使用が想定できる点が墳墓供献品と異なる特徴である(西本2021)。長さ10.3cm、幅7.5cm、握部厚5.6cm、重さ624gを測る。

10 石器 (中層) (第66～70図)

石包丁・石鎌 (20～22)

20は、流紋岩製の石包丁である。左右が非対称であることから、本来は平面三日月形であったものを、左側が折損ののち丸く面取りした可能性がある。背の断面は丸みを帯び、石製穿孔具で両面穿孔する。長さ12.1cm、幅4.3cm、厚さ0.7cm。21は董青岩ホルンフェルス製の扁平石材。表面の剥離が著しいが、上辺のみ当初のままか。石鎌もしくは石包丁である。22は董青岩ホルンフェルス製の扁平石材である。全体的に剥離が進み、調整等は不明であるが、下部に刃部を形成する。石鎌か。

石鍾 (23～30)

23は九州型石鍾大形AⅡ類(糸島型)の石鍾である。体部は釣鐘形を呈するが、被熱のため全体的にヒビが入り、右側面を欠く。体部には2孔あるが、上孔からは溝が伸びる。滑石製で、長さ6.5cm、現存幅5.2cm、厚さ4.5cm。24は九州型石鍾大形AⅡ類(糸島型)で、釣鐘形を呈する。滑石製で、体部は全体的に鑿もしくは刀子状工具で整形した痕跡が残る。体部には2孔もつが、

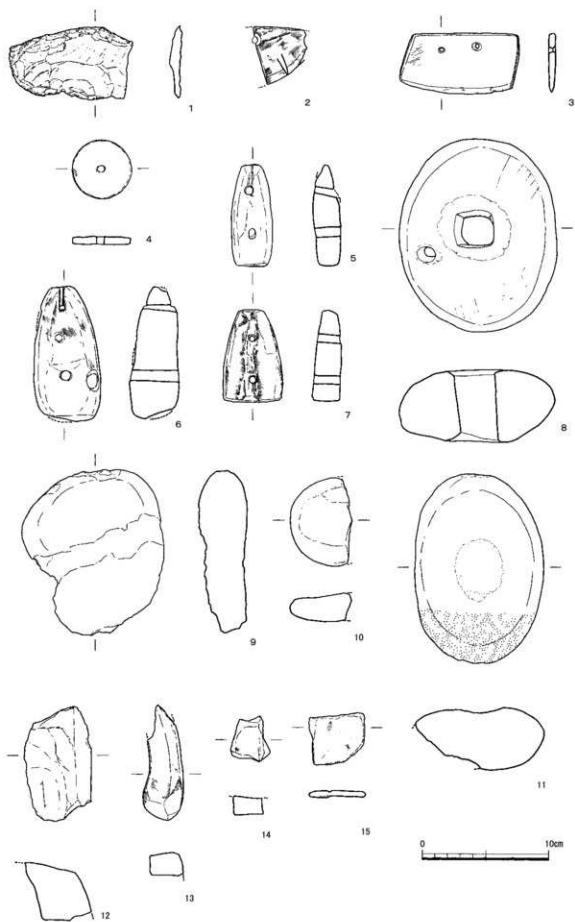
上の孔から溝が伸びる。溝は摺り切り状に施されたため、狭く深いものとなる。長さ6.9cm、幅4.9cm、厚さ4.7cmを測り、横断面は正円に近い。25は底部に面をもつ九州型石錘大形AⅡ類(糸島型)の破損品である。長軸方向に半裁する形で割れているが、割口の底部付近に使用痕が残り、再利用を試みた可能性がある。長さ7.9cm、幅4.1cmの筍形を呈する。体部2孔をもつが軸がずれている。上の孔から延びる溝をもつ。下條信行氏は糸島型の特徴として「(滑石のほか)粘板岩、花崗岩、玄武岩、白雲母片岩なども使われ、石材のバリエーションが目立つ」と指摘するが(下條1984)、本例も泥岩で糸島型石錘の石材バリエーションのひとつといえよう。26は九州型石錘大形AⅡ類(糸島型)の未成品で、底部に丸みを帯びた面をもつ。体部は全面に鑿もしくは刀子状工具で整形し、釣鐘形に近づける。上と下から施溝するが、軟質の滑石を用いるため、鉄製工具で摺り切り状に彫り込んだちに研磨しており、溝の横断面は逆M字を呈する。未穿孔であるが溝が途切れた箇所1孔施すものか。長さ7.8cm、幅4.8cm、厚さ4.0cmを測る。27は九州型石錘大形AⅡ類(下條1984)、いわゆる糸島型石錘の未成品である。長さ10.0cm、幅5.1cm、厚さ3.9cm、重さ275gを測る。溝は側面長軸全周と体部中央を横断する形で施され、底部は十字になる形で施溝される。ただ砂岩系石材を用いるため、鑿状工具で線を引き、大まかな溝の位置を決めたのち、研磨して溝を仕上げている。すでに体部は研磨で大まかに整形されているので、①体部整形→②施溝→③穿孔→④仕上げ研磨の製作工程が復元される。28は暗灰色泥岩製の石錘である。頂部と底部を欠くが、体部に2孔もつ。上の孔から溝が延びるが詳細は分からない。縦断面はなすび形を呈することから、石錘に合う転石から作り出した可能性が高い。体部には研磨痕、鑿状工具痕、敲打痕が残る。底部を欠くことから細かい分類はできないが、大きくみると下條分類大形B類(下條1984)、溝がなければ林田・中尾分類のⅡH類に該当するが(林田・中尾2014)、石材がほかの糸島型石錘に用いられる暗灰色泥岩であることは注意すべき点である。現存長10.8cm、幅3.8cm、厚さ3.5cm。29は暗灰色泥岩製の石錘で棒状を呈する小形B類である(下條1984)。体部には丁寧な研磨を施し両端部は面取りする。端部から2～3mmの箇所1mm程度の浅い溝を設け両頭状に加工する。大野左千夫により「博多湾周辺域で見られるが少ない」と指摘され(大野1981)、御床松原遺跡15号住居跡などで類例はあるものの(井上1983)、現在でも少ない状況は続いている。30は長軸を打ち欠く石錘で、縄スレ痕は小さい。下面には平坦面をもつものの不安定で座りが悪い。花崗岩製で長さ8.1cm、幅4.6cm、厚さ2.6cm。

敲石・凹石(31～33)

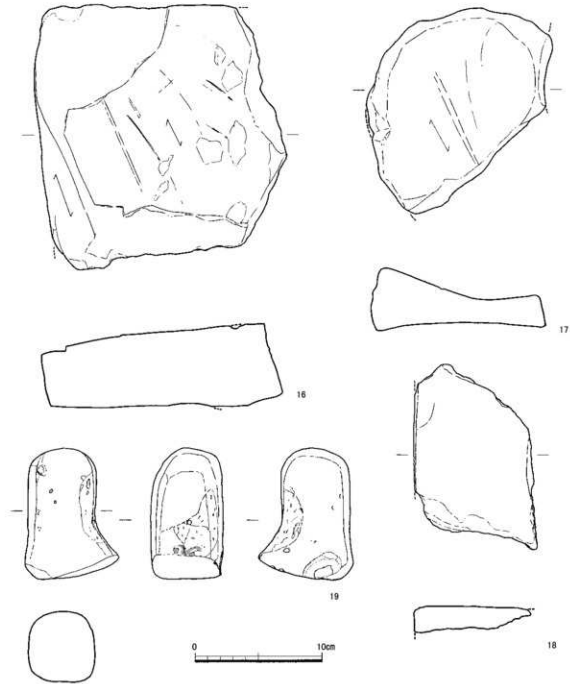
31は花崗岩製の敲石である。全面を研磨で整形し、下面に敲痕を残す。長さ13.9cm、幅7.9cm、厚さ5.1cm、重さ1.166gを測る。32は花崗岩製の凹石で、上面の中央は敲打が繰り返されて窪みが大きく、下面は弱い敲打痕が残る。堅果類の殻を割ったものか。長さ11.9cm、幅10.6cm、厚さ4.3cm、重さ798g。33は磨石の半欠品で最終的には敲石として用いる。砂岩を用いるが貝による穿孔をもち、海浜部で採取されたものと判断される。幅8.8cm、厚さ5.6cm。

碇石(34)

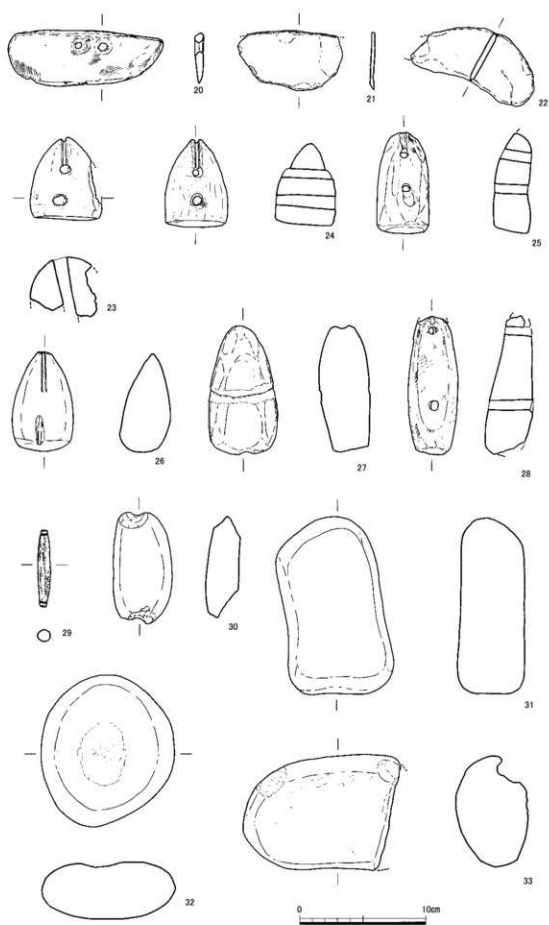
34は風化が進む花崗岩を用いた碇石である。長さ53.3cm、幅41.0cm、厚さ12.9cm、重さ36.5kgを測る。長軸両端を打ち欠き、短軸端部に縄スレ痕が残る。志摩岐志に所在する海徳寺遺跡でも弥生時代前～中期の碇石(8.0kg)が出土しているが、後出する本例は平面形、重さともに増大している。深江城崎遺跡からは準構造船の部材も出土しているが、碇石は船の大きさとも関連す



第64図 谷部包含層出土石器実測図① (1/3)



第65図 谷部包含層出土石器実測図② (1/3)

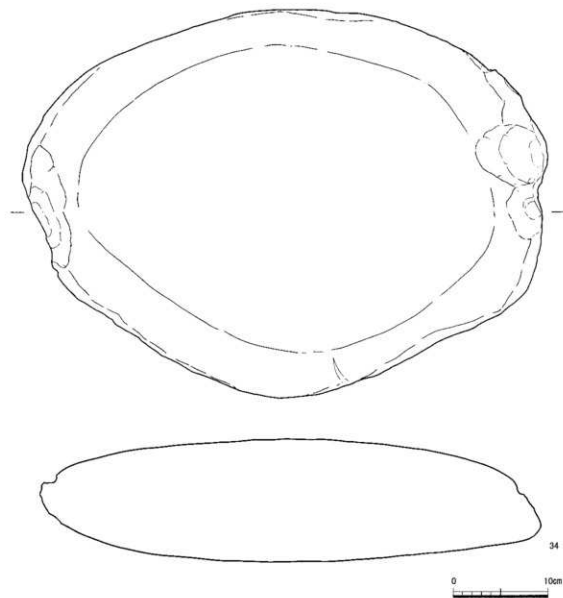


第66図 谷部包含層出土石器実測図③ (1/3)

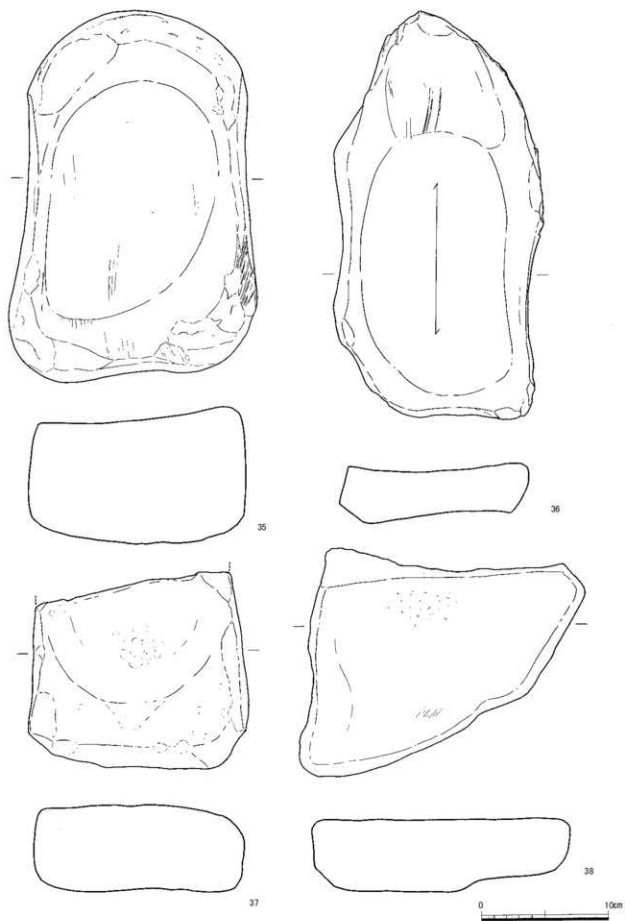
る可能性が高く、今後、注意していく必要がある。

砥石 (35～58)

35は大形砥石である。砂岩製の完形品で長さ28.2cm、幅17.2cm、厚さ9.8cmを測る。上面と両側面を主に用いており、上下側面は整形時の敲打痕を残す。下面は一部研磨痕が残るが、敲打痕が多く残り、ほとんど使われていない状態と判断される。**36**は砂岩製の不定形大形砥石である。長さ32.0cm、幅16.0cm、厚さ4.2cm、重さ3,660gを測る。上下面と両側面を砥ぎ面として用い、上面には筋状の使用痕も残る。使用痕は上面の中央部に顕著にみられ、当初からこの幅の砥石として用いられたと思われる。なお、全体的にヒビが入っており、被熱した可能性が高い。**37**は砂岩製の大型砥石である。長軸両端を欠くが、下側側面は割口を敲打で整形しており、再利用を試みる。左右両側面は整形時の敲打痕を残すが、目は細かく仕上げと思われる。現存長14.8cm、幅16.4cm、厚さ6.7cm。**38**は泥岩製の大型砥石である。断面は隅丸方形であるが、平面は上側面を



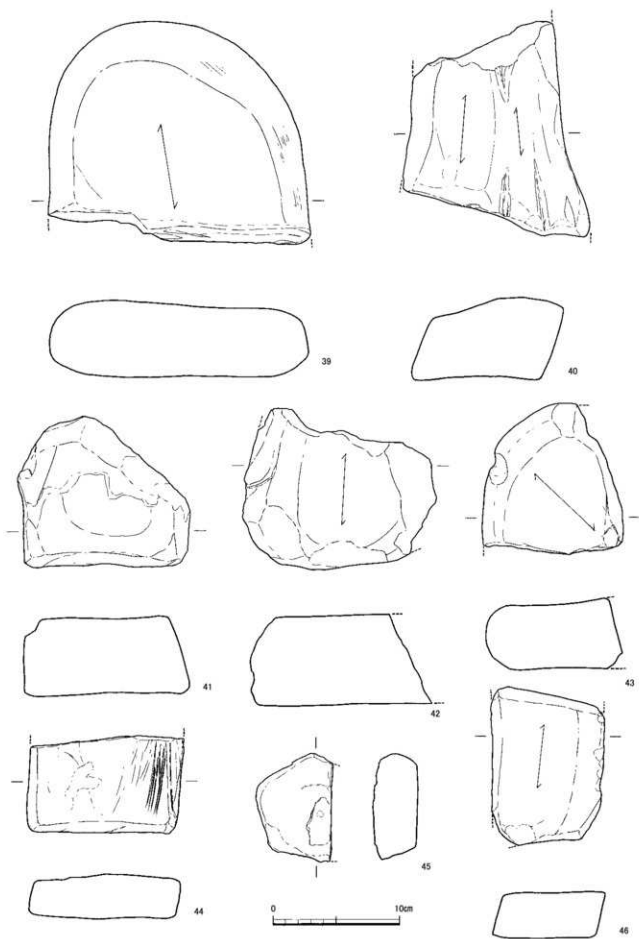
第67図 谷部包含層出土石器実測図④ (1/4)



第68図 谷部包含層出土石器実測図⑤ (1/3)

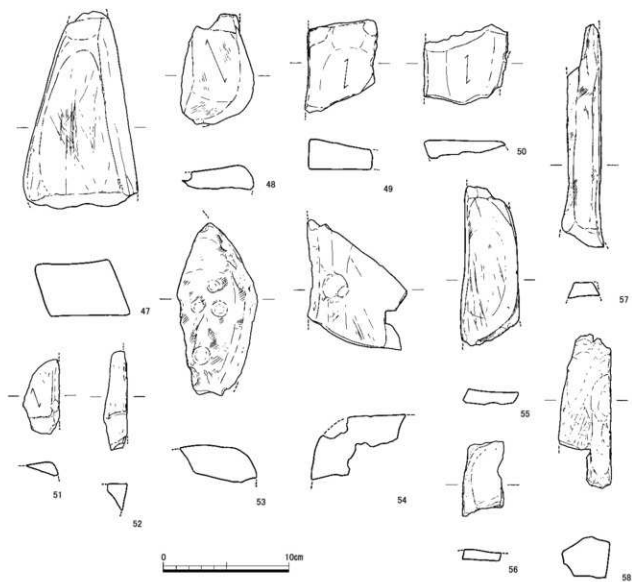
欠くが多角形を呈する。下面に段があるため、地面に埋め込む置紙であろう。表面には部分的に弱い敲打痕を残すが、砥面は平滑で仕上砥として用いる。長さ15.7cm、現存幅20.3cm、厚さ5.5cm。

39は砂岩製の大型不定形砥石である。長軸側を欠くが幅20.2cm、厚さ5.8cmを測る。側面は丸みを帯びるが一部使用痕が残る。砥ぎ減りは小さいが、目は粗く、粗砥石である。**40**は大型の砥石で、幅12cm、厚さ6.2cmを測る。本来は30cmほどの長さの砥石と思われるが、長軸側が欠けている。上側面は割口を残すが、下側面は再び砥石として利用しており、四側面を合わせた5面を砥石として用いる。側面の一部には黒斑が残る、部分的に火を受けた可能性があるが、ひび割れ等は認められない。基本的に長軸に沿って用いられ、上面には筋状の使用痕を残す。砂岩製で石の目は細かい。重さ2,030g。**41**は砂岩製の大型定形砥石である。長軸を欠くが、割口も砥石として利用しており、すべての面に使用痕が残る。長さ11.7cm、幅13.1cm、厚さ5.9cmを測る。**42**は大型砥石の下半片である。下部端は敲打と研磨で面取りするが、左側面は自然面で研磨等は見られない。上面は長軸方向の使用痕が見られるが、下面は敲打と研磨痕が残る。花崗岩製で厚さ7.1cmを測る。**43**は厚さ5.6cmを測る大型の砂岩製砥石であるが、欠損部分が多い。上・下面を砥石として用い、側面は丸みを帯びる。部分的に貝類による穿孔を伴うことから海浜部で採取された石材と判断される(森2016)。同様なものは潤番田遺跡2次調査5号土坑(弥生中期)からも出土している(平尾編2020)。**44**は硬質砂岩製の砥石である。幅11.9cm、厚さ3.6cmを測る。上面右側を中心に金属を砥いだ線状の使用痕を残すことから、欠損部分側に長軸をもつものと思われる。上面、下面と割口を除く三側面に使用痕を残し、断面は丸みをもつ方形であるが、定形砥石としてよいか。**45**は砂岩製の砥石であるが、剥離が著しく砥面は部分的にしか残らない。現存長8.3cm、現存幅6.0cm、厚さ3.6cmであるが、風化が進み本来の大きさはよくわからない。**46**は硬質砂岩製の砥石である。幅8.8cm、厚さ3.6cmを測るが、長軸を欠く。四側面すべてを砥ぎ面として用いる。断面は平行四辺形を呈するが、定形砥石としてもよいか。**47**は砂質片岩製の砥石である。平面は二等辺三角形を呈するが、長軸両端を欠く。四側面ともに使用痕が残る。断面は平行四辺形で角が立つ。上面には細い筋状の使用痕が残る。**48**は下面を欠く砥石で、側面は丸みを帯びる。上面には斜め方向の研磨痕が多く残る。砂岩を用いるが、やや目が粗い。重さ114g。**49**は下面と左側面がほぼ直角で接することから定形砥石と判断される。厚さが2.5cmとやや薄く、上面中央部が使い込まれている。砂岩製で目が細かい。欠損部分以外はすべて砥石として用いる。**50**は上面が部分的に残る砥石である。不定形砥石と思われる。泥岩を用い幅6.5cmを測る。**51**は砂岩製の砥石片である。**52**は暗灰色泥岩製の砥石片である。ひびが入り細片化していることから被熱した可能性がある。上面と右側面が約90度近くで接することから、本来は直角柱状の定形砥石の可能性が高い。**53**は泥岩製の不定形砥石である。上面と右側面のみ残存するが、上面は貝類による穿孔が認められ、海浜部での石材採取が想定される。**54**は泥岩製の大型砥石の破片である。表面と左側面の一部が残るのみであるが、ヒビが入っており、被熱した可能性がある。上面には使用痕が残る、左側面には敲打痕を残しつつも研磨痕が残る。また、貝類による穿孔も認められ、石材が海浜部で採集されたものと判断される。**55**は泥岩製の板状砥石である。長軸両端を欠くが、下部は割口を研磨して再利用を試みる。長さ12.4cm、幅4.2cm、厚さ1.1cmを測る。左下部を中心に線状の使用痕を残し、右端部の2か所に黒色物質が付着する。**56**は四側面すべて欠ける砥石片であるが、砥ぎ面の窪みのラインが確認でき砥石の左端部に該当する。裏面は剥離状態である。



第69図 谷部包含層出土石器実測図⑥ (1/3)

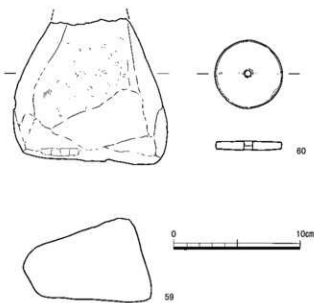
砂質片岩製で水平方向に目が入る。57は暗灰色泥岩製の砥石である。目が細かく仕上げ砥と思われる。断面から本来は定形砥石と判断されるが、側面が欠け、その割口に敲打と研磨を施し、再利用を試みている。ヒビが各所に入り、被熱の可能性がある。58は泥岩製の砥石未成品か。上面を除く面は欠けており、割れ口の再加工は見られない。上面は右側面から打ち欠かれており、左側面は整形時の鑿痕を残し、剥離面には研磨を施す。直角柱状の砥石を目指したものか。全体的にヒビが入り、被熱の可能性が高い。



第70図 谷部包含層出土石器実測図⑦ (1/3)

(11) 石器 (下層) (第71図)

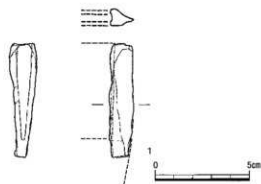
59は硬質砂岩製の砥石である。平面・断面ともに不定形で、長軸側を欠く。欠損部分を除きすべての面に使用痕があるが、上面に敲打痕が残るが、上面下部に敲打痕が集中して残り、最終的には敲石として用いられたと思われる。60は砂岩製の紡錘車である。直径が5.16cm、厚さが0.6cm、中心付近が0.75cmであり、ⅡaとⅡc類の境に位置する紡錘車であるが、全体的な印象はⅡa類である。上、下面ともに丁寧な研磨、側面は横研磨を施す。



第71図 谷部包含層出土石器実測図⑧ (1/3)

(12) 金属器 (第72図)

1は青銅製鋤先片で、袋基部のみの残存。かなり使用されているようで、刃先が無くなっている。地膚は菓があり、小さな凸凹が見られる。湿潤な地層から出土したため、全体的に使用痕が残っていない。他例と比べて袋部の厚みが薄く2~3mmほどしかないため、青銅製鋤先として使用に耐えられるか疑問であるが、無突帯のⅡ型の範疇で考えておきたい (柳田1986)。残存長5.9cm、残存幅1.3cm、袋部内法長5.0cm、袋部内法厚0.9cmを測る。弥生時代後期後半~古墳時代初頭の層から出土している。



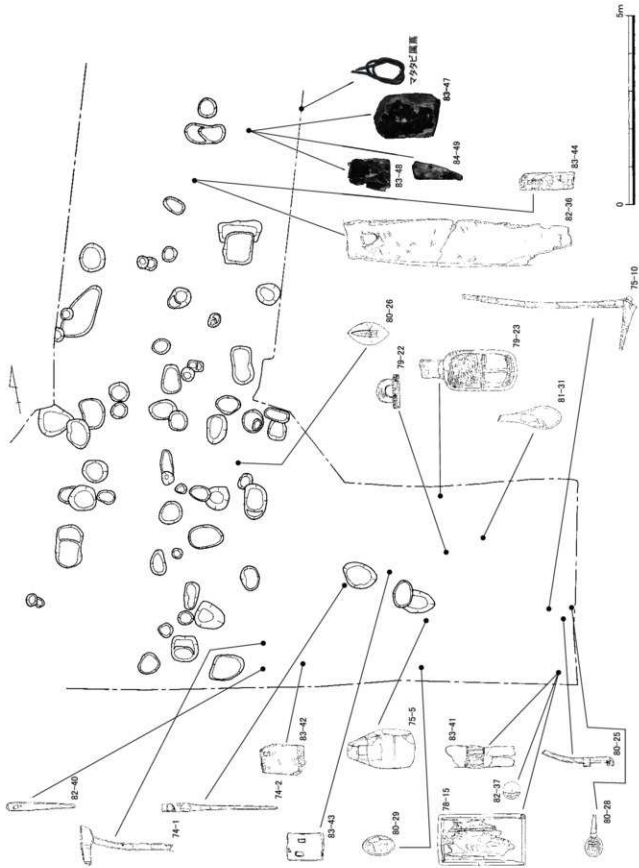
第72図 谷部包含層出土金属器実測図 (1/2)

4. 出土木製品

谷部の下層は地下水位が高く、湧水点に達していることから、木製品を製作する工房として、掘立柱建物と土坑が検出された。また、谷部の最下層にある湧水点に堆積した茶褐色粘質土層にも木製品や種子などの有機物を多く含んでおり、農具や容器、未成品、丸太半裁材、板材など様々な木製品が出土した。

これら木製品は、谷部包含層に含まれるものと遺構に伴うものがあるが、時間的制約から切断材を含めた木製品を一括して掲載した。また、切断材は、遺構に伴うものが多いため、各遺構に分類し、報告する。

谷部の包含層は、間層がなく、弥生時代中期後半~古墳時代初頭まで、順次遺物が堆積しているため、包含層に含まれる木製品は、明確な時期を与えるのが困難なものが多い。出土状況としては、調査区南側に集中して出土し、横杓子や把手付槽のような未成品や板材、船部材のような転用材が出土しているほか、調査区中央に近いところでは、端材の出土も見られる (第73図)。



第73図 谷部包舎層水器出土位置図 (1/100)

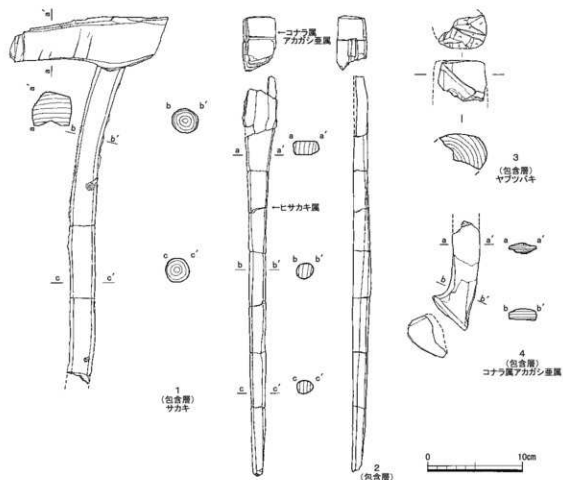
出土遺物

ここでは、106点出土した木製品については、奈良国立文化財研究所編『木器集成図録-近畿原
始編』1993に準じて、種類・器種別に分類したが、用途不明な木製品については、〇〇状木製品
として取り扱っている。切断材については、両端に切断痕が確認され、半裁材、板材、端材にあ
たるものを含めたもので、残材の性格をもつものをまとめた。また、実測については、時間的制
約から切断材の一部は、外形に写真貼付をして図示したものがあるほか、樹皮や種子については
写真のみの掲載である。樹種同定については、一般社団法人 文化財科学研究センターに委託し、
現段階では108点の樹種同定を実施している。

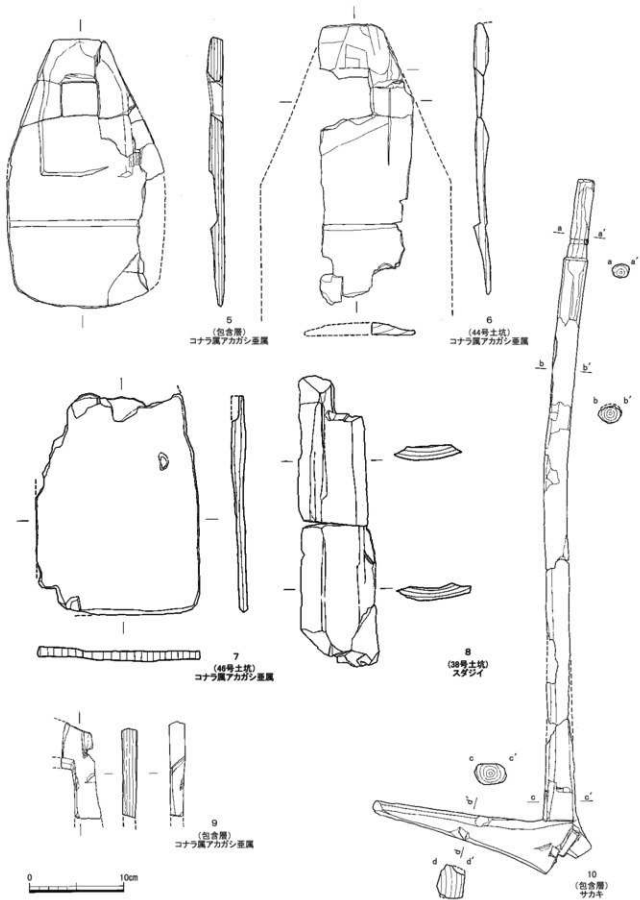
①工具 (第74図)

斧柄

1は縦斧柄で、一木式であるが、柄の一部が欠損する。台部は面取りし、先端は欠損するが、
削り込みが進み、斧台は長さ16.6cm、幅4.8cm以上の装着部がつく。茶褐色粘質土層(下層)
からの出土。2は、茶褐色粘質土層(下層)から出土した横斧柄で、頭部には縦4.0cm、横2.2cmの
長方形孔があり、孔の周囲を一段削り込む。方扁平石斧が直接装着されるか、屨柄が装着する可
能性がある。頭部と柄は別部材である。3は、直柄縦斧の頭部片で、上面の面取りが荒く残る。
黒色土層(上層)から出土した。4は斧柄の柄尻部分で、屈曲する。端部の面取りは丁寧に行う。
黒色土層(上層)から出土している。



第74図 工具 (1/4)



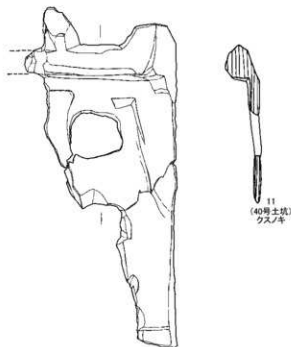
第75図 農耕具 (1/4)

②農耕具・運搬具 (第75図)

農耕具の出土点数は、未成品を含めて5点で、すべて直柄鋤である。鋤は必ずしも農作業用に特定されず、土木作業全般に使用されたとみられる。運搬具は、背負子が1点出土している。

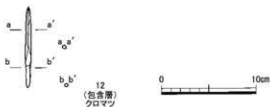
5は、茶褐色粘質土層（下層）から出土した直柄広鋤（糸島型）で、隆起部はあるが、あまり明瞭ではない。刃部に近い部分に厚みを持たせるため段がつく。6も有段の直柄広鋤（糸島型）であるが、広鋤として両端が破損したものである。44号土坑より出土した。7は46号土坑より出土した広鋤で、方形穿孔部分が欠損する。8は、38号土坑から出土した端材であるが、上位の装着部を斜め加工により、造り出しているので、斧柄を含めた。製作途中で廃棄されたものか。9は広鋤の装着部片で、柄の装着角度は50°である。

10は背負子の部材である。荷受けの爪木が突出したもので、枝分かれした一木を利用して、2本で1対となる。爪木での組合せで各部を繋ぐほぞ穴は、留め具による固定の痕跡が見られ、これまでの出土例と比較しても精巧に作られている。また、梓木の部分は、長さ68.0cmで、やや湾曲しており、柄尻の部分は一段削り、径4mmの円形ほぞ穴をもつ。



③漁労具 (第76図)

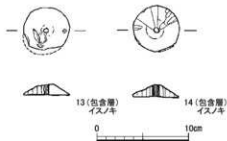
11は、アカトリもしくは把手付櫓の可能性ある木製品で、角に突出部があり、欠損しているが、中央に持ち手のような把手が付く。全体的に浅く先端がやや上がっている。2か所の円形穿孔が見られるため、二次転用を企図したものと考えられる。40号土坑からの出土。12は中層から出土したヤスで、長さ8.5cmを測る。先端に向けて断面五角形に面取りする。



第76図 漁労具 (1/4)

④紡織具 (第77図)

13は上層から出土した木製紡錘車で、直径5.0cmを測る。丁寧な削り出しで、穿孔部分に木芯が残る。14も同じ層から出土した木製紡錘車で、穿孔部分に木芯が残る。



第77図 紡織具 (1/4)

⑤容器・食器具（第78～81図）

15は、上層から出土した槽で、長さ36.8cm、幅21.5cm、厚さ1.4cmを測る。内面は全体に赤色の付着があり、最も濃く分布する底面や内側面を図示している。外表面が黒炭化しており、赤漆を塗布したもののか、もしくは朱の精製に関連する容器の可能性もある。外面は段を設けており、丁寧な造りである。16は台形状で薄い木製品で、槽の蓋と考えられる。17の槽は、本来槽であった木器を二次加工している途中で、廃棄されたものか。短辺の一部に槽の刳抜き部分を残すが、両短辺を切断している。長さ50.0cm、幅24.8cm、厚さ4.0cmを測り、今宿五郎江遺跡12次調査SD-01W122に類似がある。18は45号土坑から出土した槽である。底部は厚さ1.5cmから端部は厚さ0.5cmと湾曲気味に薄くなる。槽を1/2に分割し、二次利用を試みたものか。長さ32.1cm(残存)、幅31.8cm(残存)を測る。19は容器に含めているが、田船の可能性のある木製品。長さ27.5cm、幅5.3cmを測り、柁目材を使用している。20は杓子の一部で、横木取りで木芯を避けて製作している。底面に切断痕があり二次転用品か。21は断面半円状の刳抜き木製椀である。残存で長さ7.8cm、幅5.5cm、厚さ0.4～1.0cmを測る。22は槽の把手で、長さ9.7cm、幅14.3cm、把手長6.8cm、把手幅10.0cm、把手厚1.9cmを測る。芯持ち材を利用し、把手は、接続部に向けて薄くなっている。23は把手付槽の未成品で、縦木取りの半裁材を刳り抜いて製作する。把手側の半分を刳り抜き、先端側を三日月状に刳り抜いた状態である。また、把手部分を製作途中であり、製作工程が分かる資料である。24は横杓子の受部で、持ち手部分を欠損する。芯持ち材を加工し、残存で長さ18.3cm、幅19.8cm、厚さ2.2cm(最大)を測る。深江井牟田遺跡にも同例がある。中層より出土。25は縦杓子の持ち手部分で、長さ30.4cm、幅2.4cmを測る。細かい加工で、持ち手やその湾曲部分をきれいに整え、持ち手先端部は切り落とす。26は縦杓子の柄頭部分で、縦木取りで芯持ち材を加工して製作する。平面は木の葉状で上面はやや凸状となっている。長さ17.5cm、幅9.5cm、厚さ1.2cmである。27は杓子柄頭部分で上面の凸状に湾曲する。切断している柄(持ち手)先端は、被熱したのか炭化している。28は横杓子の未成品で、全体的な形を作る粗い加工の段階のものである。29は、刺物容器で、長さ13.7cm、幅8.5cm、厚さ3.1cm、容器の深さ1.2cm～3.1cmを測る。平面形は楕円形で、底面に小穴11個、側面に小穴19個が、規則正しく穿孔されている。編み物と組み合わせて、底に使用されたものか。30は蓋で、2か所の円形孔がある。表面には三日月状の線刻が見えるが、絵画とは考えにくい。31は杓文字で、直線的に延びる柄から、楕円形の身を持ち湾曲する。柄の端部は斜めに切り落とされる。長さ26.4cm、復元幅9.7cm、厚さが0.9cm(柄部)、0.6cm(身部)を測る。

⑥雑具（第81図）

32は、腰掛の脚部で、中央に台形状透かしを入れているほか、中央下位を削ることで、湾曲し細くなっている。中央下位の調整痕は、二次転用途中の可能性もある。上部上面は傾斜する。33は柄と身を粗い削りで整える途中で、廃棄された杓文字の未成品の可能性もあるが、柄の部分は曲がっているほか、身の表面には鋭利な刃痕が斜方向に入っており、作業台として使用された可能性もある。34は容器の未成品と考えていたが、上面には線状の刃痕が多く認められるため、作業台に含めている。側面は平坦になるよう調整し、小口部分は施溝切断と玉切りの痕跡を残す。長さ29.3cm、幅15.0cm、厚さ5.5cm(最大)を測る。35は案の天板で、両端に脚部を差し込む長方形孔があり、上面には線状の刃痕が多く入る。残存長42.7cm(残存)、残存幅8.0cm、厚さ0.9

cmを測り、雀居遺跡5次調査の例よりも一回り小さい。

⑦建築部材・その他・用途不明品（第82、83図）

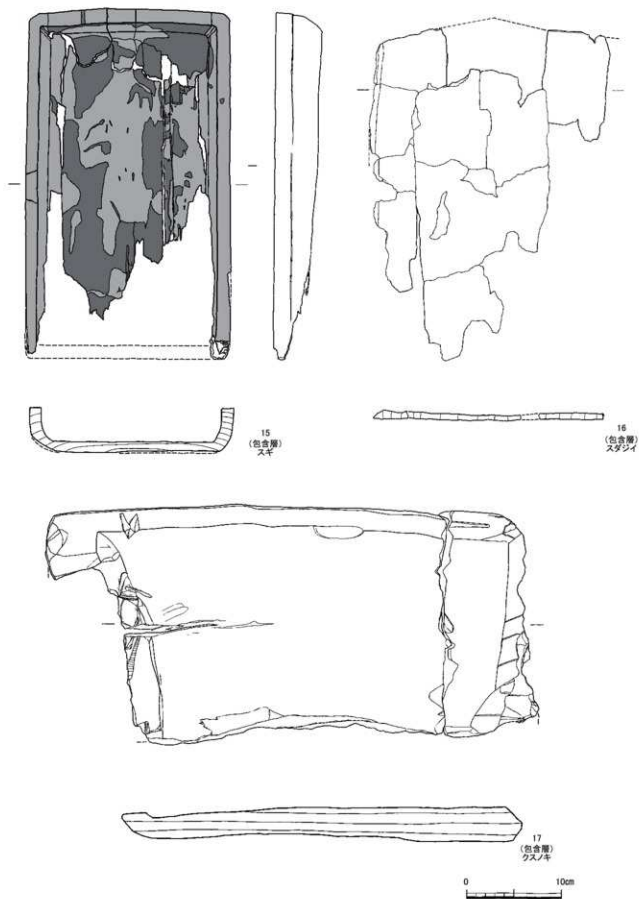
36は、舟の二次転用品である。断面がU字形で、舷側側端部と上小口端部は、舟材時の加工を残し、船底側は割れによる分割、下小口端部は、斜めの切断加工である。材上部の穿孔は、二次転用の際に穿孔されたものである。船底側の厚みが薄くなるのは、潤地頭給遺跡出土準構造船と同じである。残存長95.3cm、残存幅19.8cm、最大厚2.5cmを測る。**37**は、直径7.2cmに復元できる円板状木製品で、内側を一段削っている。厚さが0.5cmと薄く、現状反りが生じている。**38**は独楽状の木製品であるが、独楽である確証はない。縦木取りで円錐状に削りだし、体部全体に細かな加工を施す。上面中央には、直径1.3cm程度の持ち手痕跡が確認できる。残存長9.2cm、上面直径7.5cmを測る。**39**は、芯持ち材を半裁し、上面を加工して刃部を製作する楔状木製品と考えられる。長さ16.1cm、幅6.6cmを測る。**40**は先端が細くなる板状木製品で、上部に方形孔を開ける。上面はやや丸みを帯びるが、下面は割れのままである。長さ29.0cm、最大幅3.2cm、厚さ1.6cmを測る。**41**は芯持ち材を加工して製作する梯子で、右長端部は欠損、足掛け部分も欠損している。残存長42.9cm、残存幅14.2cm、足掛け部の厚さ4.8cmを測る。

⑧切断材・転用材（第83～90図）

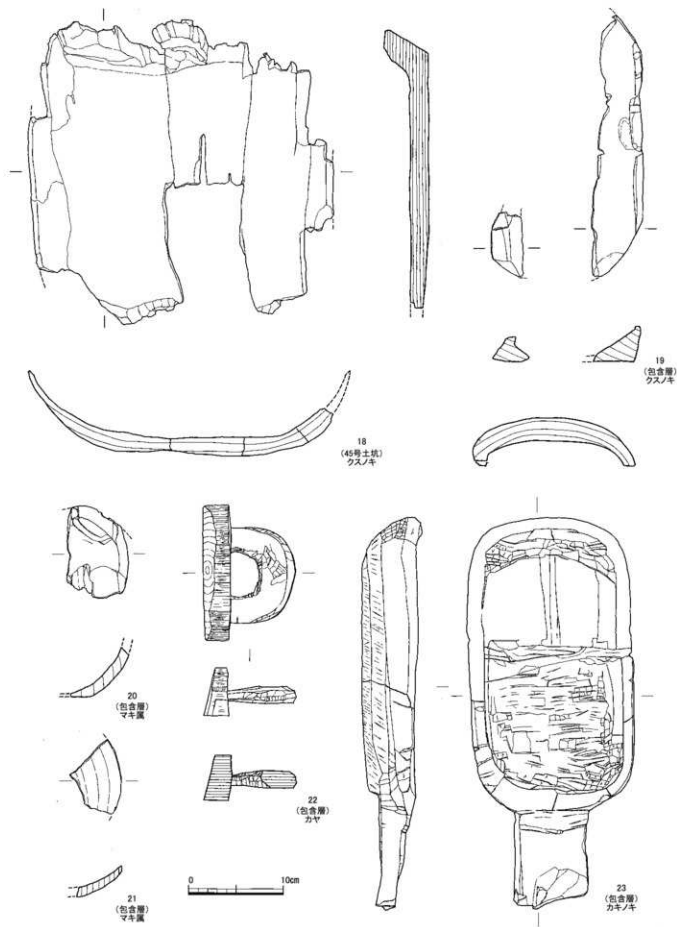
本遺跡では、半裁材や端材、板材などが多く出土している。これらは両端に切断痕が確認でき、製材段階での素材・残材を切断材として、木製品を二次利用しようとしたものを転用材として報告する。これらは、包含層から出土したものと土坑・ピットなど遺構から出土したものに分類されるため、本稿では、①包含層出土②遺構出土に分類し報告する。

包含層出土

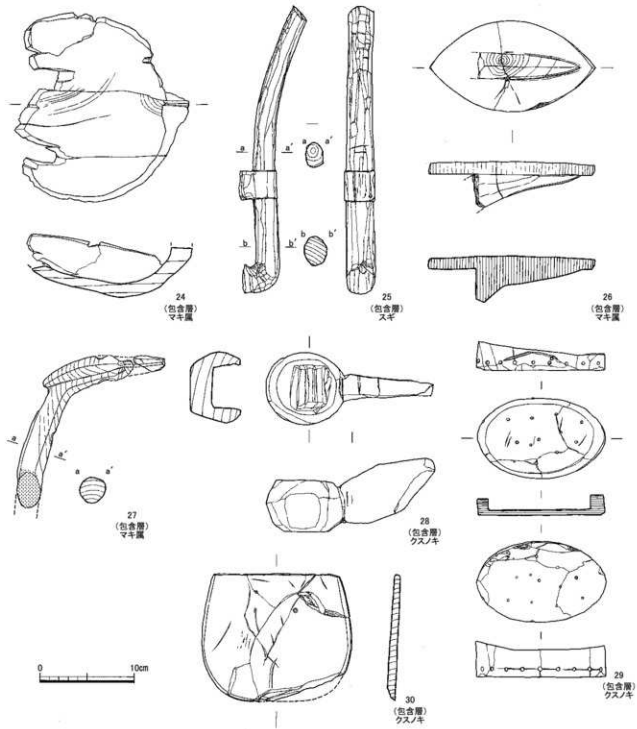
42は板材であるが、ほぞ穴があるため、元来建築材であったものの再利用して、板材を作出したものと考えられる。上小口面は、長い部材を木表と木裏から切り込みを入れ折り、下小口面にも同様の切断痕がある。左右側面は平坦に調整加工している。長さ23.2cm、幅19.8cm、厚さ6.0cmを測る。**43**は長方形の板材であるが、2つの長方形ほぞ穴があり、下先端に向けて薄くなるため、平鋸の製作を企図したものか。長さ23.2cm、幅16.9cm、厚さ3.2cmを測る。**42**と**43**は、同じような規格である。**44**の板材は、板目材を使用して、板素材を作出したもので、側面は、切断後に平坦に調整、左小口面は、斜めに切り込みを入れて折り取り、右小口面は割れのままである。長さ34.3cm、幅10.9cm、厚さ2.5cmを測る。**45**はネズミ返し転用品。同一部材であるものの、接合しないため、別々に掲載する。木表、木裏面共に手斧による細かな調整があり、側面にはネズミ返し特有の湾曲が残る。柱穴を挿入するほぞ穴はなく、二次転用目的の材と考えられる。**46**はネズミ返し転用品。ネズミ返し全体を1/4に分割したもので、円弧の部分はネズミ返し時の湾曲であり、長方形孔の痕跡が残る。**47**は端材である。材の上小口面は施溝分割、下小口面は玉切りをして、作出した素材を天に向けて小口面から楔削し、樹皮側を除去した残欠である。部分的に樹皮が残る、長さ39.0cm、幅27.1cm、厚さ8.1cm、推定される原木径は37～38cmである。**48**も**47**と同様の端材で、同じ工程である。長さ25.9cm、幅18.5cm、厚さ2.5cm、原木径は44～45cmである。**49・50**は同じ地点から出土する板目端材で、樹皮が残る。上小口面は玉切り後調整、下小口面は斜方向の切断が行われている。楔削した残欠端材である。



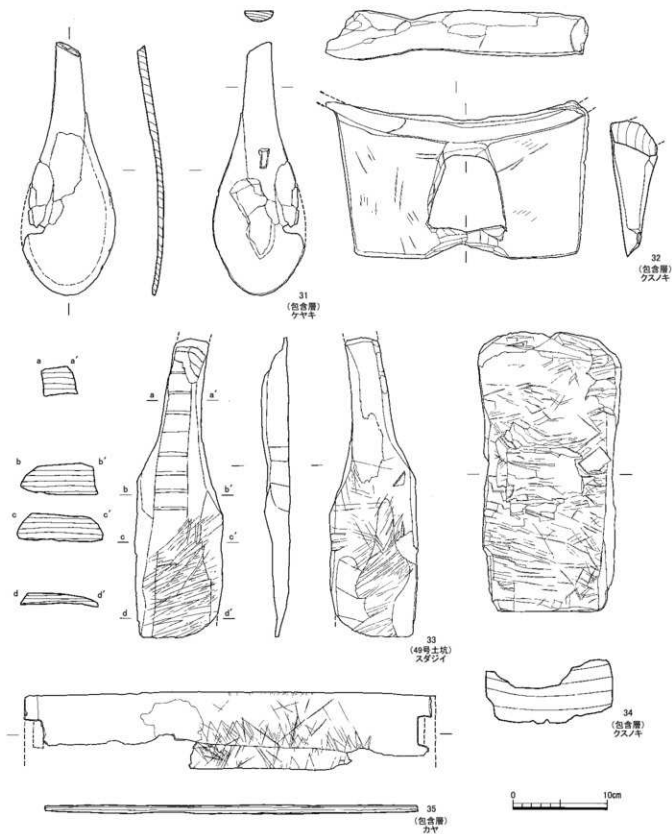
第78図 容器① (1/4)



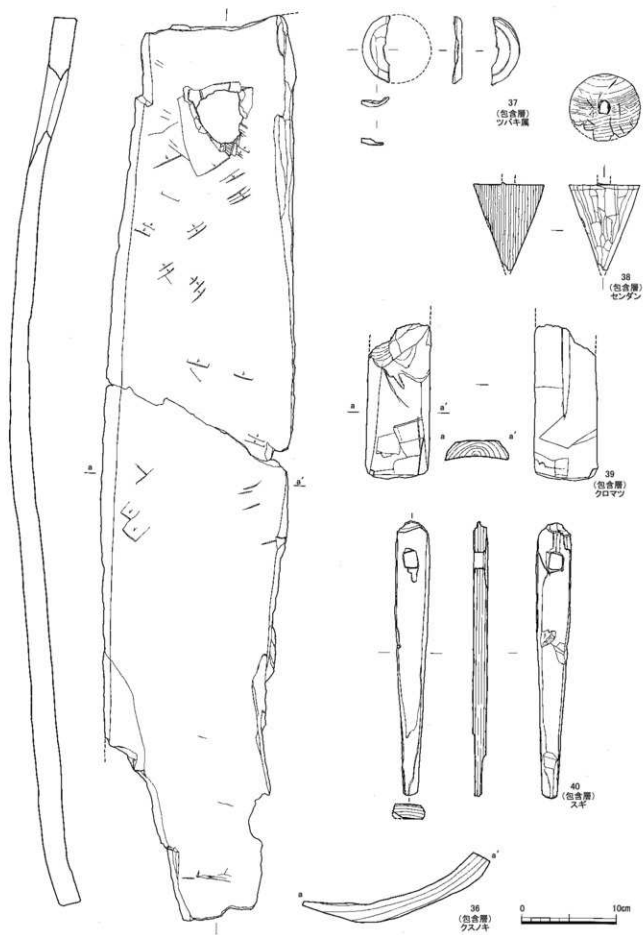
第79図 容器② (1/4)



第80図 容器③・食器① (1/4)



第81図 食器②・雑具 (1/4)



第82図 建築材・その他・用途不明品・切断材・転用材 (1/4)

103は施溝切断と玉切りを経て、楔割による分割が行われた板目材で、木表、木裏共に割れ面を残す。最大厚5.0cmと板材の作出が可能な厚さである。104は柁目取りの板材で、長さ15.0cm、幅4.5cm、厚さ1.1cmを測る。下小口面には切断痕跡がある。105は、板目材で断面が湾曲する板材で、図示しているのは木裏側である。両側面は平坦に加工し、L字状の切断がある。小口面は斜めの切断痕跡が残る。木表には方形に樹皮が残る。長さ30.3cm、幅25.1cm、厚さ2.8cmを測る。106は方形の板目材で、長さ20.9cm、幅18.7cm、最大厚3.0cmを測る。両側面は平坦加工を行い、両小口面は施溝切断されている。

遺構出土木製品

5号掘立柱建物 (P-452)

98は97と同じ製作手順で隅丸方形に近い形状のネズミ返しから切断して作出する。側面の一部は、柱底に合わせて削っており、木表の手斧痕が明瞭である。P-452から出土。

5号掘立柱建物 (P-522)

97はP-522から出土したネズミ返し転用礎板で、一部木が痩せている。ネズミ返しを斜めに切断して、全体の1/4を利用している。木裏・木表共に手斧によるケズリによって平坦にしている。99は97と2枚重ねであったネズミ返し転用礎板で、板目材。全体的に手斧痕があり、長さ27.9cm、幅34.3cm、厚さ3.5cmを測る。

29号土坑

51は29号土坑から出土した板材で、長さ55.8cm、幅16.5cm、厚さ2.2cmを測る。板目材で、長辺端面は平滑に加工し、右小口部は割れ、左小口部は切断加工である。長い部材を最適な長さで切断している。

30号土坑

52、53は、30号土坑から出土した半裁材である。半裁材は、玉切りと施工分割により作出された樹皮が残る原木に対し小口面を天にして、楔割によって半裁したものである。同一木材と考えられるが接合しない。上小口面を施溝切断、下小口面を玉切りしている。両材とも樹皮を残したまま半裁している。

32号土坑

54～56は、32号土坑から出土した半裁材である。54は両小口面共に玉切りしている半裁材である。樹皮が残り、長さ43.8cm、幅18.0cm、厚さ7.1cmを測る。55は両小口面を施溝分割で折り取った後、90°回して楔割して分割する。長さ51.8cm、幅16.6cm、厚さ10.3cmを測る。56は55と同じ工程で作出された半裁材であるが、55とは接合しない。長さ47.7cm、幅16.7cm、厚さ8.5cmを測る。57はネズミ返しの二次利用による分割で作出された板材で転用品である。斜方向の切断痕と楔による割れ面があり、分割している。長さ37.6cm、幅26.3cm、厚さ4.4cmを測る。

33号土坑

58は33号土坑から出土した隅丸長方形のネズミ返しの転用品で、2分割後に、左端面を調整する途中の材で、一部割れ面が残ったままである。長さ50.5cm、幅22.3cm、最大厚3.1cmを測る。礎板転用途中のものか。

34号土坑

59は34号土坑から出土した端材で、小口面は施溝分割と玉切りが確認できる。楔割による割れ面を残し、樹皮や枝幹も残る。長さ31.7cm、幅13.8cm、厚さ5.5cmを測る。60は34号土坑から出土した板目端材であるが、木裏に割れがあり、木表を平坦に加工する。長さ43.0cm、幅16.2cm、厚さ6.0cmを測る。61の端材は、柾目端材で、面取りした原木材を柾目取りした際に生じる端材と考えられる。長さ36.2cm、幅8.2cm、厚さ2.4cmを測る。34号土坑からの出土。62は板目材で、楔割後に上面や側面を面取りした板材で、木裏には割れ面を残す。両側面は平坦に加工されている。長さ32.8cm、幅26.8cm、厚さ4.9cmを測る。63は小口面に切筋痕の残る板材で、板目材である。側面は割れによる分割で、上小口面は玉切り、下小口面は施溝切筋である。59～61はこの過程で生まれた端材と考えられる。

35号土坑

64は35号土坑から出土した不明部材で、芯持ち材を使用して、側面を面取り、先端を丸くしているが、上部の方形材は、一木での造り出しではなく、別材の差し込みである。

36号土坑

65は36号土坑から出土し、芯持ちの端材で、不要部分である。小口面には施溝分割と玉切りの痕跡がある。面取り加工後に楔割で分割して廃棄された残欠と考えられる。66も36号土坑から出土した端材で、やはり芯を含む不要端材であろう。木裏と芯部分は割れ面を残す。67は36号土坑から出土した半裁材で、上小口面は施溝分割、下小口面は玉切りである。割れ面には楔痕跡があり、長さ25.3cm、幅13.8cm、厚さ6.0cmを測る。68は上小口面が玉切り、下小口面が施溝分割を施し、楔割による半裁材である。一部樹皮が残るものの面取り加工途中のものである。長さ55.0cm、幅10.4cm、厚さ6.9cmを測る。36号土坑から出土。

37号土坑

69は37号土坑から出土した半裁材から木表を平坦に加工した段階のもの。側面は樹皮を剥いだ程度で、加工途中のものと考えられる。長さ35.9cm、幅17.6cm、厚さ7.8cmを測る。

38号土坑

72、73は38号土坑からの出土。72は柾目端材で、上小口面は玉切り、下小口面は切筋痕、右側面は割れによる分割面を残す。柾目取りの過程で生じた残材である。73は板目端材で、半裁材の樹皮側を面取りして、分割後に残った端材である。下小口部に切筋した痕跡が残る。長さ12.5cm、幅9.2cm、厚さ4.5cmを測る。

41号土坑

76は、41号土坑からの出土した板目材。半裁材の樹皮を含めて面取りした後、上面を楔で割り、玉切り後の端材であるが、施溝切筋部分を切り落とす途中であるため、素材として利用である。長さ18.1cm、幅25.7cm、厚さ6.0cmを測る。77は41号土坑からの出土。柾目取りの際に、生じた端材で、両側面に分割した痕跡がある。不要な芯部分を分割している。長さ27.6cm、幅7.0cm、厚さ4.7cmを測る。78は、板目取りの過程で生じた端材で、側面は割れ面を残す。41号土坑から出土し、長さ37.3cm、幅5.3cm、厚さ3.1cmを測る。79も78と同様の端材で、フシを含む部分であるため、不必要部分と判断され、分割された板目端材である。

42号土坑

70、71は2枚重なった状態で42号土坑から出土した板材である。70・71の板材は柾目材で、両小口を観察すると、切断のためのケズリを入れて折り取っている。また側面には楔痕跡があり、分割によって2枚を作出しており、木表・木裏共に割れのままである。70は長さ29.5cm、幅13.6cm、厚さ2.8cm、71は長さ31.4cm、幅13.1cm、厚さ2.3～3.2cmを測る。

43号土坑

80は43号土坑から出土した板目材で、両側面は平滑に加工している。上小口面は、施溝切断で折り取っており、製品素材として加工している。上下面共に手斧ケズリを行い、木裏面は刃物痕がある。長さ34.1cm、幅15.5cm、厚さ1.3～1.9cmを測る。81は43号土坑から出土した柾目端材で、木表に樹皮を残したまま、放射状分割していたことが分かる資料である。上下の小口面には、木芯に向けて施溝切断の痕跡がある。長さ45.6cm、幅7.4cm、厚さ2.2cmを測る。82は43号土坑から出土した半裁材で、外面に樹皮が残る。小口面は、施溝切断と玉切りの痕跡があり、割れ面には楔痕のような長方形の凹みが観察できる。長さ32.0cm、幅9.1cm、厚さ3.5cmを測る。

47号土坑

83は47号土坑から出土した板目材で、芯持ちである。上小口面は施溝切断後に、下小口面の切断を行う。右側面は平滑に加工し、左側面は分割による割れ面を残し、分割後に両側面に挟りを入れていたことから、製品化の初期段階か。長さ31.8cm、幅15.2cm、厚さ6.4cmを測る。84は47号土坑から出土した板材で、板目材である。上小口面は切断のための斜方向のケズリ、下小口面と両側面は平滑に加工している。長さ33.6cm、幅20.3cm、厚さ3.6cmを測る。85は47号土坑から出土した板目端材で、木表～側面は面取り加工し、木裏は楔による割れ面を残す。板目材を作出する工程で生じた端材である。長さ40.6cm、幅25.3cm、厚さ4.5cmを測る。86は47号土坑から出土した端材で、木表側は面取り加工、側面は割れである。木裏は割裂痕が明瞭である。上小口面は施溝切断、下小口面は玉切りである。長さ22.8cm、幅22.4cm、厚さ5.0cmを測る。87は、板目材の作出で行われる模割で生じた端材で、47号土坑から出土した。上小口面は切断加工、下小口面は玉切りで、木表は面取り加工、木裏は割れ面を残す。長さ23.9cm、幅21.2cm、厚さ4.6cmである。88も板目材で、木表は面取り加工、木裏と側面は割れ面を残す。上小口面は切断加工、下小口面は玉切りで、86・87と同様の端材の可能性があり。長さ23.0cm、幅24.4cm、厚さ3.3cmを測る。

48号土坑

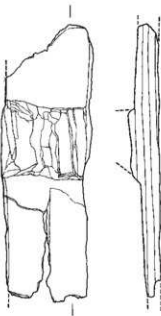
94の板材は、木表を手斧によって平滑に加工し、木裏は割れ面を残すが、刃物キズがあり、93と同じく工作台としての一時的な使用が考えられる。小口部の切断と側面の分割によって作出されている。長さ63.8cm、幅20.8cm、厚さ3.4cmである。

49号土坑

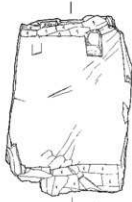
89は49号土坑から出土したネズミ返しの転用品で、柱を差し込む円形孔を残す。二次転用の際に、斜めに切り込みを入れて切断し、1/4の板材を作出する。復元柱径は22cm、ネズミ返しの復元直径は80cmと大径木を使用している。

50号土坑

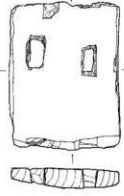
93は板目材で、両側面は分割による割れ面を残し、小口を切断して板材を作出する。木裏は割



41
(包含層)
クスノキ



42
(包含層)
クロマツ



43
(包含層)
スギ



44 (包含層)
スギ



45-2
(包含層)
クロマツ



46
(包含層)
クスノキ



45-1
(包含層)
クロマツ



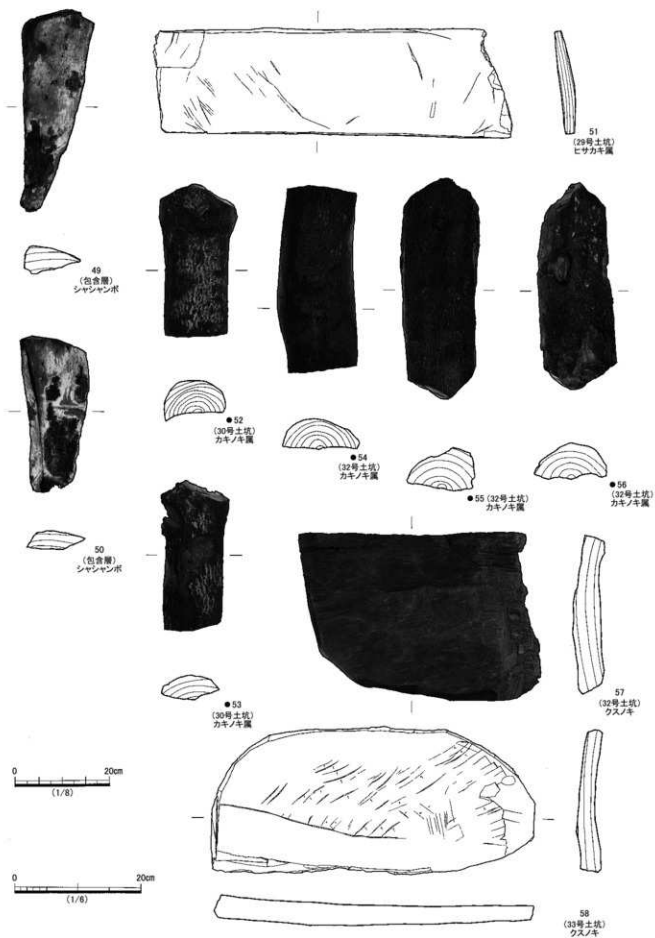
47
(包含層)
シャシヤンボ



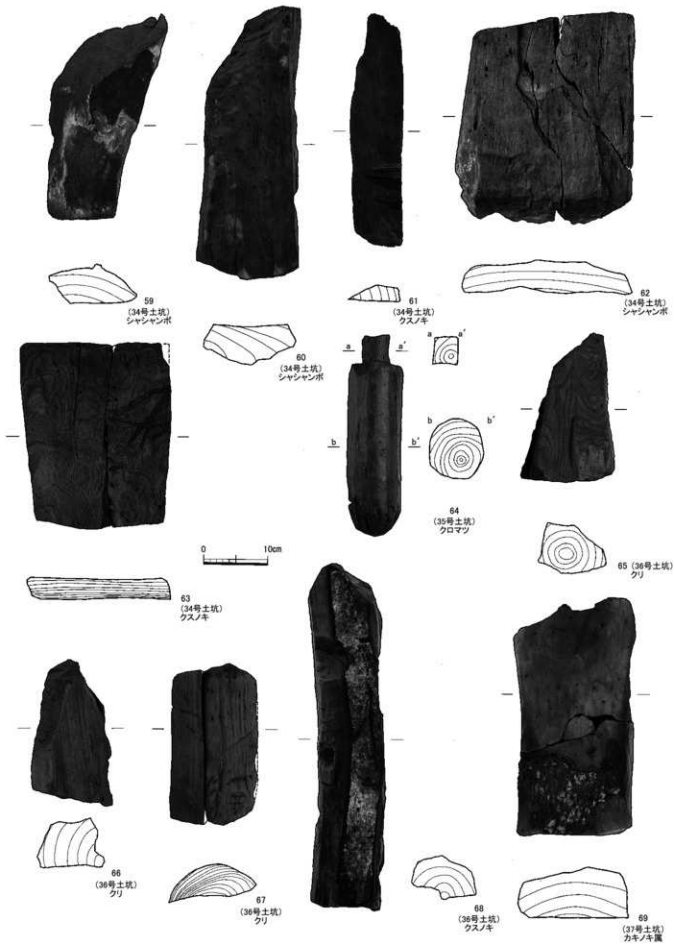
48
(包含層)
シャシヤンボ



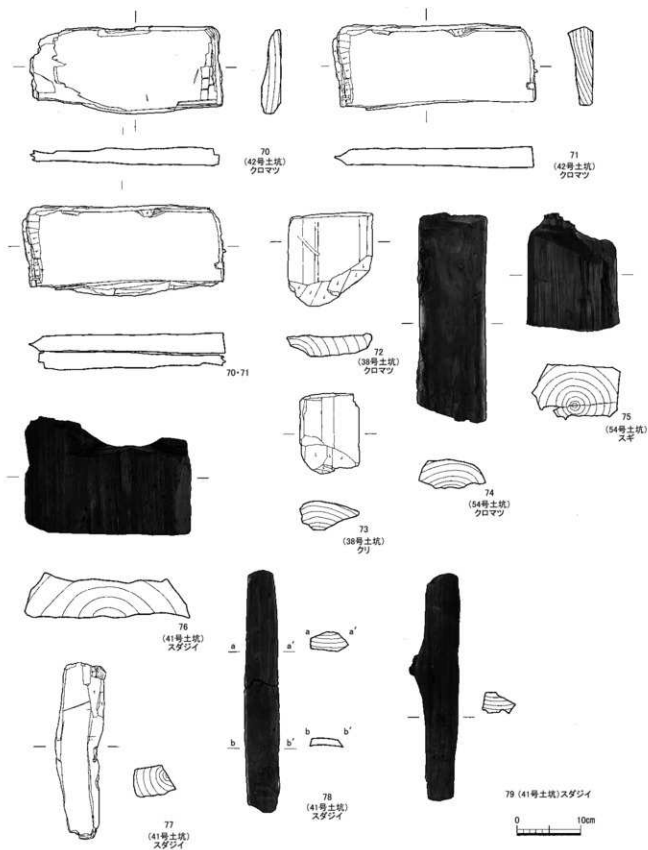
第83図 切断材・転用品① (1/6)



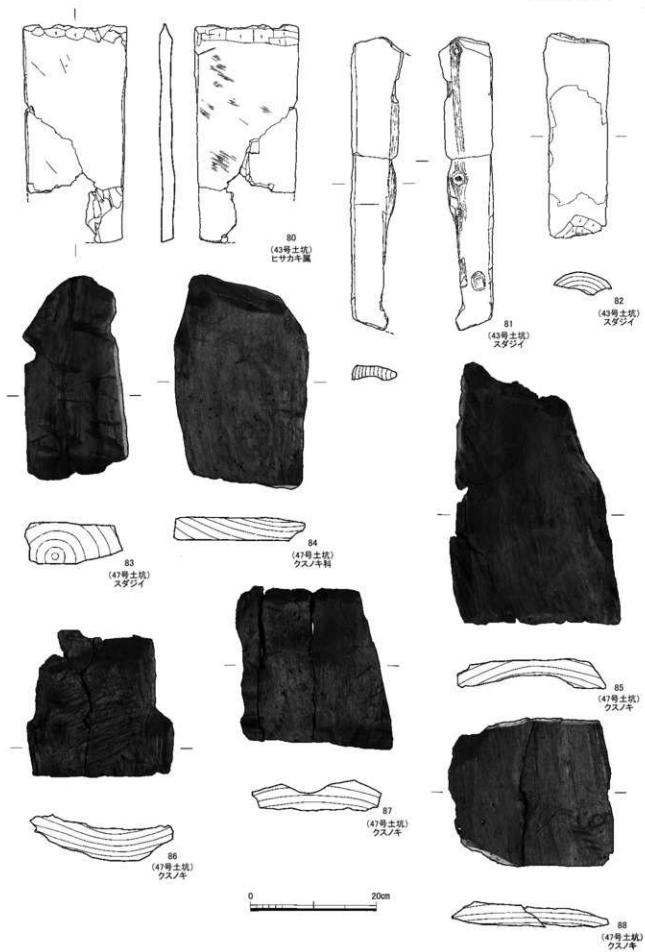
第84図 切断材・転用品② (1/6・●は1/8)



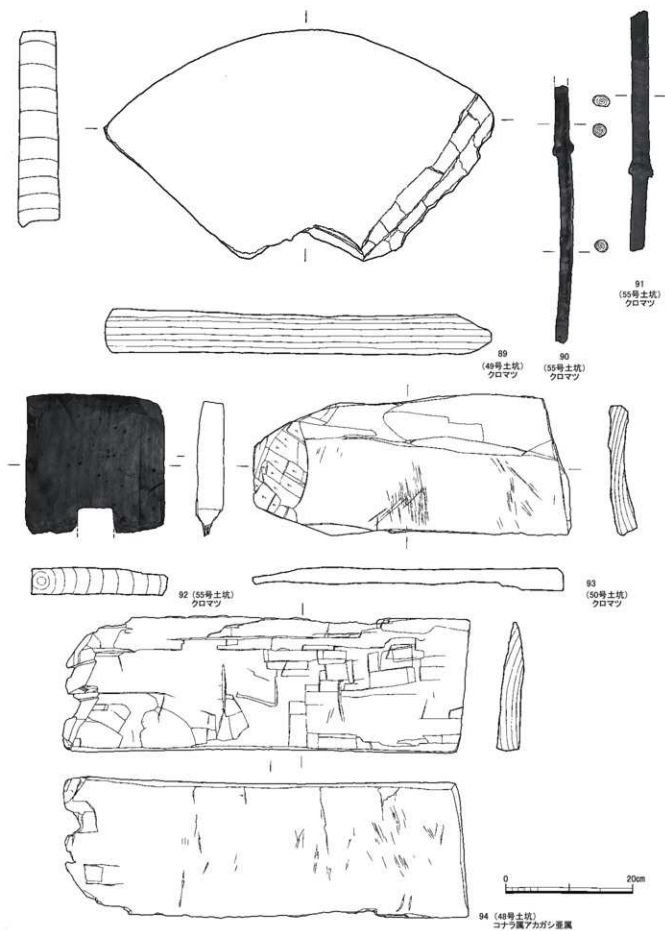
第85図 切断材・転用品③ (1/6)



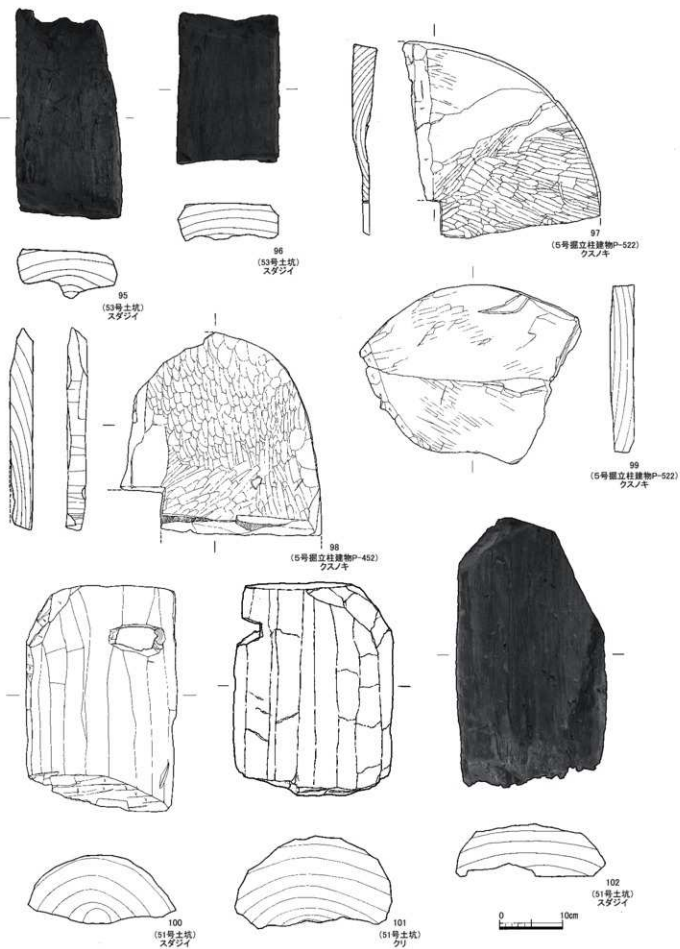
第86図 切断材・転用品④ (1/6)



第87図 切断材・転用品⑤ (1/6)



第88図 切断材・転用品⑥ (1/6)



第89図 切断材・転用品⑦ (1/6)

れ面を残し、木表には刃物キズがあることから、一時的に工作台として使用されている。左小口側は、両側面を加工しており、製品製作の素材と考えられる。長さ49.4cm、幅21.8cm、厚さ3.3cm。

51号土坑

100、101は51号土坑から出土した半裁材で、一部が接合し、対となる。下小口面は玉切り、上小口面は施溝切断で、表面は面取りをしている。搬送用と考えられる歪な方形孔を開け、一部が快れているのは縄掛け部分であろう。原本は直径25cm程度である。102は51号土坑から出土した半裁材で、小口面から楔割し、木表面と上小口部を平坦に加工している。板目材の作出工程が分かる資料。

53号土坑

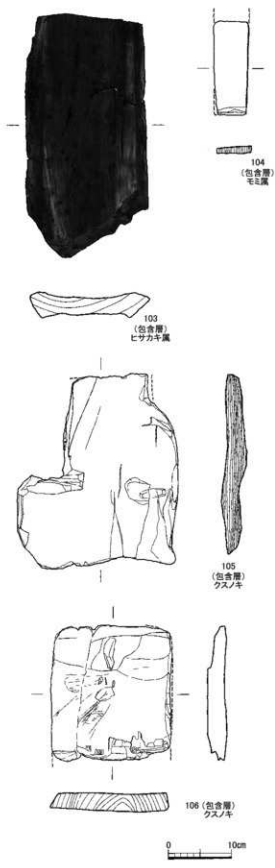
95は半裁材で、楔割で半裁した後、面取り加工を行い、木表を平坦に加工している。長さ32.5cm、幅16.7cm、厚さ7.3cmを測る。96も53号土坑から出土した板材で、製作順序は95と同じである。木表を平坦に加工し、木裏は割れ面を残す。図の左側面は、割れ面を平坦に加工している。長さ21.7cm、幅15.7cm、厚さ5.7cmを測る。

54号土坑

74は54号土坑から出土した半裁材で、楔割の後に、木表の面取り途中のものであり、側面に近いところは樹皮が残る。長さ32.3cm、幅10.2cm、厚さ4.3cmを測る。75は54号土坑から出土した芯持材の端材で、両側面は面取り加工し、木裏と木表は割れ面を残す。上小口面は施溝切断、下小口面は玉切りである。角材の不要部分を切断した残欠である。長さ18.5cm、幅13.9cm、厚さ7.9cmを測る。

55号土坑

90・91は、同一材と考えられるが接合しない。小枝部分を切り捨て、一部を平滑に加工した棒状木製品で、55号土坑から出土。92は板目材を分割して製作された材を方形孔のある部分から切断して作出された板材である。両面や側面は手斧による平滑加工を行っており、建築部材もしくはネズミ返しを二次利用しようとしたものか。長さ21.5cm、幅21.6cm、厚さ4.3cmを測る。



第90図 切断材・転用品⑧ (1/6)